

おお まや せん げん さま こ ふん

市原市大厩浅間様古墳調査報告書

1 9 9 9

株 式 会 社 一 研
財団法人 市原市文化財センター



大厩浅間様古墳全景（南西上空より）



（中央上層の穴の有る位置が1号主体部棺底で、それより上層がローム土のみで覆った状況がよくわかる） 墳丘盛土（西より）



1号主体部全景



1号主体部副葬品検出状況



1～3号主体部副葬品

序 文

東京湾東岸の房総半島中央部に位置する市原市は、先史より自然環境に恵まれた気候温暖な地域であります。市内各所には先人たちの足跡である遺跡が豊富に認められ、このことは、千葉県下でも有数の貝塚である西広貝塚・山倉貝塚・祇園原貝塚をはじめとして、上総国分僧寺跡、尼寺跡などに代表される数多くの遺跡の存在が示しているところであります。

近年千葉県は、首都圏に接することから人口急増に伴う宅地開発ならび道路網の整備が進展してまいりましたが、それに伴い発掘調査も急激な増加を示しております。当市原市におきましても、このような急増する開発行為と、それに伴う埋蔵文化財の調査が飛躍的に増加しております。今日ほど地域開発と埋蔵文化財保護との調和を深く求められている時はないと言えます。また、社会教育や地域の生涯教育の一助としての埋蔵文化財の必要性和その責任はますます重要になりつつあります。今回本報告書でご報告いたします大厩浅間様古墳もこのような背景のもと、民間の開発に伴う事業として行われました。

本報告書は、これらの調査成果を収録したものであります。これらの資料が、長く保存され、研究者のみならず、博物館等の社会教育施設をとおして、広く市民の方々の文化保護思想の育成に役立つとともに教育資料としてご利用いただければ幸いに存じます。

最後に、この調査にあたりご指導、ご協力を賜りました株式会社丸山組、株式会社一研、文化庁、千葉県教育庁、市原市教育委員会を始め多くの方々に対して心より厚くお礼申し上げます。

平成 11 年 3 月

財団法人 市原市文化財センター

理事長 小 茶 文 夫

例 言

1. 本書は、千葉縣市原市大厩字川上台 1 3 9 5 - 1 地先に所在する大厩浅間様古墳の発掘調査報告書である。
2. 調査は、民間事業の宅地開発に伴い実施したものである。
3. 発掘調査は、昭和59年度に株式会社丸山組、平成元年から2年度に株式会社一研の委託を受け、千葉県教育委員会、市原市教育委員会の指導のもと、財団法人市原市文化財センターが実施した。
4. 発掘調査および整理作業は以下のとおり行った。
(遺跡コード セ 1 8) 本調査 昭和59年 5 月15日～59年 9 月20日 担当者 浅利幸一
田所 真
平成 2 年 1 月10日～2 年 6 月30日 担当者 浅利幸一
整理作業 平成 2 年 7 月 1 日～3 年 3 月31日 担当者 浅利幸一
5. 本書の原稿執筆は、浅利幸一・田所真が行った。
6. 本書の写真図版は、田所真が担当した。
7. 本書に使用した方位は、座標北である。
8. 本書に使用した遺跡位置原図は、第 1 図に市原市都市計画図（昭和54年の 1 : 10,000）を第 2 図に市原市地形図（昭和40年の 1 : 3,000）を使用したものである。
9. 1 号主体部のガラス玉および管玉の X 線写真は、国立歴史民俗博物館の永嶋正春氏による。
10. 発掘調査から整理作業の過程で、株式会社丸山組、株式会社一研、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会文化課の諸機関よりご指導、ご協力を賜り、厚くお礼申しあげます。

凡 例

1. 遺構・遺物の挿図の縮尺は、それぞれ挿図中に縮尺を示した。
2. 方位は、座標北である。
3. 遺構断面図、水平線上の数字は、海拔高度を示す。
4. 遺構規模は、確認面の規模を示す。
5. 玉類等の重量測定には、島津製作所電子計 A E L - 2 0 0 を使用した。
6. 墳丘下竪穴住居跡の主軸方位については、炉跡の位置から推定される平面形の中軸線を基準としたが、平面形が不明なものについては長軸・短軸を明記して方位を示した。
7. 墳丘下竪穴住居跡の床面積は、壁溝を含めた法面下の範囲を計測した。

財団法人 市原市文化財センター組織表

昭和59年度（発掘調査）

役 員

理 事 長	教育委員会教育長	星野 一郎
副理事長	教育委員会教育指導部長	横濱 辰夫
常務理事	専 任	井原 茂
理 事	早稲田大学名誉教授	滝口 宏
理 事	和洋女子大学教授	寺村 光晴
理 事	姉崎神社宮司	海上 信久
理 事	市原市企画部長	櫻井 徹郎
理 事	市原市総務部長	松崎 良一
理 事	市原市都市部長	中島 英夫
理 事	市原市総務部財政課長	松下 隆
監 事	市原市会計課長	白鳥 一夫
監 事	市原市教育委員会総務課長	山口 節

職 員

庶務課	課 長	小茶 文夫
	主 事	浅利 幸一
	主 事 補	相野 光江
	事 務 員（嘱託）	秋田 晴美
	事 務 員（嘱託）	塚本 和江
調査課	課 長	郷田 良一
	主任調査研究員	山口 直樹
	調 査 研 究 員	宮本 敬一
	調 査 研 究 員	米田耕之助
	（兼）調査研究員	浅利 幸一
	調 査 研 究 員	近藤 敏
	調 査 研 究 員	高橋 康男
	調 査 研 究 員	田所 真
	調査研究員（嘱託）	鈴木 英啓
	事 務 員（嘱託）	高浦 貞子

平成元年度

役 員

理 事 長	教育委員会教育長	星野 一郎
副理事長	教育委員会社会教育部長	大野 義規
常務理事	専 任	須田 昇三
理 事	早稲田大学名誉教授	滝口 宏
理 事	和洋女子大学教授	寺村 光晴
理 事	姉崎神社宮司	海上 信久
理 事	市原市企画部長	根本 正夫
理 事	市原市総務部長	宮崎 芳雄
理 事	市原市都市部長	地引 希壹
理 事	市原市財務部財政課長	安藤 隆一
監 事	市原市会計課長	佐久間 章
監 事	市原市教育委員会総務課長	小宮 仁

職 員

庶務課	課 長	田丸 萬富
	主 事 補	大鐘 光江
	事 務 員（嘱託）	秋田 晴美
		（H1. 9. 30まで）
	事 務 員（嘱託）	石渡あゆみ
調査課	課 長	矢戸 三男
	係 長	宮本 敬一
	主任調査研究員	田中 清美
	主任調査研究員	浅利 幸一
	調 査 研 究 員	大村 直
	調 査 研 究 員	近藤 敏
	調 査 研 究 員	高橋 康男
	調 査 研 究 員	木對 和紀
	調 査 研 究 員	忍澤 成視
	調 査 研 究 員	田中 茂良
	調査研究員（嘱託）	田中 新史
	調査研究員（嘱託）	半田 堅三
	事 務 員（嘱託）	高浦 貞子

平成2年度

役 員

理 事 長	教育委員会教育長	星野 一郎
副理事長	教育委員会社会教育部長	栗林 繁
常務理事	専 任	淵本 献司
理 事	早稲田大学名誉教授	滝口 宏
理 事	和洋女子大学教授	寺村 光晴
理 事	姉崎神社宮司	海上 信久
理 事	市原市企画部長	根本 正夫
理 事	市原市総務部長	露崎 繁
理 事	市原市財務部長	石井 作二
理 事	市原市都市計画部長	坂本 忠夫
監 事	市原市会計課長	佐久間 章
監 事	市原市教育委員会総務課長	小宮 仁

職 員

庶務課	課 長	田丸 萬富
	主 事	大鐘 光江
	主 事	永野 健一
調査課	課 長	矢戸 三男
	主任調査研究員	田中 清美
	主任調査研究員	浅利 幸一
	調 査 研 究 員	大村 直
	調 査 研 究 員	近藤 敏
	調 査 研 究 員	高橋 康男
	調 査 研 究 員	木對 和紀
	調 査 研 究 員	忍澤 成視
	調 査 研 究 員	田中 茂良
	調査研究員（嘱託）	田中 新史
	調査研究員（嘱託）	半田 堅三
	主 事	高浦 貞子

本文目次

序文

例言

凡例

財団法人市原市文化財センター組織表

第1章 調査の経緯と歴史的環境	1
1 調査にいたる経緯	1
2 調査結果	1
3 遺跡の位置と歴史的環境	1
第2章 古墳の調査	7
1 古墳の現況	7
2 調査方法と経過	7
3 浅間宮祠と石塔	9
4 主体部と副葬品	11
(1) 1号主体部と副葬品	11
(2) 2号主体部と副葬品	25
(3) 3号主体部と副葬品	27
5 周溝の調査	28
6 盛土と棺の設置	28
7 墳形の復元	35
8 墳丘出土の土器	35
9 盛土内出土の土器	40
第3章 墳丘下の遺構と遺物	44
1 墳丘下の状況	44
2 竪穴住居跡と出土遺物	47
3 方形周溝墓と出土遺物	61
4 その他の遺構と出土遺物	70
1号土壇	70
1号溝	73
2号溝	73
第4章 まとめ	73

表目次

第1表 1号主体部出土勾玉法量および観察表	19
第2表 1号主体部出土琥珀玉法量および観察表	21
第3表 1号主体部出土ガラス製品法量および観察表	22
第4表 1号主体部出土管玉法量および観察表	24
第5表 2号主体部出土滑石製臼玉・ガラス小玉法量および観察表	25
第6表 3号主体部出土滑石製臼玉法量および観察表	27

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図と周辺の遺跡分布図	2	第28図	1号住居跡焼土検出状況と出土遺物	49
第2図	遺跡周辺の地形図	4	第29図	2号住居跡と出土遺物	50
第3図	大厩浅間様古墳現況墳丘測量図	8	第30図	3号住居跡と出土遺物	50
第4図	墳頂部浅間宮祠配置図	9	第31図	4号住居跡と出土遺物	51
第5図	浅間宮祠石塔類実測図	10	第32図	5・6号住居跡と出土遺物	53
第6図	1・2・3号主体部検出状況	13	第33図	5・6号住居跡出土遺物	55
第7図	1号主体部副葬品検出状況	15	第34図	7号住居跡と出土遺物	55
第8図	1号主体部玉類検出状況(1)	16	第35図	8号住居跡と出土遺物	56
第9図	1号主体部玉類検出状況(2)	17	第36図	9号住居跡	57
第10図	1号主体部副葬品(1)	18	第37図	9号住居跡出土遺物	58
第11図	1号主体部副葬品(2)	20	第38図	10号住居跡と出土遺物	59
第12図	1号主体部副葬品(3)	23	第39図	11号住居跡と出土遺物	60
第13図	2号主体部副葬品と出土状況	26	第40図	1号方形周溝墓	62
第14図	3号主体部副葬品と出土状況	26	第41図	1号方形周溝墓主体部と出土遺物	63
第15図	南側トレンチ周溝検出状況	29	第42図	2号方形周溝墓	64
第16図	北側斜面土層断面	30	第43図	2号方形周溝墓主体部と出土遺物	65
第17図	墳丘土層断面	31	第44図	3号方形周溝墓	66
第18図	古墳復元図	34	第45図	3号方形周溝墓出土遺物	67
第19図	古墳出土遺物(1)	36	第46図	4号方形周溝墓	68
第20図	古墳出土遺物(2)	38	第47図	4号方形周溝墓主体部	69
第21図	古墳出土遺物(3)	39	第48図	1号土壙	70
第22図	古墳盛土出土遺物(1)	42	第49図	1号溝と出土遺物	71
第23図	古墳盛土出土遺物(2)	43	第50図	2号溝と出土遺物	72
第24図	墳丘下地形測量図	44	第51図	焼成前底部穿孔壺形土器比較資料	74
第25図	墳丘下旧表土層断面	45	第52図	大厩浅間様古墳と菊間新皇塚古墳 出土管玉計測比較図	77
第26図	墳丘下遺構全体図	46			
第27図	1号住居跡	48			

図 版 目 次

巻頭図版 1	大厩浅間様古墳全景（南西上空より） 墳丘盛土（西より）	図 版 5	墳丘土層B-B' 上層部（北西から） 墳丘土層B-B' 下層部（北から） 墳丘土層A-A' 下層部中央付近の円錐台 形盛土
巻頭図版 2	1～3号主体部副葬品 1号主体部全景 1号主体部副葬品検出状況	図 版 6	墳丘下の状況と1号住居跡・1号住居跡 2号住居跡・3号住居跡 4号住居跡・5号と6号住居跡 7号住居跡・8号住居跡
図 版 1	古墳近景（南から） 墳頂部浅間宮祠近景・墳丘東側近景 墳丘北側斜面近景（東から）・墳丘北側斜面 近景（西から）	図 版 7	9号住居跡・11号住居跡 1号方形周溝墓・同主体部 2号方形周溝墓・同遺物出土状況 3号方形周溝墓・同遺物出土状況（南溝）
図 版 2	南側周溝トレンチ調査全景・周溝土層（墳 丘側から） 周溝土層（南から）・北側斜面近景 墳頂部土層（南から）	図 版 8	4号方形周溝墓と墳丘下西半分 4号方形周溝墓主体部 1号溝・2号溝 墳丘下西半分・1号土壙
図 版 3	1号主体部全景（西北から）・同全景（東南 から） 1号主体部覆土（中央付近）・同覆土（東側） 1号主体部副葬品出土状況・同覆土（中央 付近）	図 版 9	墳丘出土土器(1)
図 版 4	1号主体部埋設状況土層・同主体部埋設状 況土層（中央付近） 2・3号主体部全景（東から） 2・3号主体部全景（西から）・2号主体部 副葬品出土状況 2・3号主体部全景（西から）・3号主体部 副葬品出土状況	図 版 10	墳丘出土土器(2)
		図 版 11	墳丘出土土器(3)
		図 版 12	盛土出土土器
		図 版 13	浅間宮石祠と石塔類・墳丘下住居跡出土遺 物
		図 版 14	墳丘下の住居跡・方形周溝墓・溝出土遺物
		図 版 15	1号主体部ガラス玉類X線写真 1号主体部管玉X線写真

第1章 調査の経緯と歴史的環境

1 調査の経緯

市原市大厩字川上台1395-1地先において株式会社丸山組の宅地造成が計画されたためそれに先がけて、昭和58年5月11日付けで株式会社丸山組より、「埋蔵文化財の所在の有無およびその取り扱いについて」の照会が、千葉県教育委員会教育長および市原市教育委員会教育長宛てに提出された。これを受けて現地踏査等を行ったところ、昭和58年6月10日付けで千葉県教育委員会教育長より、古墳1基の回答がなされた。このことから、株式会社丸山組、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会文化課の三者は埋蔵文化財の取扱いについて協議を行い、地区内に所在する埋蔵文化財のうち、造成工事によって影響をおよぼす範囲について記録保存の為発掘調査を実施することとなった。本調査は昭和59年5月15日～9月20日まで行ったが、埋葬施設の調査が終了した時点で一時本調査を中断することとなった。その後、平成元年7月7日付けで、株式会社一研より再度の照会を受け、平成2年1月10日～同年6月30日まで本調査を実施し、1次・2次を合わせた調査面積は2,171㎡である。

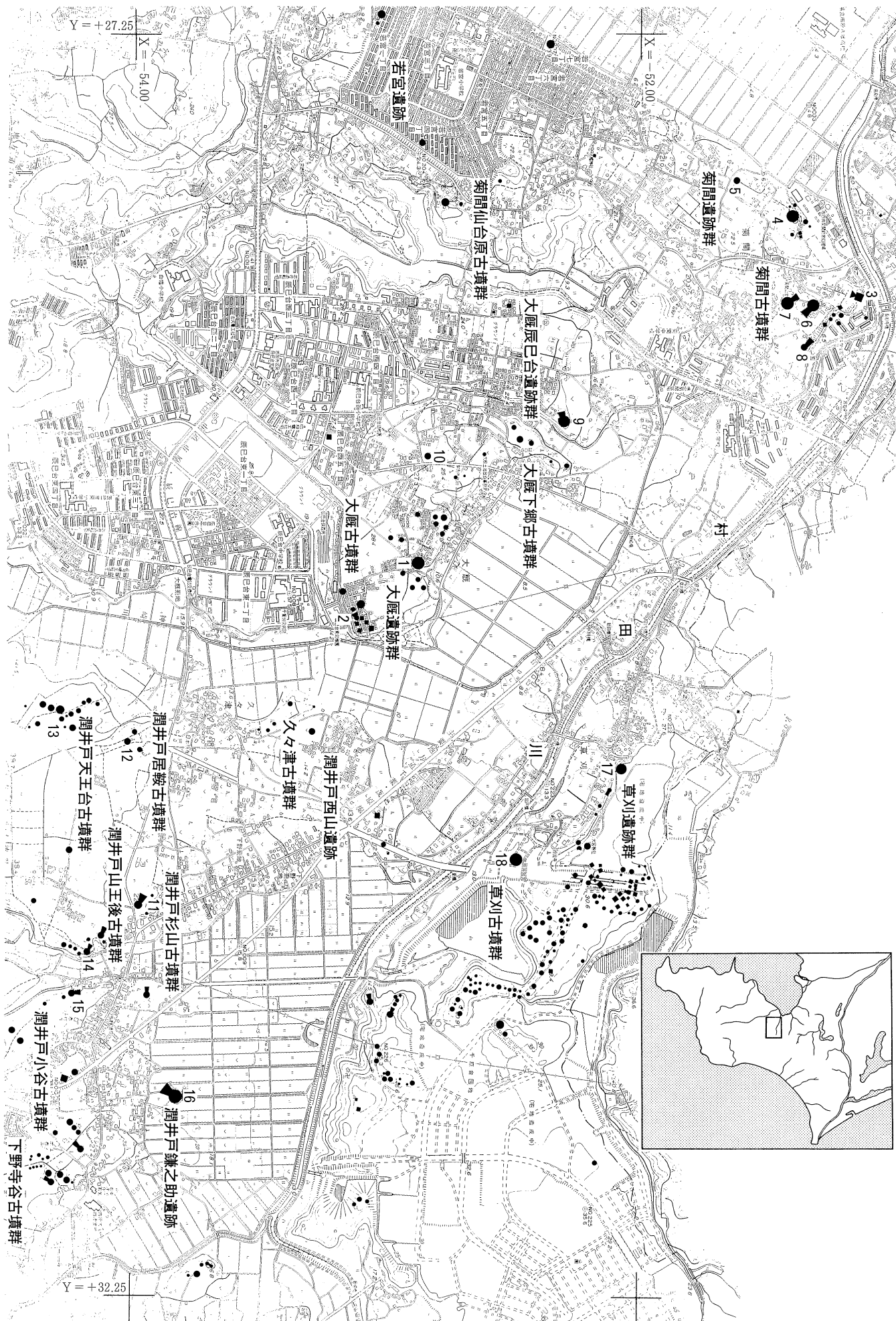
2 調査結果

古墳は、周囲が宅地化され調査箇所が墳丘と一部の周溝部分に限られ正確な形状を把握するだけの十分な調査を実施できなかったが、張り出し付きの可能性を残す円墳で墳丘裾にテラス状の平坦面を巡らし、周溝底面内径で50m以上、墳頂中央の盛土高さ6.9mを計測した。埋葬施設は、いずれも割竹形木棺の痕跡を示し、1号主体部全長11.3m、2号主体部全長4.71m、3号主体部全長2m以上を測る3基の主体部を検出した。長大な1号主体からは珠文鏡1面・石釧1点・刃子1点・ガラス三連玉1点・ガラス勾玉1点・瑪瑙勾玉2点・琥珀勾玉8点・琥珀玉類24点・ガラス小玉32点・管玉55点、2号主体から短剣1点・ガラス小玉2点・滑石製臼玉2点、3号主体からヤリガンナ2点・楔形鉄製品1点・鏃片2点・滑石製臼玉7点の副葬品を検出した。また、墳丘表土から焼成前底部穿孔の二重口縁壺片の検出を見た。

墳丘下層からは、弥生中期の方形周溝墓4基と同時期の台地を囲むV字溝や、弥生後期～古墳時代初頭の竪穴住居跡11軒を検出し、中期の方形周溝墓3基の周溝内からは、壺形土器が出土し、所属時期を明確にできる好資料を得た。

3 遺跡の位置と歴史的環境

大厩浅間様古墳は、千葉県市原市大厩字川上台に所在し、房総半島西岸部の基部を西流して東京湾に注ぐ村田川下流域左岸の仮称市原台地北東辺部の中央に位置する。眼下には、村田川の開積した河岸平野一帯が一望でき好適地に位置する。古墳は、東京湾旧海岸線より南東方向に直線距離にして約4km東に入った洪積台地上に在り、標高は27～28m、北側水田面との比高差約18mを測る。古墳の位置する台地は、北に村田川、西に村田川支流の神崎川が北流し、東と南側に小支谷が入り込み台地を囲み、南北350～700m・東西1kmほどの独立台地を呈している。標高は25～30mほどで西半分はやや起伏を伴い、古墳の占地する東側はほぼ平坦である。北側台地下縁辺には旧大厩の村落が点在し開発以前の村落の景観を僅かに留めているが、台地上には畑地が広範囲に広がるものの昭和30年代以降ミ



第1図 遺跡位置図と周辺の遺跡分布図 (1 : 20,000)

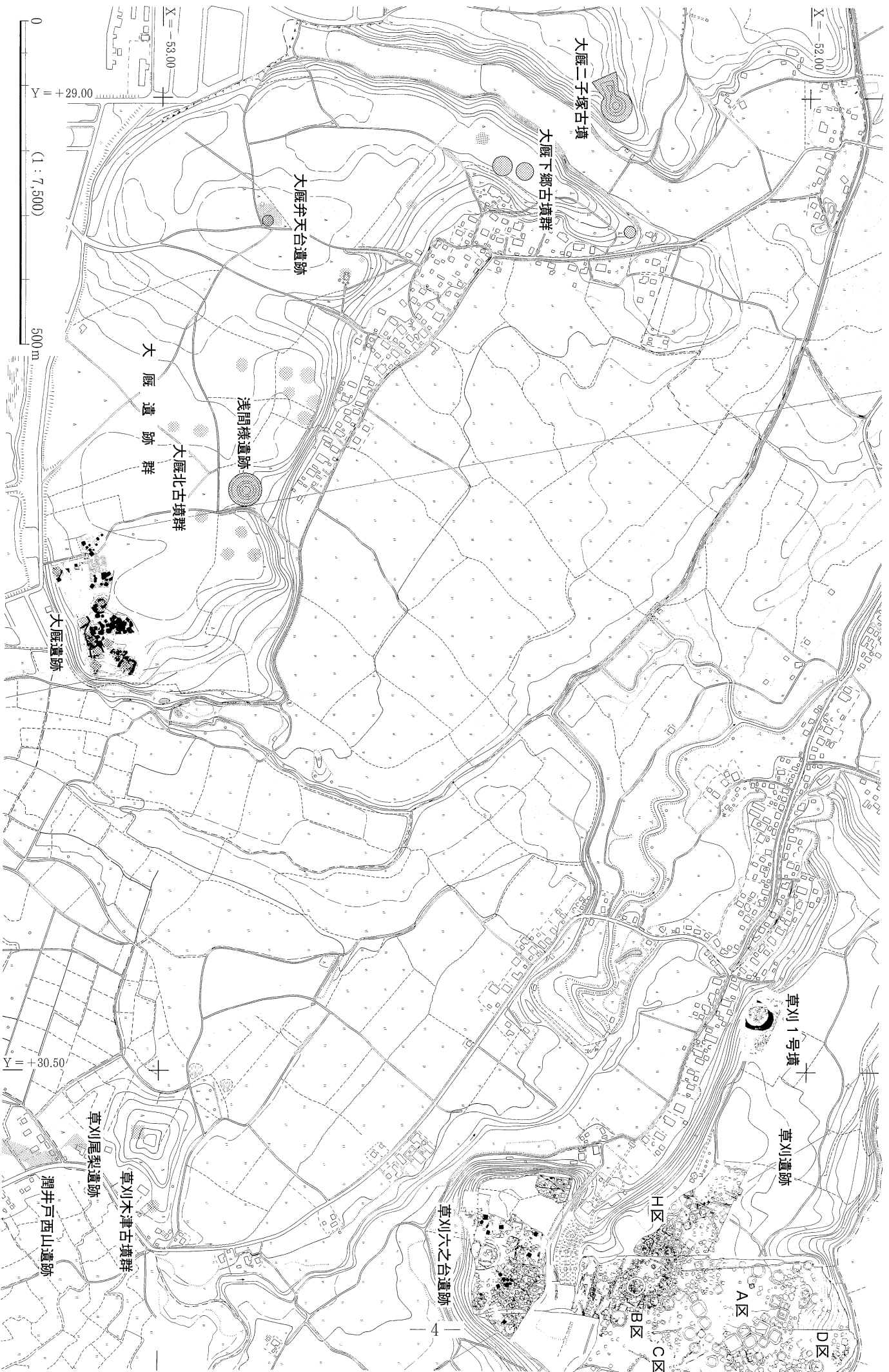
ニ開発による宅地化が進行し、旧景観と共に遺跡が失われつつある。大厩浅間様古墳の周辺の畑地には僅かな起伏が見られ、墳丘の削平された小古墳の存在を物語っている。また、周辺からは縄文時代から古墳時代の土器が広く散布し、この台地一面に縄文時代から古墳時代の遺跡が存在することが容易に推測できる。

周辺地域での考古学的な調査では、村田川を挟んで対岸に位置する千原台地区での大規模なニュータウン建設計画に伴い、昭和50年代前半から発掘調査が行われている。地区内の26万平方メートルにおよぶ草刈遺跡群では、先土器時代に始まり縄文時代から平安時代へ連綿とつながる大規模な遺跡が調査されている。古墳では、草刈A区⁽¹⁾99号の前方後方墳を中心とする40基ほどの前期方墳群が、六之台遺跡⁽²⁾ではそれに後続する滑石製の腕飾片を出土した径35mの大形円墳草刈3号墳が、草刈F区⁽³⁾では滑石製臼玉や多種の鉄製の農耕具および武器を埋納した径35mの3基の埋葬施設を有する大形の円墳草刈1号墳が、それぞれ弥生時代から古墳時代の大規模な集落跡と伴に調査され千葉県下を代表する遺跡群として知られ、弥生～古墳時代の村田川右岸の拠点が明らかにされつつある。

一方、大厩浅間様古墳の占地する村田川河口左岸の市原台地の調査では、台地南に隣接し昭和30年代に大規模に造成された辰巳台地区の様相が不明だが、2km下流の河口一帯を直接望む台地先端部には、菊間新皇塚古墳、径44m以上の円墳の菊間天神山古墳⁽⁴⁾、復元全長75mの前方後円墳の菊間権現山古墳、全長61mの前方後円墳の菊間東関山古墳、全長51mの姫宮古墳が近接し築造され、大形前方後円墳を主体とする菊間国造代々の墓域とされる菊間古墳群が形成されている。同古墳群での本格的な調査は、後方部径40mほどの前方後方墳と推測される前期古墳の新皇塚古墳で行われただけであるが、2基の埋葬施設が検出され南榔では珠文鏡のほか武器や農耕具の鉄製品が、また北榔からは内行花文鏡・石釧などの他多種の玉類と武器や農耕具の鉄製品が副葬され、墳丘からは焼成前底部穿孔の二重口縁壺を検出している。同古墳は大厩浅間様古墳と副葬品で共通点が見られ、二重口縁壺等の比較により大厩浅間様古墳より古相を呈し、墳形こそ方丘系と円丘系と相反した様相を呈するものの、副葬品の組成で類似点を認めることができ最重要視される。

古墳の同台地上南200mの至近距離では大厩遺跡⁽⁵⁾が調査され、古墳9基・弥生時代竪穴住居跡75軒・古墳時代竪穴住居跡15軒などを検出している。古墳9基のうち3基が古墳時代前期の五領式土器の範疇に含まれる土器を、3基が和泉式土器をそれぞれ出土し、古墳時代前期から中期の四世紀代から五世紀代の築造で、同地域の主墳である大厩浅間様古墳を考える上で菊間新皇塚古墳同様重要視される遺跡である。西400mの大厩弁天台遺跡⁽⁶⁾では、盛土の削平された墳丘径22～23mの五世紀代の鬼高期の円墳1基の他、2軒の古墳時代前期の竪穴住居跡が調査されている。大厩下郷古墳群は5基ほどの径7～26mの円墳から構成されるが現在は3基を残すのみである。大厩二子塚古墳は菊間古墳群と大厩浅間様古墳のはぼ中間に位置し、浅間様古墳から下流800mの台地上の好適地に在る、未調査であるが全長70m、後円部径約40mを測り、墳形から四世紀後半代の築造と考えられている。

大厩浅間様古墳の東側の神崎川を挟んだ対岸には、北から潤井戸西山遺跡⁽⁷⁾・潤井戸尾梨遺跡⁽⁸⁾・久々津古墳群・潤井戸居鞍古墳群・潤井戸天王台古墳群などが分布し、更に南側の神崎川上流には出現期古墳で知られる小田部古墳が所在する。潤井戸西山遺跡と尾梨遺跡では、弥生時代の環濠集落の一部と共に古墳時代の集落跡と掘立柱建物跡・四脚門跡・L字形の柵列塀が調査され、四脚門跡や柵列塀は鬼高期直前から中頃までの五世紀から六世紀前半代の居館跡である可能性が強く指摘され、同地区



第2図 遺跡周辺の地形図 (1:7,500)

の古墳時代を解明する上で欠かせない遺跡である。潤井戸居鞍古墳群⁽⁹⁾は3基からなる群集墳で、墳丘径約20mほどの和泉期の方墳1基と円墳1基が調査されている。潤井戸天王台古墳群⁽¹⁰⁾は26基からなる群集墳で、五領期の方墳2基と円墳1基の他後期の円墳3基が調査され、小古墳から形成される群集墳での主墳の実態が明らかにされつつある。小田部古墳^(11・12)は、墳丘径22mほどの円墳で周溝の一方が途切れ開口部を有することが確認されており、円丘形に突出部を有するものと想定され、市原台地の南西端に位置する神門古墳群と共に出現期古墳の評価がさだまり、主体部から管玉3・ガラス小玉218・ガラス丸玉64点以上と共に墳頂部からは東海系の元屋敷式新段階の高坏が検出されている。

更に、西側の村田川沖積地に面して、潤井戸杉山古墳群・潤井戸山王後古墳群⁽¹³⁾・潤井戸小谷古墳群⁽¹⁴⁾・下野寺谷古墳群・潤井戸高野前古墳・潤井戸鎌之助遺跡⁽¹⁵⁾が分布する。3基からなる杉山古墳群の主墳は全長60mの前方後円墳で墳形から五世紀代とされている。山王後古墳群は杉山古墳群の南に隣接し、全長42mと35mの前方後円墳2基を含む10基からなり、後出する前方後円墳1基は六世紀後半代に位置づけられている。小谷古墳群では、台地先端部の全長40～45mの前方後円墳1基が調査され、墳丘裾に下総型円筒埴輪を巡らしている。高野前古墳は沖積地に単独で位置し、墳丘は既に削平され、周囲を巡る農道と地割り線からその存在が想定され、復元全長は90mを測る。鎌之助遺跡では、縄文中期末～後期の地点貝塚、弥生中期の集落跡と方形周溝墓、古墳時代前期～後期の集落跡、奈良～平安時代の集落跡がそれぞれ調査され西山遺跡と共に集落跡の好資料である。

東側2kmに位置する若宮地区も辰巳地区同様調査例が少なくその実態については不明な点が多い。若宮遺跡⁽¹⁶⁾は市原台地北側の東京湾を見下ろす台地上に立地し、昭和41年に調査が行われている。部分的な調査が行われ、C地区のトレンチ調査で26軒の弥生中期～平安時代の竪穴住居跡が調査された他、径30m以上の円墳の存在も明らかにされている。

市原台地南端区域の国分寺台遺跡群の、弥生時代～古墳時代前期の集落では、国分僧寺西辺部下層の中台遺跡⁽¹⁷⁾、国分尼寺下層⁽¹⁸⁾、坊作遺跡^(19・20)、加茂遺跡B地点⁽²¹⁾、根田台遺跡⁽²²⁾、根田代遺跡⁽²³⁾、御林跡遺跡⁽²⁴⁾、南中台遺跡⁽²⁵⁾、蛇谷遺跡^(26・27)、長平台遺跡⁽²⁸⁾などが調査されている。国分寺台の東に隣接する山田橋表道や大塚台遺跡⁽²⁹⁾も同時期の主要遺跡である。前期古墳は諏訪台古墳群^(31・32・33)に集中する傾向にあり、他に諏訪台古墳に隣接する天神台遺跡、根田辺田古墳群⁽³⁴⁾、神門古墳群などが上げられる。

中台や南中台遺跡からは北陸系の5の字状口縁の甕や器台と共に竪穴住居跡形態までもがその系列下にあり注目される。根田台や根田代遺跡では、弥生中期の環濠集落跡と方形周溝墓群が形成される。御林跡遺跡では、弥生後期の竪穴住居跡や方形周溝墓から板状鉄斧が出土し、竪穴住居跡からタタキ目整形の甕などを出土し天神台遺跡と共に畿内的な色彩を匂わせている。

古墳では、出現期古墳の神門古墳群3基を始め、山田橋大塚台遺跡では弥生後期の集落後と共に径30m以上の出現期古墳の可能性の強い円墳の一部が調査されている。諏訪台古墳群では、前方後方墳を含む群集墳が調査され、盤龍鏡や剣・槍・鉄斧などと共に東海系の二重口縁壺や畿内系土器などが検出されている。特に、円墳で墳丘径32～33mの辺田1号墳からは、武具と共に焼成前底部穿孔壺形土器が検出され大厩浅間様古墳に近時する古墳として注目される。

遺跡名称

1. 大厩浅間様古墳
2. 大厩遺跡
3. 菊間新皇塚古墳
4. 菊間天神山古墳
5. 菊間手永台1号墳
6. 菊間権現山古墳
7. 菊間東関山古墳
8. 菊間姫宮古墳
9. 大厩二子塚古墳
10. 大厩弁天台古墳
11. 潤井戸杉山古墳
12. 潤井戸居鞍古墳群
13. 潤井戸天王台古墳群
14. 潤井戸山王後1号墳
15. 潤井戸小谷1号墳
16. 潤井戸高野前古墳
17. 草刈1号墳
18. 草刈3号墳

註

- (1) 小久貫隆史他 1983年『草刈遺跡』「千原台ニュータウンⅡ」財団法人千葉県文化財センター
- (2) 白井久美子他 1994年『千原台ニュータウンⅦー草刈六之台遺跡ー』財団法人千葉県文化財センター
- (3) 榊原弘二・海老原充・高田博・田井知二他 1997年『千原台ニュータウン7ー草刈1号墳ー』財団法人千葉県文化財センター
- (4) 斎木 勝・種田齊吾・菊地真太郎他 1974年『市原市菊間遺跡』財団法人千葉県都市公社
- (5) 三森俊彦・阪田正一他 1974年『市原市大厩遺跡』財団法人千葉県都市公社
- (6) 大村直他 1989年『市原市大厩弁天台遺跡』財団法人市原市文化財センター
- (7) 鈴木英啓 1986年『潤井戸西山遺跡』財団法人市原市文化財センター
- (8) 半田堅三 1991年『草刈尾梨遺跡』「第6回市原市文化財センター遺跡発表会要旨」財団法人市原市文化財センター
- (9) 近藤 敏 1988年『潤井戸居鞍遺跡』「市原市文化財センター年報・昭和63年度」財団法人市原市文化財センター
- (10) 米田耕之助 1992年『潤井戸天王台古墳群』「市原市文化財センター年報・平成4年度」財団法人市原市文化財センター
- (11) 杉山晋作・安藤鴻基・沼沢豊・田中新史 1972年『古墳時代研究Ⅰ 千葉縣市原市小田部古墳の調査』古墳時代研究会
- (12) 大村 直 1991年『小田部向原遺跡』「不特定遺跡発掘調査報告(2)」財団法人市原市文化財センター
- (13) 田中清美他 1982年『祭り野遺跡 山王後1号墳』同調査団
- (14) 高橋康男・浅利幸一 1992年『市原市小谷1号墳』財団法人市原市文化財センター
- (14) 田所真他 1999年『潤井戸鎌之助遺跡』「市原市文化財センター遺跡発表会要旨・平成10年度」財団法人市原市文化財センター
- (16) 市毛 勲・滝山昌彦他 1967年『若宮遺跡(C地区)』「市原市周辺地域の調査・市原市埋蔵文化財調査報告書第3冊」市原市教育委員会
- (17) 田中新史 1982年『古墳の調査』「上総国分寺台発掘調査概報」上総国分寺台遺跡発掘調査団・市原市教育委員会
- (18) 宮本敬一他 1980年『上総国分寺跡の調査』「上総国分寺台発掘調査概報」上総国分寺台遺跡発掘調査団・市原市教育委員会
- (19) 須田 勉・鷹野光行他 1976年『坊作遺跡発掘調査概要』上総国分寺台遺跡発掘調査団・市原市教育委員会
- (20) 須田 勉・鷹野光行他 1977年『上総国分寺台遺跡発掘調査概要Ⅳー坊作遺跡の調査』上総国分寺台遺跡発掘調査団・市原市教育委員会
- (21) 平野元三郎・谷島一馬 1977年『加茂遺跡B地点の調査』「上総国分寺台調査概報」上総国分寺台遺跡調査団・市原市教育委員会
- (22) 半田堅三他 1977年『台遺跡A地点の調査・台遺跡B地点の調査』「上総国分寺台調査概報」上総国分寺台遺跡調査団・市原市教育委員会
- (23) 平野元三郎・谷島一馬・浅利幸一他 1981年『根田遺跡の調査』「上総国分寺台調査概報」上総国分寺台遺跡調査団・市原市教育委員会
- (24) 平野元三郎・谷島一馬他 1979年『御林跡遺跡の調査』「上総国分寺台調査概報」上総国分寺台遺跡調査団・市原市教育委員会
- (25) 須田勉・新田栄治・鷹野光行他 1977年『上総国分寺台遺跡調査報告Ⅳー蛇谷遺跡』上総国分寺台遺跡調査団・市原市教育委員会
- (26) 平野元三郎・谷島一馬他 1975年『天神台遺跡発掘調査概報』上総国分寺台遺跡調査団・市原市教育委員会
- (27) 浅利幸一他 1985年『天神台遺跡』「市原市文化財センター年報ー昭和57年・昭和58年」財団法人市原市文化財センター
- (28) 半田堅三 1982年『長平台遺跡の調査』「上総国分寺台調査概報」上総国分寺台遺跡調査団・市原市教育委員会
- (29) 近藤 敏 1986年『山田橋表道遺跡』「市原市文化財センター年報・昭和60年度」財団法人市原市文化財センター
- (30) 半田堅三 1996『山田橋大塚台遺跡』「市原市文化財センター年報・平成4年度」財団法人市原市文化財センター
- (31) 須田勉・田中新史 1975年『諏訪台古墳群調査概報』上総国分寺台遺跡調査団・市原市教育委員会
- (32) 田所真他 1985年『諏訪台古墳群』「市原市文化財センター年報・昭和60年」財団法人市原市文化財センター
- (33) 浅利幸一・田所 真他 1986年『諏訪台古墳群』「市原市文化財センター年報・昭和61年」財団法人市原市文化財センター
- (34) 米田耕之助 1985年『根田遺跡』「市原市文化財センター年報・昭和60年」財団法人市原市文化財センター
- (35) 田中新史 1977年『市原市神門四号墳の出現とその系譜』「古代第63号」早稲田大学考古学会
- (36) 田中新史 1984年『出現期古墳の理解と展望 東国神門五号墳の調査と関連して』「古代第77号」早稲田大学考古学会
- (37) 浅利幸一 1989年『神門三号墳』「市原市文化財センター年報・昭和62年」財団法人市原市文化財センター

第2章 古墳の調査

1 古墳の現況

古墳は、北側に視野の開けた台地縁辺部に位置し、周溝部分の北側西半分と西・南側は墳丘裾まで客土が行われ宅地が迫り、北側東半分は土砂取りで、また東側は道路で削平され墳丘のみが残されていた。調査開始時には既に樹木の伐採が終了していたため調査以前の状況は不明だが、墳丘頂上には、本古墳の名称の由来とも言える浅間神社の祠が南を正面にして、墳頂部のほぼ中央に5×8mの範囲を深さ0.5～0.6mほど堀り窪め祭られ、それに通じる参道が墳丘南側をスロープ状に堀り窪めている。参道脇には椎木の巨木の切り株が残され鬱蒼とした雑木林だったことがうかがわれる。北側斜面下端の標高25～26mの間に幅7m程と標高24m前後に僅かな人為的な平坦面が観察されるが、前者は地元の古老によると戦前より猫の額ほどの畑があったと言う。

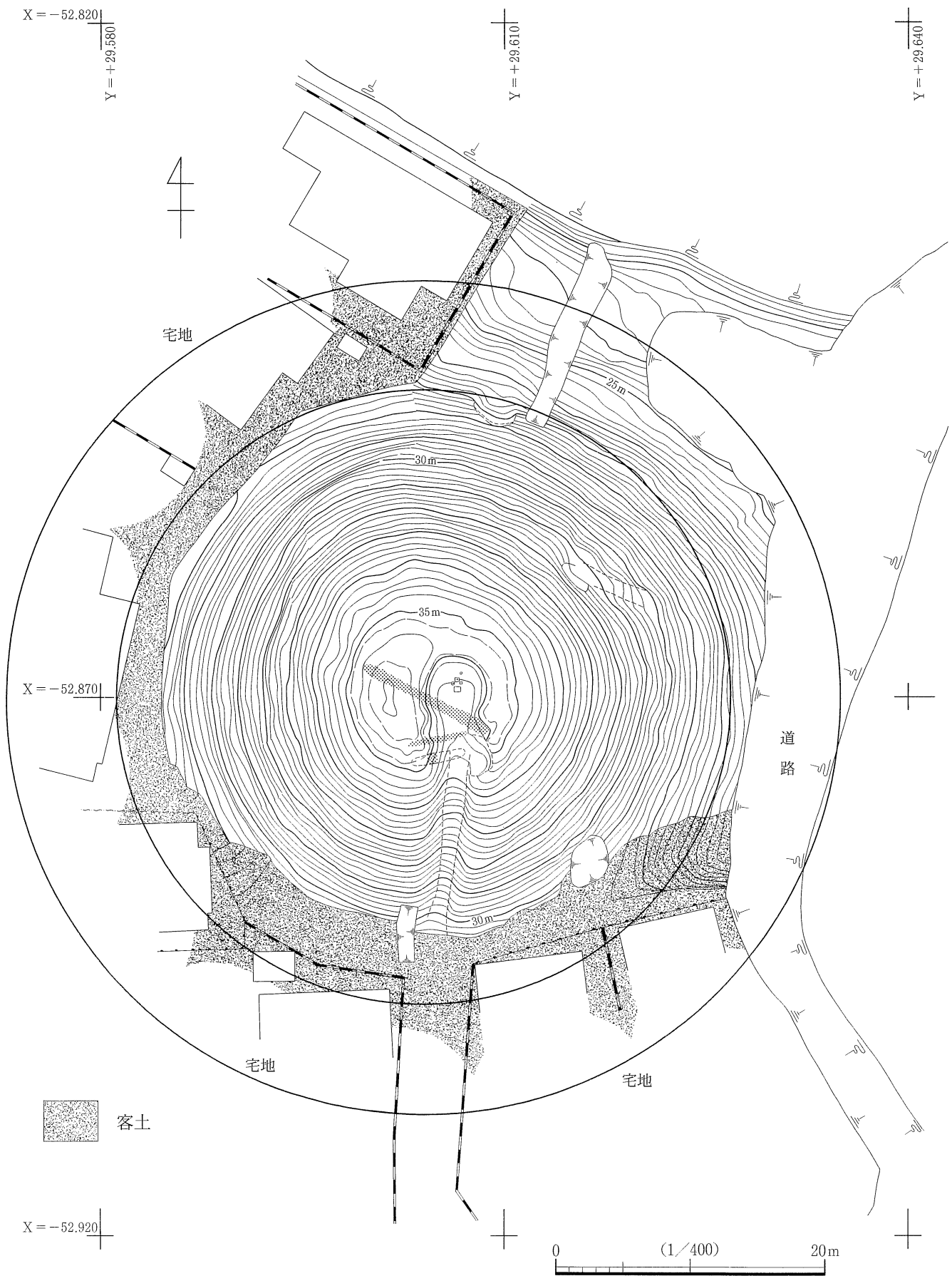
墳形は、測量図の等高線が示すように渦巻き状を呈しほぼ正円形を呈する。墳頂部平坦面は、中央に浅間神社の祠が祭られ窪んでいるが径13mほどを測る。墳丘の見かけの高さは、基点となる墳頂部で標高35.4m・北斜面で24m・東27m・南29.4m・西27.9mを測り、墳頂部との比高差は北側11.4m・東側8.4m・南側6m・西側7.5mを計測する。現況の墳丘径は、東西約45m、南北は北側斜面での基点が問題となるが40～46mを計測する。墳丘の傾斜角度は、28度前後と急傾斜である。

2 調査方法と経過

調査は、通常古墳調査に加え、墳丘下の遺構の調査が予定されることから、それに伴い今後発生する膨大な盛土の除去とその処分を第一に考慮し進めなければならなかった。そこで北側斜面下端の調査を先行し終了させ、そこを大きく堀り窪め一時的な土砂のストック場所として確保し、そこから場外に搬出する方法をとった。しかしながら、古墳盛土量は、2,500m³以上が予測され、一時的なストック場所では60m³を借り置きするのが限界で、当初予定した処分場が遠方であったためその処理には困難を極めたが、幸運にも、地元住民の協力により近隣の畑地に土砂を搬入できた。

当初の調査では、水準点は移行したものの基準点については磁北で任意座標を設定し、手作業での現況測量図作成後、墳丘中心点を基準に四方に土層ベルトを設定し墳丘表土の除去から開始した。墳丘表土は、西側では隣接する民家の植栽に利用され既にロームブロックの混入する盛土が露出する箇所や急斜面にもかかわらず0.5m以上とかなり厚く堆積する箇所が見られ、特に北側で顕著であった。墳丘表土除去の調査では、顕著な出土状況を示す遺物などがなく、出土した土器を墳丘出土の土器として一括収納し、後述する墳丘出土の焼成前底部穿孔二重口縁壺の存在にはこの時点では気が付かなかった。墳丘表土除去に続き、埋葬施設検出のため盛土を10cm毎にスライスし、墳丘を下げ、第2→第3→第1主体部の順で埋葬施設を調査後、第1主体部を埋め戻し、一時調査を中断した。

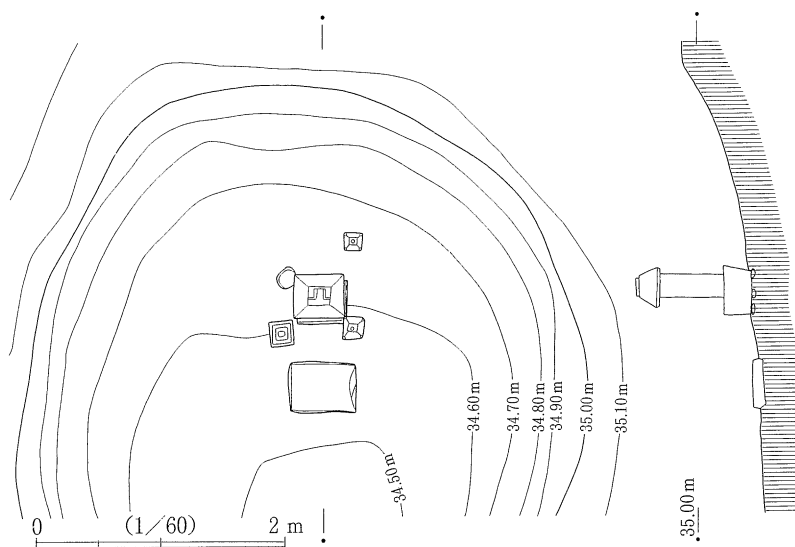
6年後の平成2年調査を再開するにあたり、膨大な盛土の搬出を重機で行うため、技術的な問題から土層観察用のベルトを墳丘中心点をそのままに当初設定した位置から45°振り直して設定した。基準点と水準点は国家座標の3級を新たに設定し、本文では国家座標値を表示した。調査は、第1主体部を再度掘り直し航空写真撮影後、盛土の除去と墳丘盛土層の記録を実施し、墳丘下旧表上面の地形測量を行い、旧表土下の調査を実施した。



第3図 大厩浅間様古墳現況墳丘測量図

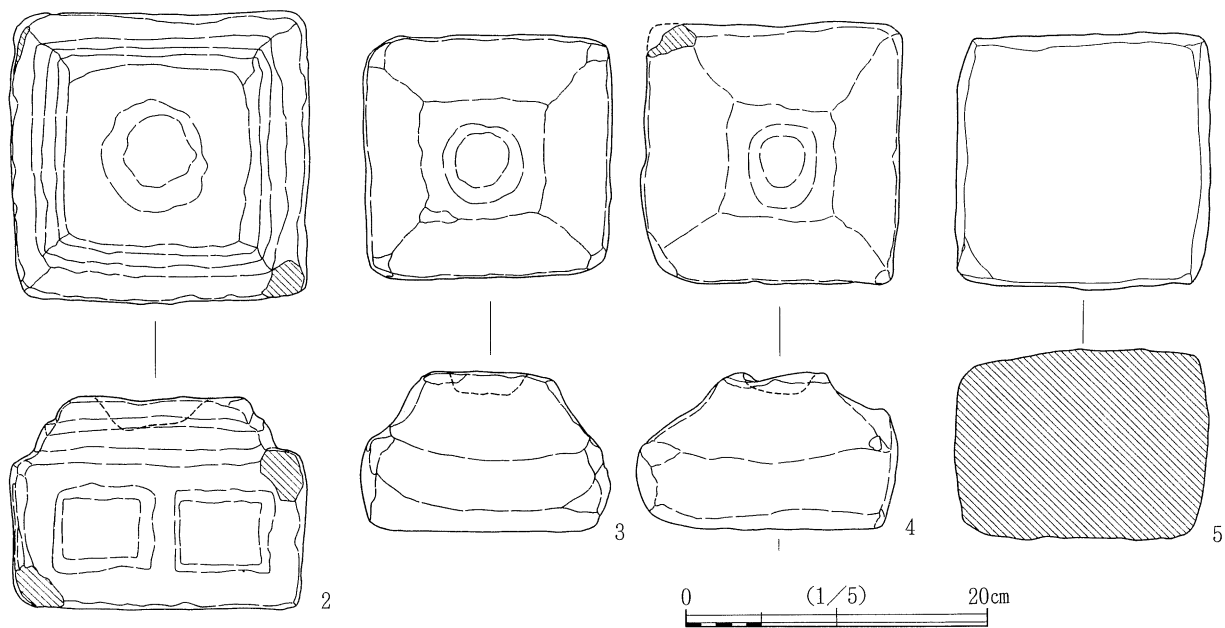
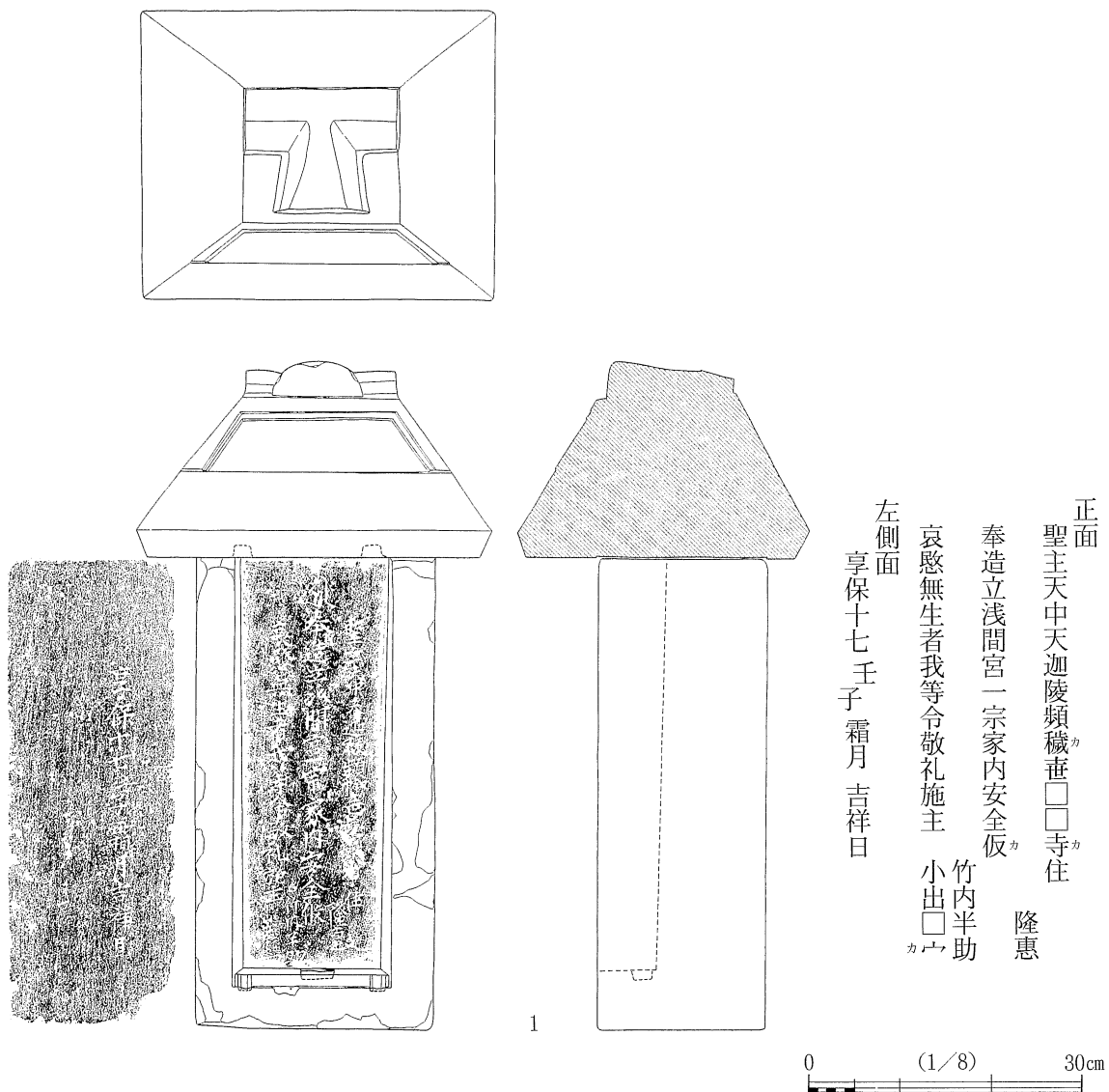
大厩浅間様古墳を祀所とする本浅間宮は石祠であり、陰刻の銘文によって享保十七年(1732)霜月の造立であることが知られる。祭神は、社名より見て、浅間大神木之花佐久夜毘売命であろう。浅間信仰は、神仏習合において菩薩信仰であり、銘文に掲げる梵字が千手観音あるいは如意輪観音を表す(キリーク)であることから見て、誤りであるまい。

社は、浅間様古墳墳頂部南側に平坦面を造り出して祀られている。祀所の標高は、34.5m前後であり、南側台地平坦面との比高差は、約6mを計測している。調査開始の時点で既に旧境内地内の景観を損ねていたが、第4図に示すように、石祠の前面ならびに裏側東部に石塔部材が配されていた。祠は南面しており、参道がこれに向かって延びている。鳥居の有無は確認さ



れていない。石塔部材は、前面西側（第5図2）が、相模型宝篋印塔の基礎部。前面東側（第5図4・5）は、五輪塔地輪の上に火輪を重ねたもの。裏側東部（第5図3）は、五輪塔火輪である。いずれも石祠鞘堂の礎石として転用するために搬入されたものである。復元される鞘堂の平面規模は、柱芯々間で間口一間二尺、奥行き一間二尺五寸であり、間口に比べ奥行きの深い建物と推定される。上屋構造は知り得ないが、流造りであろうか。軒の出が祠前面の敷石に及んでいた可能性もある。石祠の形態や規模および銘文、石塔部材の形態などについては、第5図に示したとおりである。銘文に記された願文は棟札通有のものであるが、一部判読困難な箇所が認められる。殊に、正面一行目第十一文字以降には寺院の名称が入るが、後世に人為的に削り取られており判読できない。廃仏毀釈によるものと考えられよう。削除された寺院の名称としては、旧菊間村大厩区の延命寺が想定される。

— 9 —



第5図 浅間宮祠石塔類実測図

4 主体部と副葬品

古墳からは、遺骸を納めた埋葬施設である主体部が棺床面標高を異にして3基検出された。検出は2→3→1号の順に検出し、規模の順に1～3号主体部とした。

(1) 1号主体部と副葬品

主体部検出は墳丘を0.1mづつスライスし順次掘り下げ、墳頂下1.8mで東西方向に締まりの悪いロームブロックが転々とし、陥没状況と思われる痕跡が僅かに認められたため、さらに0.1m下げた標高33.5mでそれはより明確なものとなった。しかしながら、木棺を覆う盛土は黄褐色のローム土・ロームブロックを主にし、色調や土質の変化では容易に確認できない状況にあった。運良く陥没の中央付近に設けた土層ベルトに沿ったサブトレで棺床面を強く示唆する朱粒とともに玉類の検出を見ることができた。再度、陥没状況を示す面での精査を行い、主体部平面プランの確認を試みたが、陥没痕跡がやや明らかとなるだけで、墓壇掘方の輪郭や主体部平面プランを明確にできなかった。この陥没痕跡を元に、主体部の規模・方向を想定し、土層観察用のベルトを設定し、棺床面の朱粒やサラサラなローム粒を目安に棺内の調査を行った。壁面は僅かな硬化面をおって検出し、木棺はまったく遺存しておらず、ローム土以外の粘土等の特徴ある他の構築土の使用がなく棺床面に残る朱やそれらの範囲から出土した副葬品の状況から、プラン全体を判断せざるを得なかった。

木棺の全長は1次調査の時点では10.7mとしていたが、2次調査で木棺を被覆する墳丘盛土を観察することによって西側の木口がさらに延長し11.3mを計測した。棺床面幅は中央では約0.7m、両木口では0.9～1.0mを測る。棺床面中央に幅0.3～0.4mの浅い落ち込みが認められ、これが本来の棺床面内側幅にあたるものであろう。長軸方位は、北から大きく東に115°振れ、東西方向に長軸を置いている。棺床面は、標高32.79～32.94mに置き西から東に向かって高さを増し据え置かれ、墳頂からは2.5m、陥没状況を確認した面からは0.7～0.8m下層の位置に棺床面がある。棺高は土層から0.3～0.45mが確認できる。棺床面の東側が高いことや、副葬品出土状況から頭部位置が東に置かれていたと判断される。

棺のほぼ中央には、朱と思われる赤色粒が長さ2.18m・幅0.25mに確認され、鏡・石釧・玉類がこの範囲から出土し、遺骸の置かれた位置を物語っていた。この朱の散布する東端では長さ0.4mに渡って特に濃密に観察され、この範囲には玉類が集中し遺骸頭部の位置を強く示唆している。副葬品は、珠文鏡1点・石釧1点・刃子1点・瑪瑙勾玉2点・琥珀勾玉8点・琥珀玉24点・管玉52点・ガラス勾玉1点・ガラス三連玉1点・ガラス小玉34点出土する。

遺骸は伸展葬を示すもので、仮に被葬者の身長155～160cmとすると、銅鏡が臍に、石釧は右手首、玉類は右肩から首・顔面の鼻にかけて、刃子は額に当たる位置から検出することとなる。玉類は、右肩の極小の管玉から成る一群と瑪瑙勾玉や大形の管玉から成るグループが見受けられる。

副葬品

珠文鏡は東端から4.9mに検出し、青銅鏡で、緑青が生じている。鏡背には朱が付着し、鏡面には布の痕跡を明瞭に残している。径8.03～8.06cm、重さ87.4g(保存処理後)、鏡面は凸状を呈し、0.15～0.2cm反り返る。平縁で縁厚0.26～0.33cm、内区の外周には一段下がって櫛歯文を施し、次に3条の円圈と珠文帯を巡らし珠文33個を数え、7ないし8個間隔で4個が大きく表現されている。紐座には円圈を巡らし、紐高0.6cm程を計る。

1～3号主体部検出状況土層

A－A

1層 黒褐色土層、表土層に小ロームブロック・ローム粒土を含む
 2層 黒褐色土層、多量のロームブロックとローム粒土を含む
 3層 暗黄褐色土層、ロームブロックにローム粒土を含む
 4層 暗黄褐色土層、ローム粒土にロームブロックを含み、締まりが悪い
 5層 暗黄褐色土層、4層よりロームブロックが多く、やや締まる
 6層 暗黄褐色土層、ローム粒土にロームブロックを含み、良く締まる
 7層 暗黄褐色土層、ロームブロックにローム粒土を含み、6層より良く締まる
 8層 暗黄褐色土層、ローム粒土にロームブロックを含み、ややボソボソ
 9層 黒褐色土層、黒褐色土にローム粒土とロームブロックを含む
 10層 暗茶褐色土層、ローム粒土とロームブロック土層で、やや硬く締まる
 11層 暗茶褐色土層、10層より硬く締まる
 12層 暗黄褐色土層、ローム粒土とロームブロック土層で、締まりが悪い
 13層 暗黄褐色土層、ローム粒土とロームブロック土層で、ボソボソ
 14層 暗黄褐色土層、ローム粒土とロームブロック土層で、やや硬く締まる

B－B

1層 E－E' 1層に同じ
 2層 暗茶褐色土層、ローム粒土層
 3層 暗黄褐色土層、大ロームブロック土層
 4層 暗茶褐色土層、ローム粒土にロームブロックを含む
 5層 暗茶褐色土層、ロームブロックにローム粒土を含む
 6層 暗茶褐色土層、ロームブロックにローム粒土を含み、やや締まる
 7層 暗茶褐色土層、ローム粒土にロームブロックを含む、ボソボソ
 8層 暗黄褐色土層、大ロームブロック土層
 9層 D－D' 1層に同じ
 10層 暗黄褐色土層、ロームブロック土層、ボソボソ
 11層 9層に同じ
 12層 D－D' 5層に同じ
 13層 D－D' 7層に同じ
 14層 D－D' 11層に同じ
 15層 C－C' 1層に同じ
 16層 C－C' 2層に同じ
 17層 暗茶褐色土層、ロームブロックにローム粒土を含む、やや締まる
 18層 15層に同じ
 19層 ほぼ15層と同じだが、小ロームブロックを主体とする
 20層 ほぼ15層と同じだが、よりボソボソ
 21層 暗茶褐色土層、ロームブロックにローム粒土を含み、ボソボソで隙間がある
 22層 暗茶褐色土層、ローム粒土にロームブロックを含み、ボソボソ
 23層 暗茶褐色土層、ローム粒土にロームブロックを含み少量のサラサラローム粒を含む
 24層 暗茶褐色土層、サラサラローム粒
 25層 暗茶褐色土層、サラサラローム粒にロームブロックを含む

C－C'

1層 暗黄褐色土層、ボソボソなロームブロックにローム粒土を含む
 2層 暗黄褐色土層、ロームブロックとローム粒土層
 3層 暗黄褐色土層、ロームブロック土層
 4層 暗茶褐色土層、ローム粒土にロームブロックを含む
 5層 暗茶褐色土層、ロームブロックにローム粒土を含む
 6層 暗黄褐色土層、ボソボソな小ロームブロックとローム粒土層
 7層 暗茶褐色土層、ボソボソで隙間ある、ロームブロックとローム粒土層
 8層 暗茶褐色土層、サラサラなローム粒に小ロームブロックを含む
 9層 暗茶褐色土層、サラサラなローム粒
 10層 暗黄褐色土層、ロームブロックとローム粒土層
 11層 暗黄褐色土層、ロームブロック土層
 12層 暗黄褐色土層、ロームブロック土層（やや堅く締まる）
 13層 暗茶褐色土層、ロームブロック土層
 14層 暗茶褐色土層、小ロームブロック・ローム粒土・暗褐色土の混合土層
 15層 暗茶褐色土層、ローム粒土と暗黒褐色土の混合土層
 16層 暗黄褐色土層、ロームブロック土層
 17層 暗黄褐色土層、ロームブロック土層
 18層 暗茶褐色土層、ロームブロック土層

D－D'

1層 暗黄褐色土層、ローム粒土とロームブロックの混合土層で、締まる
 2層 暗黄褐色土層、ローム粒土とロームブロックの混合土層で、締まり密である
 3層 暗黄褐色土層、2層と同じ
 4層 暗黄褐色土層、ロームブロック土層
 5層 暗茶褐色土層、ローム粒土に小ロームブロック土を含み、ボソボソ
 6層 暗茶褐色土層、サラサラなローム粒に小ロームブロック土を含む
 7層 暗黄褐色土層、ローム粒土にロームブロックを含み、硬く締まる
 8層 暗茶褐色土層、サラサラなローム粒に少量の小ロームブロックを含む
 9層 暗茶褐色土層、ローム粒土層で締まる
 10層 暗茶褐色土層、ローム粒土に少量の小ロームブロックを含み、やや締まる
 11層 暗黄褐色土層、ローム粒土にロームブロックを含み、やや締まる
 12層 暗茶褐色土層、サラサラなローム粒に小ロームブロックを含む
 13層 暗茶褐色土層、細かくサラサラなローム粒に朱粒子を含む
 14層 暗黄褐色土層、ローム粒土とロームブロックの混合土層
 15層 暗黄褐色土層、ローム粒土とロームブロックの混合土層
 16層 暗茶褐色土層、ローム粒土とロームブロックの混合土層に黒色土を含む
 17層 暗黄褐色土層、ローム粒土とロームブロックの混合土層
 18層 暗茶褐色土層、ローム粒土とロームブロックの混合土層
 19層 暗茶褐色土層、ロームブロックにローム粒土を含む
 20層 暗黄褐色土層、ロームブロック土層
 21層 暗黄褐色土層、ロームブロック土層
 22層 暗茶褐色土層、ロームブロックにローム粒土を含む
 23層 暗黄褐色土層、ロームブロックにローム粒土を含む

E－E'

1層 暗茶褐色土層、ローム粒土に少量のロームブロックを含み、ボソボソ
 2層 暗茶褐色土層、
 3層 暗黄褐色土層、ロームブロック土層
 4層 暗茶褐色土層、ロームブロック土層でボソボソ
 5層 暗茶褐色土層、ローム粒土に少量のロームブロックを含み、ボソボソ
 6層 暗茶褐色土層、ローム粒土に少量のロームブロックを含み、締まる
 7層 暗茶褐色土層、ローム粒土とロームブロック
 8層 暗茶褐色土層、ロームブロックにローム粒土、締まる
 9層 暗茶褐色土層、ローム粒土に小ロームブロック
 10層 暗茶褐色土層、サラサラローム粒に小ロームブロックを含む
 11層 暗茶褐色土層、サラサラローム粒
 12層 暗茶褐色土層、小ロームブロック土層
 13層 暗茶褐色土層、ローム粒に少量のロームブロックを含む
 14層 暗茶褐色土層、ローム粒に少量のロームブロックを含む
 15層 暗黄褐色土層、ロームブロックに黄褐色の砂粒を含み、締まる
 16層 暗黄褐色土層、大ロームブロック土層
 17層 暗黄褐色土層、ロームブロック土層

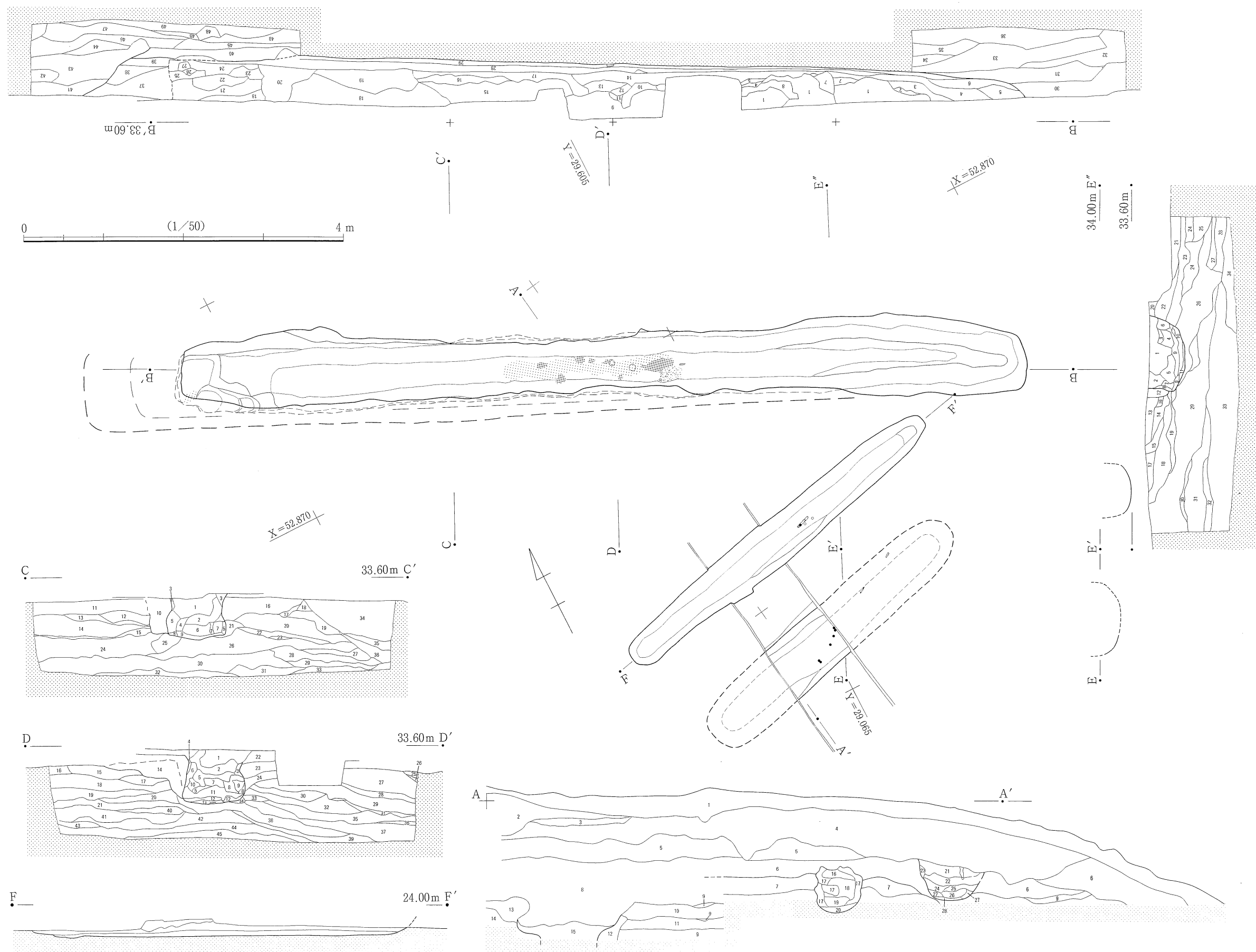
15層 暗黄褐色土層、ロームブロックにローム粒土を含み、ボソボソ
 16層 黄褐色土層、ローム粒土とロームブロック土層で、やや柔らかい
 17層 暗茶褐色土層、ローム粒土とロームブロック土層で、ボソボソ
 18層 黄褐色土層、ローム粒土とロームブロック土層で、15層よりやや締まる
 19層 暗茶褐色土層、サラサラローム粒に小ロームブロックを含む
 20層 暗茶褐色土層、サラサラローム粒土
 21層 暗茶褐色土層、ローム粒土とロームブロック土層で、やや硬く締まる
 22層 暗茶褐色土層、ローム粒土とロームブロック土層で、やや締まる
 23層 暗茶褐色土層、ローム粒土とロームブロック土層
 24層 暗茶褐色土層、ローム粒土に少量のロームブロックを含む
 25層 暗茶褐色土層、ローム粒土にロームブロックを含む
 26層 暗茶褐色土層、ローム粒土層で、やや柔らかい
 27層 暗茶褐色土層、ローム粒土層で、25層より柔らかい
 28層 暗茶褐色土層、ローム粒土に小ロームブロックを含み、柔らかい

26層 暗黄褐色土層、大ロームブロック
 27層 暗茶褐色土層、ロームブロックにサラサラローム粒を含む
 28層 暗茶褐色土層、D－D' 12層に同じ
 29層 暗茶褐色土層、D－D' 13層に同じ
 30層 暗黄褐色土層、ロームブロックにローム粒土を含む
 31層 暗黄褐色土層、ロームブロックとローム粒土の混合土層に多量の褐色土を含む
 32層 暗茶褐色土層、ロームブロックに多量の褐色土を含む
 33層 暗茶褐色土層、大ロームブロックに褐色土を含む
 34層 暗茶褐色土層、ロームブロックに多量の褐色土を含む
 35層 暗茶褐色土層、ロームブロック土層
 36層 暗茶褐色土層、大ロームブロックに少量の褐色土を含む
 37層 暗茶褐色土層、ロームブロックとローム粒土の混合土層
 38層 暗茶褐色土層、ローム粒土にロームブロックを含む
 39層 暗茶褐色土層、小ロームブロックにローム粒土を含む
 40層 暗茶褐色土層、小ロームブロックにローム粒土を含む
 41層 暗茶褐色土層、ロームブロックにローム粒土を含む
 42層 暗茶褐色土層、ローム粒土にロームブロックを含む
 43層 暗茶褐色土層、大ロームブロック土層
 44層 暗茶褐色土層、大ロームブロックに黒褐色土を含む
 45層 暗茶褐色土層、ロームブロックに黒褐色土を含む
 46層 黒褐色土層、小ロームブロックを含む
 47層 暗茶褐色土層、大ロームブロック土層
 48層 暗褐色土層、黒褐色土にロームブロックを含む
 49層 暗茶褐色土層、ロームブロックに褐色土を含む

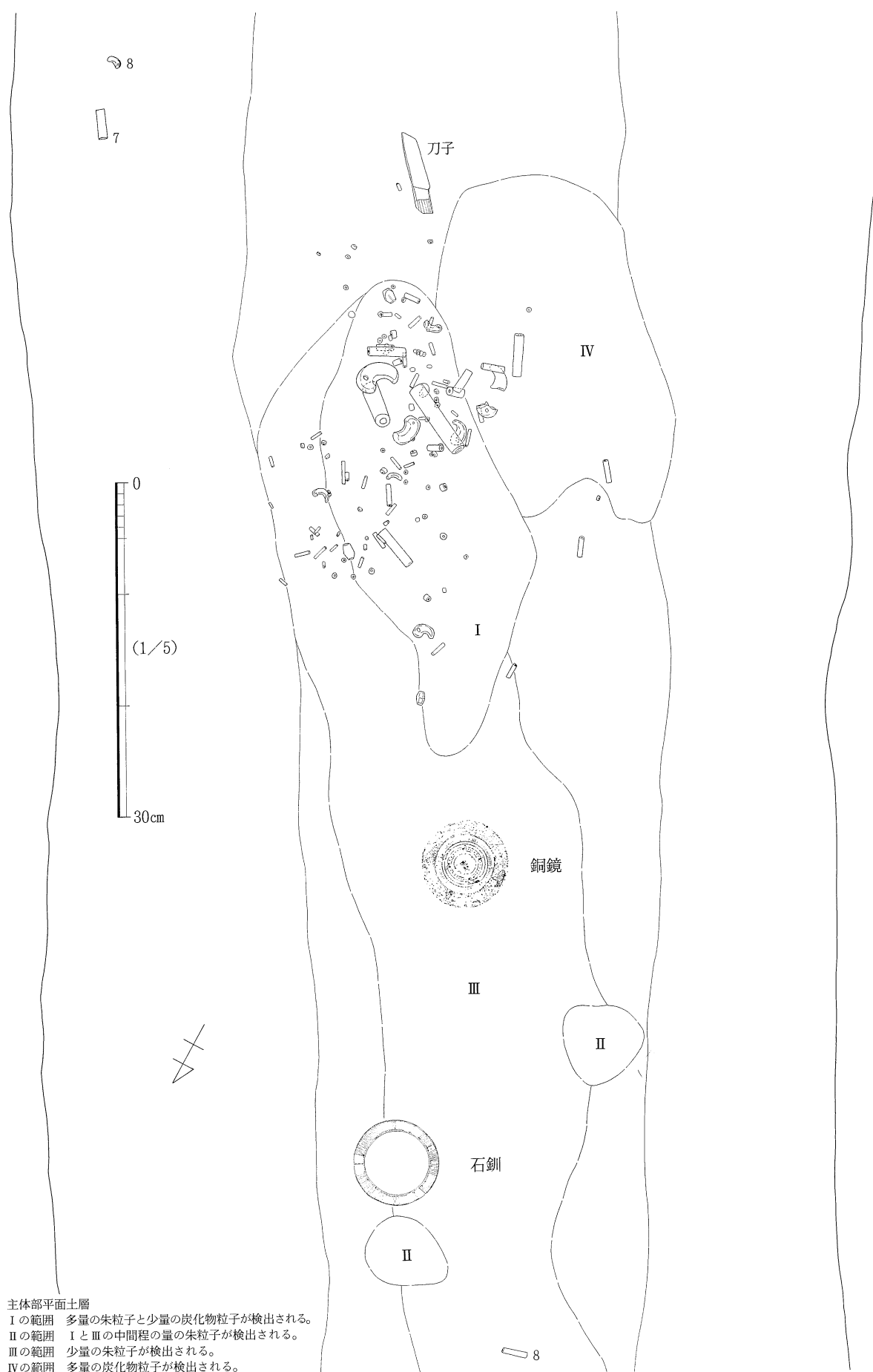
19層 暗茶褐色土層、小ロームブロック土層
 20層 黄褐色土層、小ロームブロックとローム粒土層
 21層 暗黄褐色土層、小ロームブロックとローム粒土層
 22層 暗黒褐色土層、小ロームブロックを含む
 23層 暗黒褐色土層、小ロームブロックを含む
 24層 暗茶褐色土層、ロームブロック土層
 25層 暗茶褐色土層、ロームブロックと褐色粒土の混合土層
 26層 暗茶褐色土層、ロームブロック土層
 27層 暗褐色土層、黒色土にローム粒土と小ロームブロックを含む
 28層 暗黄褐色土層、ローム粒土と小ロームブロック土層
 29層 暗茶褐色土層、黒色土ブロックにロームブロックを含む
 30層 暗黄褐色土層、ロームブロック土層で、締まり悪い
 31層 黄褐色土層、大ロームブロック土層
 32層 暗茶褐色土層、ロームブロックを主体に黒褐色土を含む
 33層 暗黄褐色土層、大ロームブロック土層
 34層 黄褐色土層、ロームブロック土層
 35層 暗茶褐色土層、ローム粒土にロームブロックを含む
 36層 暗茶褐色土層、大ロームブロック土層

24層 暗黄褐色土層、ロームブロック土層
 25層 暗茶褐色土層、ロームブロック土層
 26層 黒茶褐色土層、黒色土にローム粒土を含む
 27層 暗黄褐色土層、ロームブロック土層
 28層 暗茶褐色土層、ローム粒土に茶褐色土を含む
 29層 暗茶褐色土層、ローム粒土層
 30層 暗茶褐色土層、小ロームブロック土層
 31層 暗茶褐色土層、ローム粒土層に茶褐色土を含む
 32層 暗茶褐色土層、ロームブロック土層
 33層 暗茶褐色土層、ロームブロック土層
 34層 暗茶褐色土層、ローム粒土層
 35層 暗茶褐色土層、ロームブロックにローム粒土
 36層 暗茶褐色土層、ローム粒土に小ロームブロックと黒褐色土を含む
 37層 暗茶褐色土層、ロームブロック土層
 38層 暗黄褐色土層、ロームブロック土層
 39層 暗褐色土層、ローム粒土層に小ロームブロックを含む
 40層 暗茶褐色土層、ロームブロック土層
 41層 暗茶褐色土層、ロームブロック土層に暗褐色土を含む
 42層 暗茶褐色土層、ロームブロック土層に褐色土を含む
 43層 黒色土層、ローム粒土を含む
 44層 黄褐色土層、ローム粒土とロームブロックを含む
 45層 暗茶褐色土層、ローム粒土層ロームブロックを含む

18層 暗茶褐色土層、小ロームブロック土層に褐色土粒を含む
 19層 暗茶褐色土層、ロームブロック土層
 20層 暗茶褐色土層、ロームブロック土層に黒褐色ブロックを含む
 21層 黄褐色土層、ロームブロック土層
 22層 暗茶褐色土層、ロームブロックと褐色土
 23層 暗茶褐色土層、大ロームブロックと褐色土
 24層 暗茶褐色土層、褐色土にロームブロックを含む
 25層 黄褐色土層、大ロームブロック土層
 26層 暗黄褐色土層、大ロームブロック土層
 27層 暗黄褐色土層、大ロームブロックに砂粒を含む
 28層 黒褐色土層、ローム粒土と黒褐色土の混合土層
 29層 暗黄褐色土層、大ロームブロックに褐色粒土を含む
 30層 暗褐色土層、ローム粒土に黒褐色土を含む
 31層 暗茶褐色土層、大小ロームブロック土層
 32層 暗茶褐色土層、ロームブロックに黒褐色土を含む
 33層 暗茶褐色土層、ロームブロック土層
 34層 暗茶褐色土層、ロームブロック土層



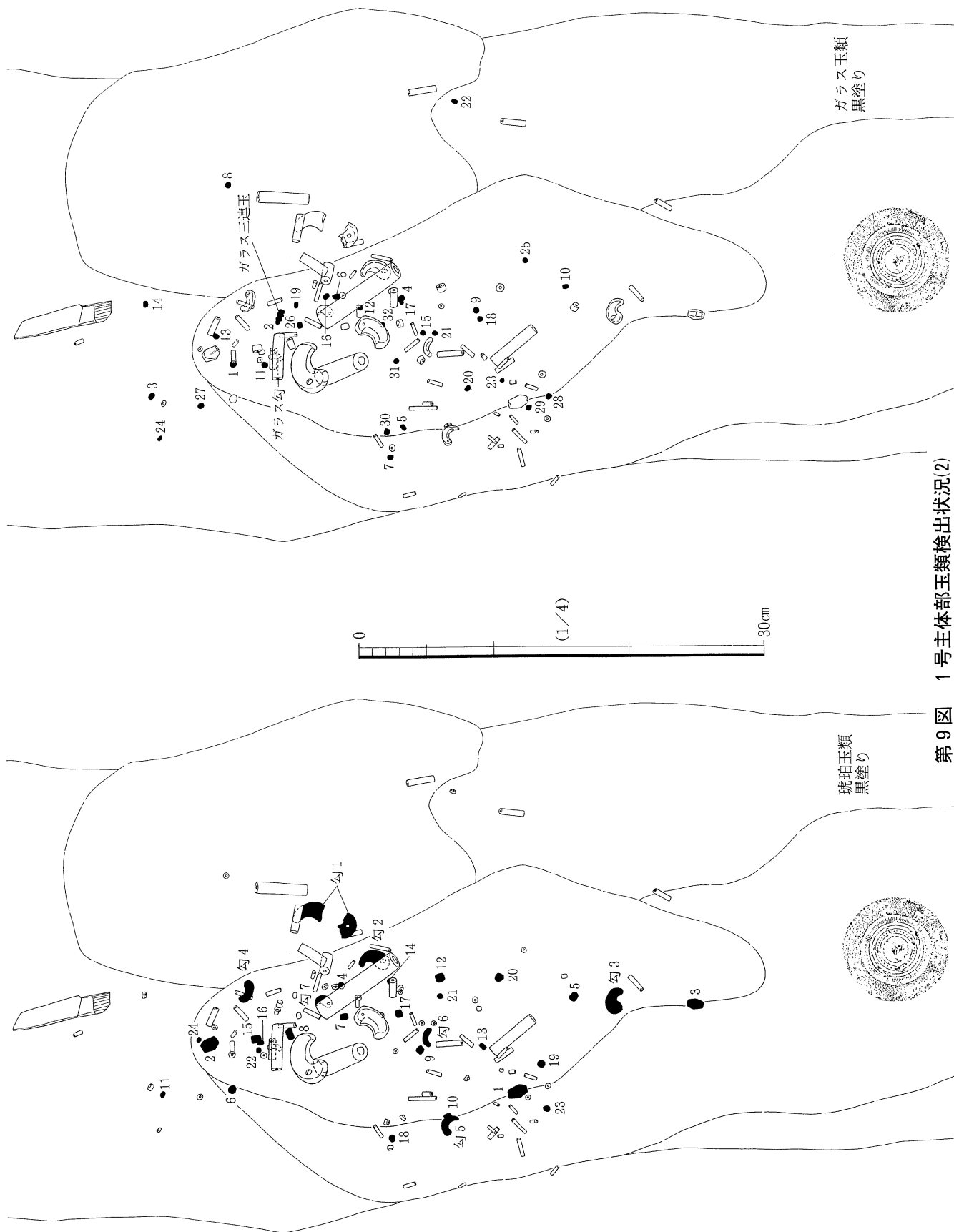
第6図 1・2・3号主体部検出状況



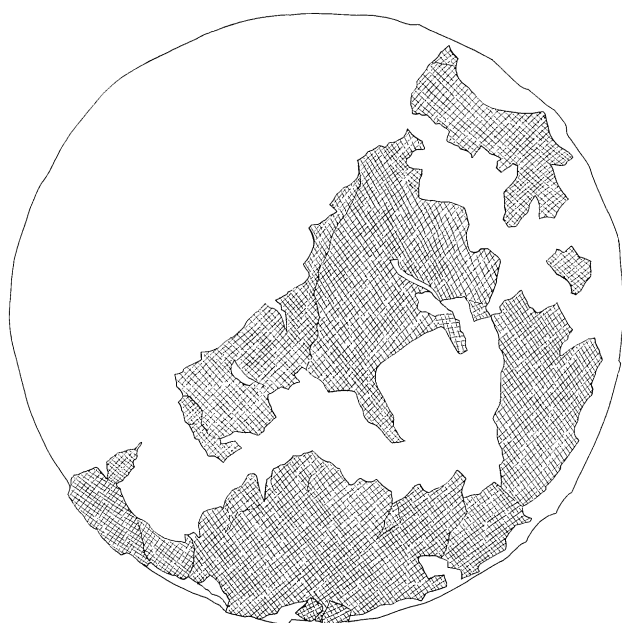
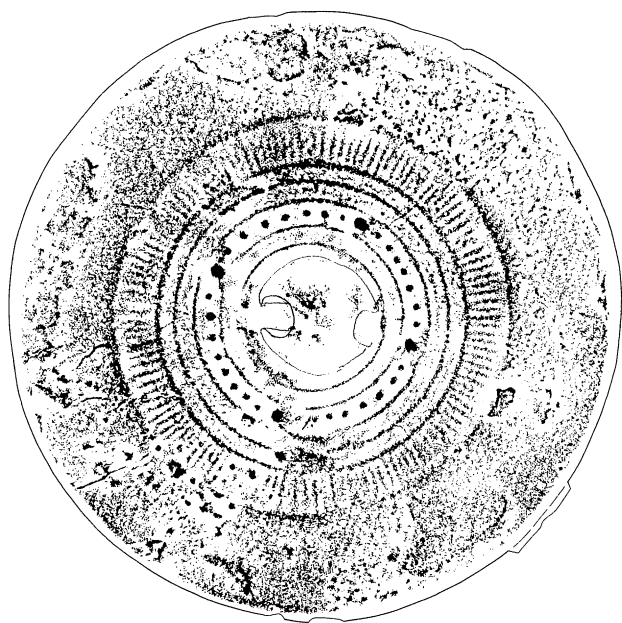
第 7 図 1 号主体部副葬品検出状況



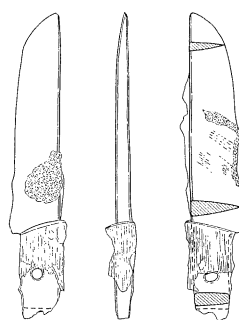
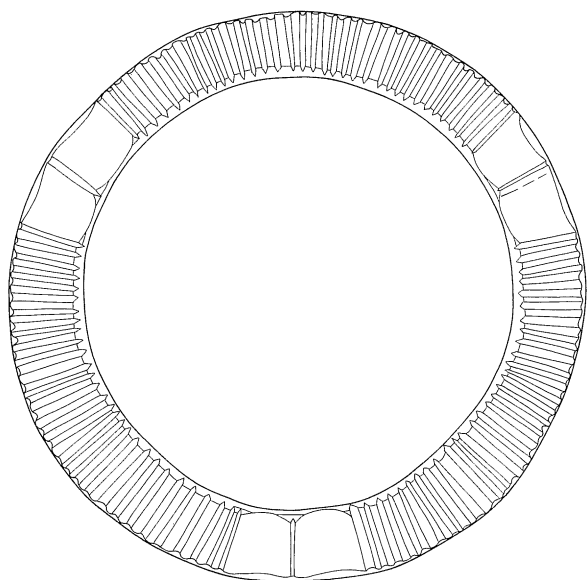
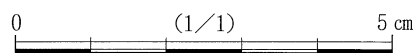
第8図 1号主体部玉類検出状況(1)



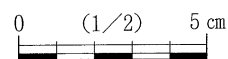
第9図 1号主体部玉類検出状況(2)



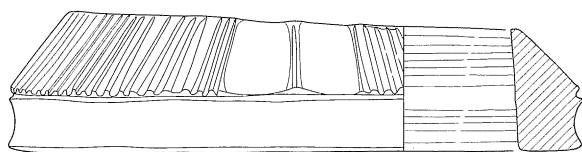
朱文鏡 1/1



刀子



石釧 1/1



第10図 1号主体部副葬品(1)

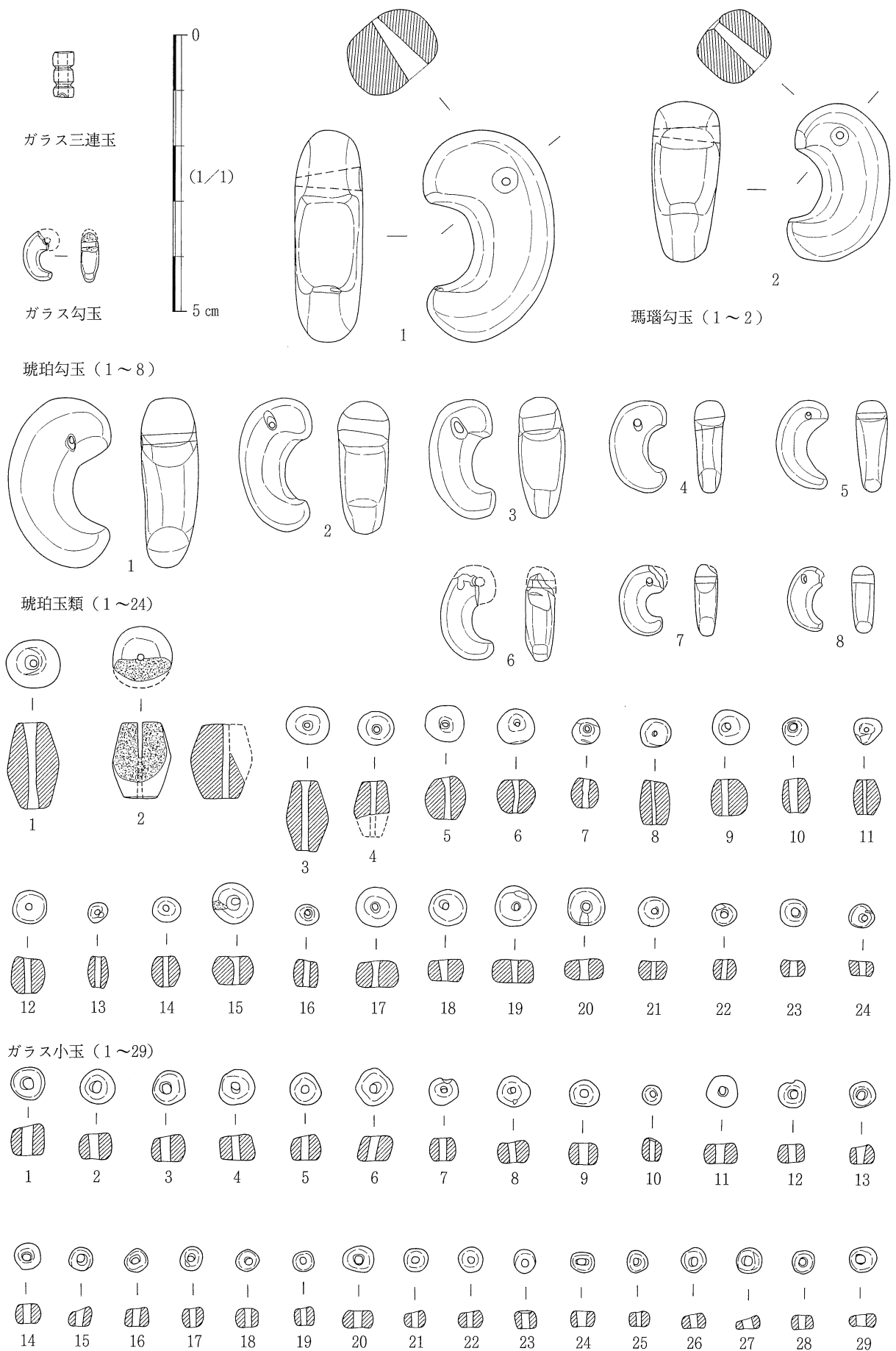
石釧は東端から5.15mに検出し、緑色凝灰岩質と思われ、外径7.55～7.62cm、内径5.70～5.71cm、環体高1.65～1.85cm、環体幅0.85～0.9cm、下底幅8.88～8.89cm、重さ47.2gを計る。側面は上下を条線で仕切り、上半は斜面とし2個1対の放射状の面を配し3等分し、その間隔に29・30・35条の鋭い条線を刻んでいる。下半は内側に面取りする。内面には成形痕跡の擦痕を明瞭に残している。

刃子は東端から4.76mに検出し、片関、片刃で茎には目釘孔1ヵ所が認められる。茎には木質が、刃部には布の痕跡をそれぞれ残している。全長8.1cm、刃部長5.75cm、茎部長2.35cm、棟幅0.3～0.4cm、目釘孔径0.25cmを計る。

4は、ガラス三連玉で一方の端部に古い欠けを有する他はほぼ完形で、長さ0.83cm・径0.35cm・孔

第1表 1号主体部出土勾玉法量および観察表

	番号	最大長 (mm)	最大幅 頭部幅 腰部幅 尾部幅 (mm)	頭部幅 腰部幅 尾部幅 (mm)	孔 径 上 下 (mm)	重 さ (g)	備 考	旧番号
ガラス	1	8.9+	5.1+ 3.8+ 3.3 2.4	3.2 3.2 3.1	(1.0)	0.21174	透明なコバルトブルー。気泡は粒。頭部を欠損する。アンチモン主成分	95
瑪 瑙	1	37.5	23.4 16.0 14.9 12.4	16.5 11.8 10.2	4.0～4.5 1.6	14.9384	片側穿孔。不透明なアメ色の混じる白乳色。頭部と尾部の内側の稜線は比較的明瞭で「コ」の字状を呈する。	54
	2	28.4	17.3 12.6 11.8 10.2	11.2 10.7 9.3	3.4 1.5	7.7744	片側穿孔。透明感のあるアメ色。頭部と尾部の内側の稜線は比較的明瞭で「コ」の字状を呈する。	76
琥 珀	1	30.3	18.3 12.6 11.6 9.1	9.4 9.8 7.8	2.2～3.0 1.5	3.0203	穿孔は丁寧に仕上げられる。やや透明感のある濃いアメ色。尾端に光沢有り。	56
	2	23.9	13.1 9.4 8.4 6.5	8.8 8.5 7.0	1.7～3.0 1.4～1.9	1.5178	穿孔は丁寧に仕上げられる。やや透明感のある濃いアメ色。尾端に光沢有り。	99
	3	21.3	11.5 8.6 7.3 6.3	7.5 7.9 6.1	2.4～4.2 1.9～3.2	1.0525	穿孔径に巾があり仕上げもやや雑な感がある。やや透明感のある濃いアメ色。尾端に光沢有り。	85
	4	16.5	10.2 6.8 6.7 5.4	5.0 4.5 4.2	2.2 1.8～2.0	0.0963	穿孔は丁寧に仕上げられる。やや透明感のある濃いアメ色。	27
	5	16.3	9.3 6.1 5.4 4.2	5.4 4.7 3.8	1.0～1.2 0.7	0.4205	穿孔は丁寧に仕上げられる。やや透明感のある濃いアメ色。	101
	6	15.3+	8.5 5.9+ 5.5 4.6	5.1+ 5.1 4.2	—	0.3756	頭部を欠く。やや透明感のある濃いアメ色。	113
	7	12.7	7.8+ 5.3 4.5 3.8	4.1 3.9 3.5	1.5 1.0	0.2220	頭部端に古い欠けあり。やや透明感のある濃いアメ色。	96
	8	11.7	6.3 4.6 4.3 3.2	4.2 3.8 3.8	1.1～1.2 1.0	0.1788	頭部内側に古い欠けあり。やや透明感のある濃いアメ色。	129



第11図 1号主体部副葬品(2)

第2表 1号主体部出土琥珀玉法量および観察表

番号	最大長 (mm)	径 (mm)	孔径 上下 (mm)	重さ (g)	形状	備 考	旧 番号
1	15.5	8.8~9.5	2.6 2.5	0.7299	棗形	縦長で中位に最大径を有する、面取りの無い棗形を呈する。部分的に光沢があり透明感のある濃いアメ色。	108
2	13.2	10.8	1.1 1.1	0.7144	棗形	縦長で中位に最大径を有する、面取りの無い棗形を呈する。部分を大きく欠く。部分的に光沢があり透明感のある濃いアメ色。	33
3	12.6	6.7~7.4	2.0 2.0	0.3527	棗形	縦長で中位に最大径を有する、面取りの無い棗形を呈する。部分的に光沢があり透明感のある濃いアメ色。	124
4	6.8+	6.0~6.4	2.0 1.5	0.1544		割れ古く半分を欠く。本来は縦長で中位に最大径を有する、面取りの無い棗形を呈するものと思われる。部分的に光沢があり透明感のある濃いアメ色。	93
5	7.5	6.9~7.1	1.5 1.4	0.2222	丸型	球状の胴部に、穿孔部周縁に平坦面を有しないほぼ丸形を呈する。やや透明感のある濃いアメ色。	45
6	6.1	6.0~6.8	1.5 1.2	0.1552	丸型	球状の胴部に、穿孔部周縁に平坦面を有しないほぼ丸形を呈する。光沢があり透明感のある濃いアメ色。	34
7	5.2	4.8	1.6 1.5	0.0691	丸型	球状の胴部に、一方の穿孔部周縁に平坦面を有するもほぼ丸形を呈する。胴部の一部に古い欠けがある。部分的に光沢があり透明感のあるアメ色。	91
8	8.0	5.2	1.1 1.0	0.1590	縦長	胴部に丸身を有した縦長の形状で、不透明な淡いアメ色。穿孔径も小さく丁寧な作り。	66
9	6.4	6.2~6.4	1.7 1.5	0.1752		胴部にやや丸身を有し、部分的に光沢があり透明感のある濃いアメ色。	111
10	6.3	4.8	1.8 1.6	0.0885	縦長	胴部に丸身を有した縦長の形状で、透明感のある濃いアメ色。	102
11	6.2	4.8~5.0	1.0 1.0	0.0882	縦長	胴部に丸身を有した縦長の形状で、胴部に大きく風化面がある。部分的に光沢があり透明感のある濃いアメ色。	37
12	6.0	5.8	1.6 1.6	0.1524		胴部にやや張りのある高さ・径のほぼ同じ計測値で有る。やや透明感のあるアメ色。	19
13	5.8	3.6~3.7	1.3 1.2	0.0436	縦長	胴部に丸身を有した縦長の形状で、全体にやや風化している。穿孔部一方に欠けあり。不透明な淡いアメ色。	94
14	5.3	4.7~4.8	1.4 1.4	0.0789	やや丸型	胴部に丸身を有する。やや透明感のある濃いアメ色。	98
15	5.0	7.0~7.6	2.2 1.5	0.1956	偏平	ほぼ均一な偏平形を呈し、やや透明感のあるアメ色。	65
16	4.8	3.7~4.2	1.5 1.4	0.0552	縦長	径に均一を欠く。胴部にやや丸身を有した縦長の形状。やや透明感のある濃いアメ色。	78
17	4.7	6.8~7.3	2.0 1.6	0.1713	偏平	ほぼ均一な胴部に張りのある偏平形を呈し、透明感のある濃いアメ色。	89
18	4.1	6.6~6.8	2.1 1.8	0.1227	偏平	均一製に欠く偏平を呈し、透明感のある濃いアメ色。	41
19	3.8	7.2~7.4	1.4 1.4	0.1546	偏平	ほぼ均一な偏平形を呈し、やや透明感のあるアメ色。	46
20	3.7	6.8	1.8 1.7	0.1158	偏平	均一製に欠く偏平を呈し、胴部に条線状の欠けを有する。やや透明感のあるアメ色。	121
21	3.3	5.3	1.2 1.2	0.0662	偏平	同部にやや雑な仕上げ面をとどめる。やや透明感のあるアメ色。	20
22	3.7	4.0~4.3	1.5 1.4	0.0420		形状が均一ではないが、部分的に胴部に丸身を有する。やや透明感のあるアメ色。	64
23	3	4.7~4.8	1.9 1.8	0.0415	偏平	偏平に整った形状で、穿孔はやや径が大きい。透明感のあるアメ色。	14
24	2.7	4.3~4.5	1.5 1.5	0.0338	偏平	形状が均一でない偏平を呈し、光沢があり透明感のある濃いアメ色。	32

第3表 1号主体部出土ガラス製品法量および観察表

番号	最大長(㎜)	径(㎜)	孔径(㎜)	重さ(g)	色 調	透明度	備 考	旧番号
三連宝	8.3	3.5	1.5	0.09898	濃スカイブルー	不 良	気泡粒。	23・24・25
1	5.5	5.8～6.0	2.6	0.23819	スカイブルー	不 良	気泡粒。	48
2	5.1	6.0～6.1	1.6～2.0	0.23657	スカイブルー	不 良	気泡粒。表面気泡欠け	60
3	5.1	5.7～5.8	2.0	0.21237	スカイブルー	不 良	気泡粒。	36
4	4.8	6.4	1.3～1.6	0.25591	スカイブルー	不 良	気泡粒。	100
5	4.6	5.5～5.7	2.0	0.18810	スカイブルー	不 良	気泡粒。	39
6	4.4	6.5～6.7	1.9～2.0	0.24424	スカイブルー	普 通	気泡粒。変形で面有り	82
7	4.2	4.7～5.2	1.6	0.13110	スカイブルー	不 良	気泡粒。	42
8	4.1	5.5	1.3	0.15878	スカイブルー	不 良	気泡粒。	50
9	4.1	4.7～5.3	1.8	0.13315	スカイブルー	不 良	気泡粒。	17
10	4.0	3.6～3.8	1.3	0.07464	スカイブルー	普 通	気泡粒。	18
11	3.9	5.5～5.8	1.6～2.0	0.15883	スカイブルー	普 通	気泡粒。	63
12	3.5	5.1	1.6～1.7	0.10712	コバルトブルー	良	気泡粒。欠け有り	90
13	3.3	4.6～4.7	2.0～2.5	0.07868	スカイブルー	普 通	気泡粒。	31
14	3.3	4.5	1.7～2.3	0.07773	スカイブルー	普 通	気泡粒。	35
15	3.3	4.3～4.4	2.1	0.06031	スカイブルー	良	気泡粒。変形	22
16	3.5	4.1～4.2	1.5	0.06638	スカイブルー	良	気泡粒。	92
17	3.5	4.0～4.3	1.5	0.07809	スカイブルー	不 良	気泡粒。	43
18	3.5	4.0～4.1	1.5	0.07905	スカイブルー	良	気泡粒。	16
19	3.2	3.5～3.6	1.3	0.05324	スカイブルー	良	気泡粒。	80
20	3.1	5.0～5.4	1.8	0.11566	スカイブルー	普 通	気泡粒。	72
21	3.0	4.1～4.3	1.4	0.06712	スカイブルー	良	気泡粒。	21
22	3.1	4.5～4.6	1.4	0.08064	スカイブルー	普 通	気泡粒。	49
23	3.1	3.9～4.0	1.5	0.06260	スカイブルー	普 通	気泡粒。	15
24	2.8	3.7～4.2	1.6～2.0	0.05442	スカイブルー	良	気泡粒。	38
25	2.8	3.7～3.9	1.7	0.04755	スカイブルー	良	気泡粒。	116
26	2.7	4.5～4.6	2.0	0.06349	スカイブルー	不 良	気泡粒。	59
27	2.5	4.5～4.6	2.1	0.05368	スカイブルー	良	気泡粒。偏平で変形	75
28	2.4	4.1～4.8	1.5	0.05610	スカイブルー	良	気泡粒。	73
29	2.3	4.4～4.9	1.4～1.8	0.05722	スカイブルー	良	気泡粒。偏平で変形	115
30	—	—	—		スカイブルー	良	気泡粒。	40
31	—	—	—		スカイブルー	良	気泡粒。	86
32	—	—	—		スカイブルー	普 通	気泡粒。	87

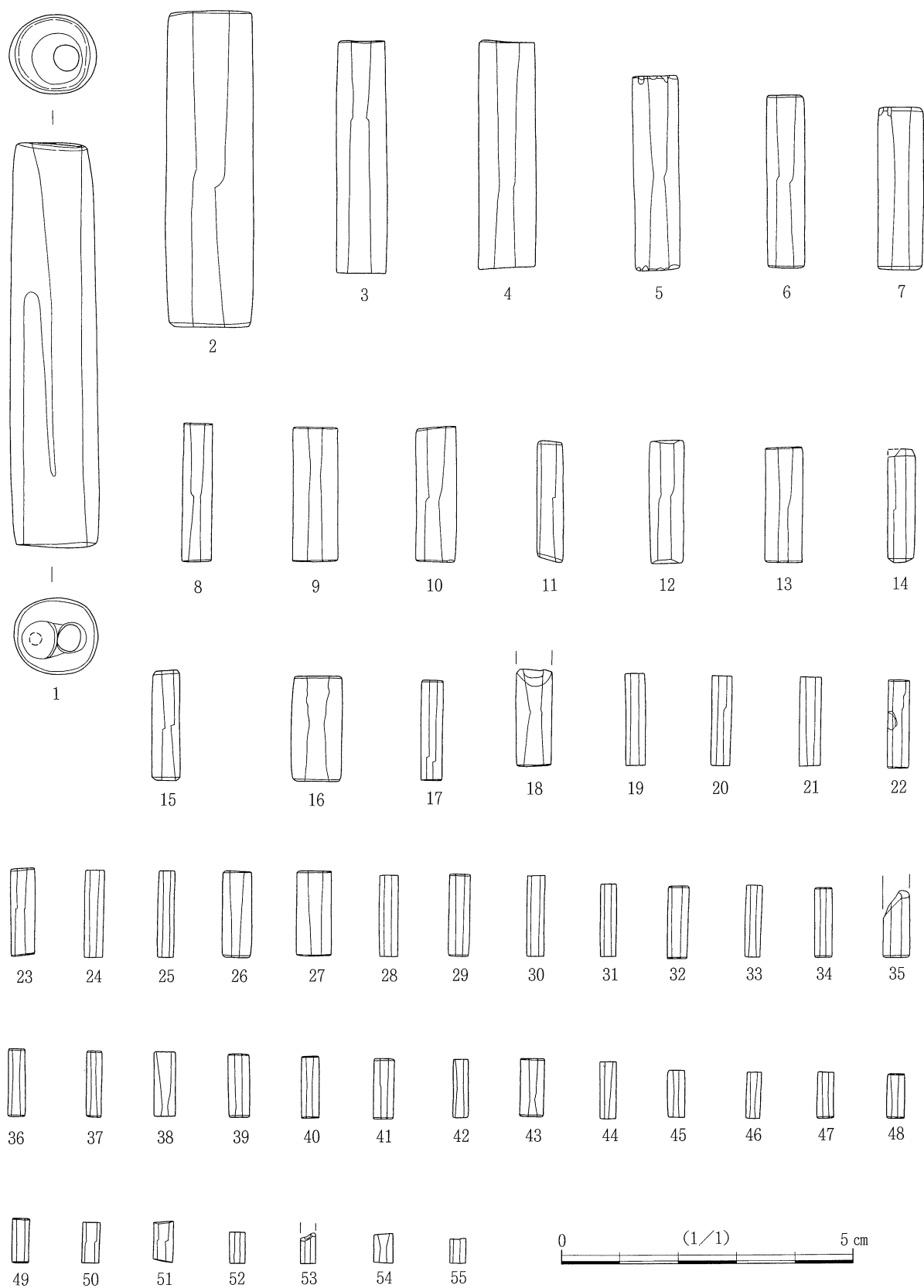
径0.15cmで、色調は濃いスカイブルーで不透明である。

5のガラス勾玉は、頭部を欠損しているが出土時は完形である。全長0.89cm・孔径0.1cmを計り、色調はコバルトブルーで透明である。

瑪瑙勾玉2点は、4cmの間隔を置いて検出した。1は長さ3.78cm、穿孔径は開孔径0.45cm、終孔径0.16cmを計測し、片面穿孔である。色調は透明感のある乳白色で尾部に僅かに赤茶色のアメ色が観察される。2は長さ2.84cm、穿孔径は開孔径0.34cm、終孔径0.15cmを計測し、片面穿孔である。色調は透明感があり部分的に濃い赤茶色で薄い飴色である。2点ともに丁寧に研磨されている。

琥珀勾玉8点のうち7点は、玉類の集中する範囲に散在して、1点は東木口端から4.25mの玉類が集中する僅かに北側の棺底下に検出する。長さは1.18～3.78cm、幅6.3～18.3cmを計り、3・4が僅かに近い計測値を示すが、規格制は感じ取れず、大→小8個ワンセットの様にも感じられる。

琥珀玉24点は、ほとんどが朱粒が濃く散布する範囲より検出する。1～4棗玉、5～7は丸玉とし、他は概ね長さにより大→小へ通し番号とした。1～4の棗玉は2と4が一部欠損する。5～7は両端の平坦面を形造る稜線がないもので全体に丸身を呈する。8・10・11・13・16縦長で細身のもので11の様な片方に強く膨らんだものが存在する。15・17～21・23・24などの偏平のグループで15の胴部はやや張りがあり算盤玉状を呈している。穿孔は1・6・17が両側で他は片側であろう、穿孔径は0.1



第12图 1号主体部副葬品(3)

第4表 1号主体部出土管玉法量および観察表

番号	長さ (mm)	外 径 (mm)	上孔径 最小～最大 (mm)	下孔径 最小～最大 (mm)	重 さ (g)	色 調	穿孔方法等	旧番号
1	69.5	14.3～14.8	7.8～8.4	4.8・6.4	24.1359	濃青灰色	両側穿孔	77
2	54.7	14.8～15.0	5.2～5.6	5.0～5.6	24.2828	濃青緑色	両側穿孔	61
3	40.0	8.5～9.0	4.0	3.5	5.7768	淡白緑色	両側穿孔	119
4	39.4	9.8～10.2	3.8	3.4	7.6619	淡白緑色	両側穿孔	52
5	33.6	7.8～8.0	4.0～4.3	3.4	3.2990	淡濃緑色	両側穿孔	117
6	29.5	6.1～6.4	3.0	3.0	2.0190	濃緑色	両側穿孔	128
7	27.8	7.5～7.8	3.2	2.8	2.0412	淡白緑色	棺外。両側穿孔	127
8	23.8	5.1	2.9	2.3	0.8268	淡白緑色	両側穿孔	125
9	23.2	7.7～7.8	2.8	2.3	2.3353	濃緑色	両側穿孔	112
10	22.9	6.7～6.9	3.7	3.2	1.6853	濃緑色	両側穿孔	26
11	21.1	4.5～4.7	2.6	2.5	0.6564	白褐色	滑石。両側穿孔	103
12	21.0	5.8～6.1	2.9	2.6	1.1260	淡緑色	両側穿孔	55
13	19.9	6.6～6.7	2.7	2.2	1.5622	濃緑色	両側穿孔	88
14	18.9	4.8～4.9	2.2	2.0	0.7136	淡白緑色	滑石。両側穿孔	114
15	18.9	4.7	2.3	2.3	0.6767	淡白緑色	滑石。両側穿孔	57
16	17.5	8.2～8.9	4.4	3.9	2.1220	淡緑色	両側穿孔	83
17	17.3	3.7～3.8	1.6	1.6	0.3376	淡白緑色	両側穿孔	84
18	16.6	6.1～6.3	3.7	(3.1)	0.7900	淡緑色	欠損。両側穿孔	62
19	16.0	3.5～3.6	2.0	2.0	0.3089	淡白緑色	片側穿孔	44
20	15.8	3.7	1.6	1.6	0.2402	淡白緑色	両側穿孔	118
21	15.6	3.6～3.7	1.7	1.3	0.3106	淡緑色	片側穿孔	29
22	15.3	3.7	2.0	1.7	0.2666	淡白緑色	片側穿孔	122
23	15.0	4.2	2.1	2.0	0.4485	淡灰緑色	滑石。両側穿孔	79
24	15.0	3.2	1.6	1.5	0.2447	淡濃緑色	片側穿孔	123
25	15.0	2.8	1.5	1.5	0.1735	淡濃緑色	片側穿孔	105
26	14.9	5.1	2.3	1.2	0.6023	淡白緑色	滑石。片側穿孔	28
27	14.7	5.5～5.7	2.6	1.4	0.6830	淡灰色	滑石。片側穿孔	30
28	14.1	3.0～3.1	1.6	1.6	0.1880	淡濃緑色	片側穿孔	81
29	14.0	3.4～3.5	1.6	1.0	0.2306	淡白緑色	片側穿孔	106
30	14.0	3.2	1.5	1.5	0.2160	濃緑色	片側穿孔	107
31	12.8	2.7～2.8	1.4	1.4	0.1660	淡濃緑色	片側穿孔	110
32	12.7	3.3～3.4	1.6	1.4	0.2532	淡濃緑色	片側穿孔	68
33	12.3	2.7～2.8	1.3	1.3	0.1500	淡濃緑色	両側穿孔	67
34	11.9	2.9～3.0	1.3	1.3	0.1697	淡濃緑色	片側穿孔	47
35	11.5	4.7	2.5	(1.8)	0.2791	淡白緑色	欠損	120
36	11.5	2.8～2.9	1.4	1.4	0.1518	淡濃緑色	両側穿孔	109
37	11.3	2.5～2.7	1.5	1.2	0.1245	淡濃青緑色	両側穿孔	104
38	11.2	3.5～3.7	2.2	1.5	0.2296	濃緑色	両側穿孔	58
39	10.8	3.6～3.7	1.5	1.3	0.2418	淡緑色	片側穿孔	97
40	10.7	3.1～3.2	1.3	1.3	0.1805	淡濃緑色	両側穿孔	13
41	10.3	3.3	1.3	1.2	0.2048	淡濃緑色	両側穿孔	70
42	10.2	2.6	1.4	1.4	0.1052	濃緑色	両側穿孔	7
43	9.9	3.9～4.0	1.6	1.5	0.2102	淡白緑色	両側穿孔	12
44	9.7	2.9	1.4	1.2	0.1356	淡濃緑色	片側穿孔	6
45	8.3	3.2	1.4	1.4	0.1326	淡濃緑色	両側穿孔	9
46	8.0	2.5	1.3	1.3	0.0865	淡濃緑色	両側穿孔	4
47	7.9	2.9	1.3	1.2	0.0981	淡青緑色	片側穿孔	10
48	7.7	3.0～3.1	1.8	1.3	0.0908	淡白緑色	両側穿孔	53
49	7.6	3.2	1.6	1.6	0.1273	淡濃緑色	片側穿孔	8
50	7.1	3.1～3.2	1.6	1.6	0.1017	淡濃青緑色	両側穿孔	74
51	6.7	3.6	1.8	1.6	0.1272	濃緑色	片側穿孔	71
52	5.8	2.1	1.6	1.4	0.0654	淡濃緑色	片側穿孔	51
53	5.0	2.5	1.3	(1.3)	0.0446	淡濃緑色	欠損	11
54	5.0	3.5～3.6	2.0	1.6	0.0963	淡濃青緑色	両側穿孔	5
55	4.5	2.7～2.8	1.6	1.4	0.0496	淡濃青緑色	片側穿孔	69

cm～0.2cmが大半であるが、それを越えるものも存在している。

ガラス小玉32点は、琥珀玉とほぼ同様に朱粒が濃く散布する範囲より検出する。番号は概ね長さで通し番号とした。長さ0.23～0.55cm、径0.35～0.67cmとほとんどが長さに比して径が大きな数値を示し偏平なタイプと同形で10のみが得意な形状を呈している。気泡は粒である。色調は12がコバルトの他は透明感のあるスカイブルーである。

管玉55点は、他の玉類同様に東端から4.45～4.75mの朱粒が濃く散布する範囲より検出し、出土状況より、瑪瑙勾玉と共に大形の管玉のグループとそれより鏡側に寄った小型のグループ、それとやや離れて単独で検出したものに分けられる様に感取される。欠損するものもあるが接合関係はない。長さは、0.45～6.95cm、径0.21～1.5cmを計測し、1～4の4cm以上、5～18の1.66～3.36cm、19～30の1.40～1.60cm、31～44の0.97～1.28cm、45～55の0.45～0.83cmに大別される。特に小型の製品については質・計測値に強い規格性が感じられる。形状は1・3・16にやや径の相違が観察されるが、ほぼ正円柱状を呈している。穿孔は欠損で判別不可能な製品もあるが、55例中33例が両側で片側は20例で、大形の製品はほとんどが両側穿孔で、小形は双方が観察される。最大の1は片側に穿孔2ヵ所を認めるが、穿孔のやり直しである。石質は11などの様な滑石製が僅かに含まれるが、他は良質の凝灰岩質や碧玉質が大半を占める。

(2) 2号主体部と副葬品

2号主体部は、1号主体部検出のきっかけとなった陥没痕跡の確認以前に墳丘中心より南4.5mに棺底面付近にいたって確認された。木棺は、1号主体部南側2.5m、墳頂下1.7m、標高33.7m地点にほぼ東西方向に長軸を置き、長軸方位はN-77°-Wを指向する。棺を覆う盛土は黄褐色のローム土を主にし、1号主体部同様明確な掘方がなく色調や土質の変化では確認できない状況にあった。墳丘土層を精査した結果、木棺痕跡は標高34.1mから確認でき、既に木棺の上層を大きく削り取った後で、棺底面に近い覆土を残すのみであった。形状は、最大幅を中程に有し、東西両端は先細となる。棺の断面は、棺床面および壁に丸身を有し、底面は船底形を呈する。規模は、長軸長4.71m・棺幅0.4～0.50m、棺高は、墳丘盛土状況を探る目的で設置した土層断面で、約0.5mを計測する。棺床面標高は僅かに西側が高いがほぼ平坦で33.6～33.62mに置く。棺床面直上土層はサラサラなローム粒が3～5cmほど堆積し盛土とは対象的である。壁面および棺床面は僅かに硬化面を有するだけで、1号主体部の棺中央で確認された、朱や炭化物などは検出されない。

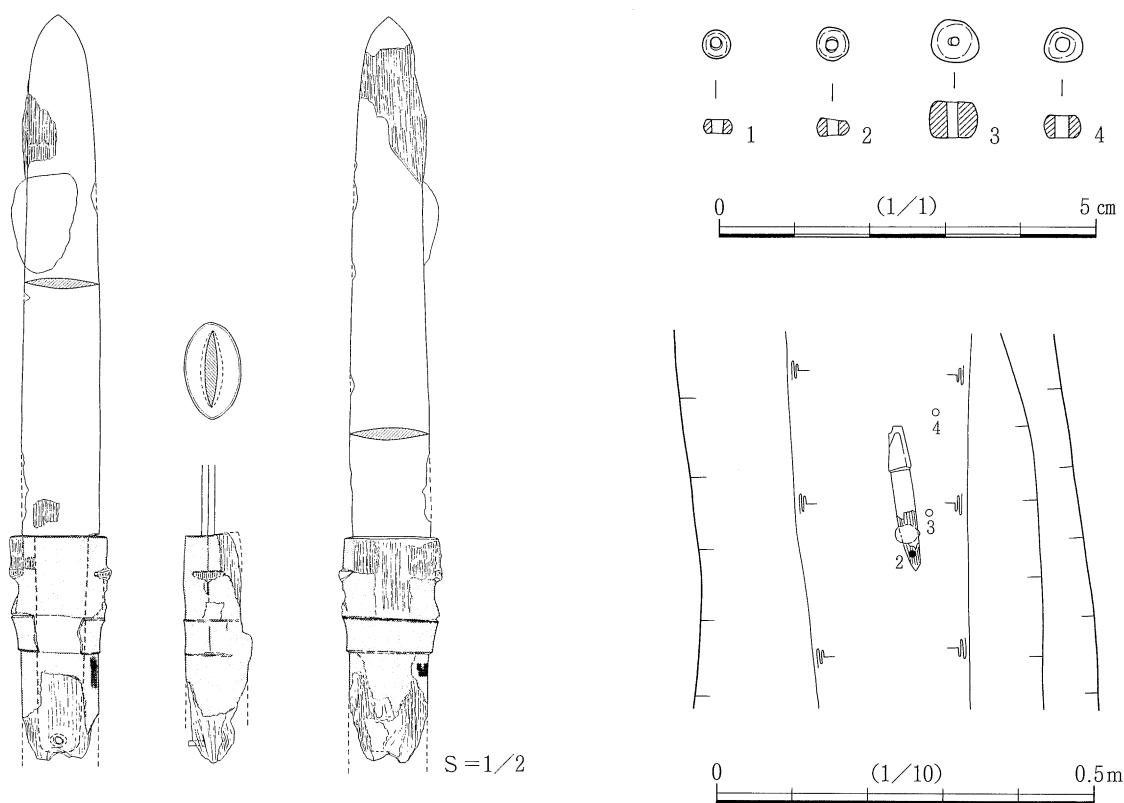
副葬品は、短剣1点、ガラス小玉2点・滑石製白玉2点で全てで、本古墳の規模から察して貧弱な感がある。短剣は東端から1.86mに切先を西に向け、ガラス小玉2点と滑石製白玉1点は短剣の周囲から検出し、残る滑石製白玉1点は振るい作業によって出土したものである。

短剣は全長19.8cm、剣身長13.7cm、茎部長6.1cmを計り、茎には木質が良く残りその形態をとどめて

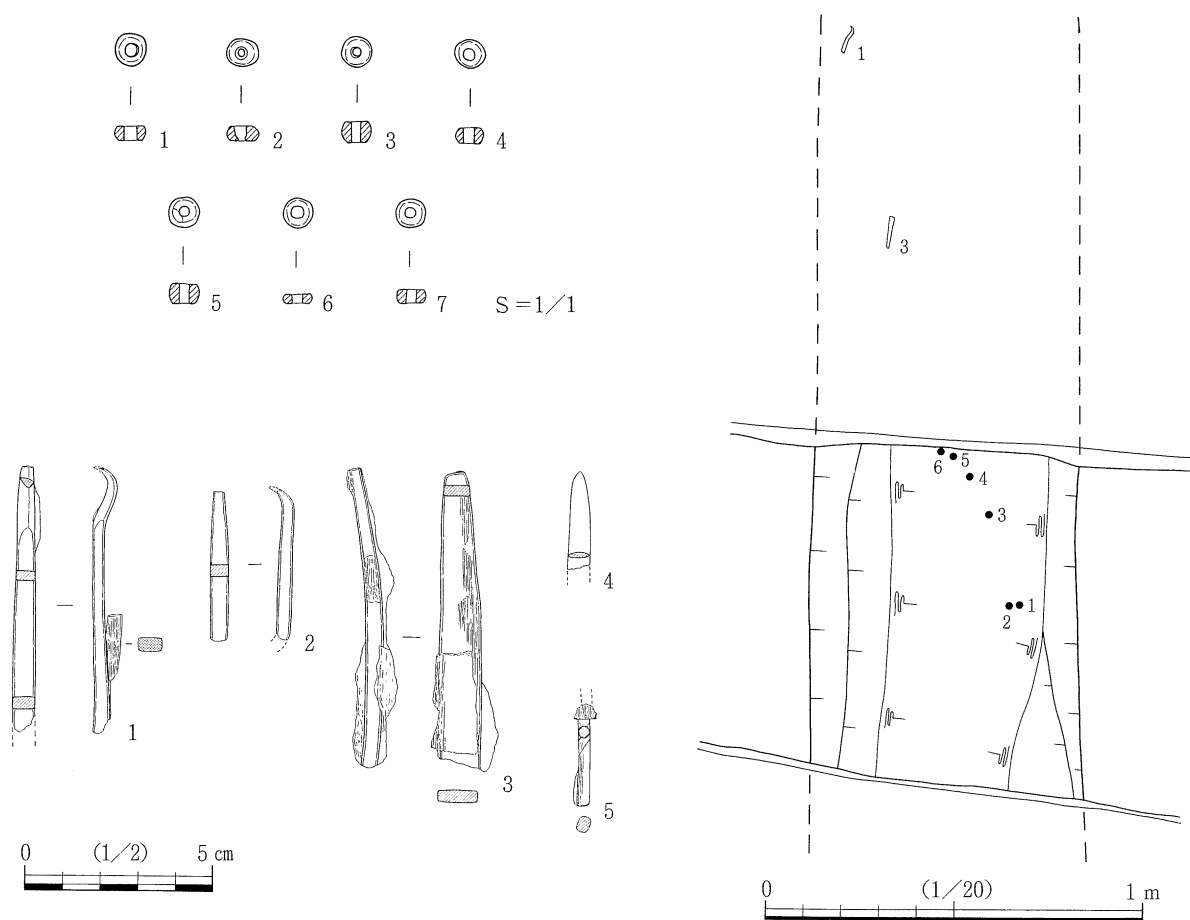
第5表 2号主体部出土滑石製白玉・ガラス小玉法量および観察表

(単位：mm)

番号		厚さ	径	孔 径	重さ(g)	色 調	備 考
1	滑石製白玉	2.0	4.5～5.1	1.9	0.07809	黒灰色	ふるい出土
2	滑石製白玉	2.5	4.3～4.5	1.9	0.0675	黒灰色	
3	ガラス小玉	5.0	5.6～6.1	2.0	0.24229	コバルトブルー	気泡粒。
4	ガラス小玉	3.1	4.5～5.1	1.7～2.3	0.0848	スカイブルー	気泡粒。



第13図 2号主体部副葬品と出土状況



第14図 3号主体部副葬品と出土状況

いる。剣身幅は、関部で2.1cm、切先近くでは1.35cm先細り、シャープな形状を呈している。

滑石製臼玉2点は、計測値からは規格性は感じ取れないが、胴にやや張りを有し稜線を作り出し、古相を呈する。ガラス小玉も滑石製臼玉同様規格性はないが、3号主体部のものもその計測値には幅があり、製作時の許容範囲の結果であろう。

副葬品は、棺中央よりやや東によって検出されたが、短剣切先が西向きに置かれていることなどから、本主体部の被葬者は、頭部位置を東に向けた伸展葬であろう。

(3) 3号主体部と副葬品

2号主体部検出途中に盛土観察用の土層ベルト精査時に2号主体部の南側0.7mの間隔を置き検出した。長さは土層ベルトの幅だけとなってしまったが、確認の長は約0.9mであるが、東側0.5mと1.1m地点に棺底面とほぼ同一レベルで鉄製品を検出することから、2m以上の長さを有するものである。木棺の痕跡は、掘り込みを墳頂下1.15mの標高34.25mで棺床面標高を33.78mで確認し、棺高は0.47mを測る。棺幅は上面で0.7m、棺床面0.4m程で、断面船底形を呈している。木棺を覆う盛土は黄褐色のロームを主にし、1・2号主体部同様明確な掘方がなく色調や土質の変化では確認できない状況にあった。長軸方位は2号主体部同様、N-77°-Wを指向すると思われる。棺床面直上土層に僅かに極小粒のローム粒がローム土に混入して観察される程度である。壁面および棺床面は僅かに硬化面するだけである。

副葬品は、ヤリガンナ2点、楔形鉄製品1点、鉄鏃と思われる破片2点、滑石製臼玉7点がある。

1のヤリガンナは、先端を僅かに、茎を大きく欠損し、現存長6.91cm、茎幅0.53～0.75cm・厚さ0.3～0.5cmを測り、茎は刃部に向かって先細りし、刃部は大きく弓状に鋭く湾曲する。また、茎には棒状の木質が付着している。2も先端を僅かに、茎を大きく欠損し、現存長3.98cm、茎幅0.5cm・厚さ0.4～0.5cmを測り、刃部は小さく湾曲する。双方ともヤリガンナとしては小型の製品である。

3の楔形鉄製品は両端を欠損し、現存長7.8cm、幅0.6～1.1cm、厚さ0.4～0.5cmを測り、断面長方形を呈する。一方の先端が先細りし僅かに欠け、もう一方の欠損部は新しく、弓状に反り返り、刃部は無い。

3・4は、鉄族の小片であろうか。3は現存長2.4cm、幅0.4～0.75cm、厚さ0.25cmを測り、両刃で柳葉系の鏃の先端部であろう。4は両端を欠損し、現存長2.6cm、径0.3～0.4cmを測り、断面丸身を有した角状を呈する。

滑石製臼玉は、厚さでは0.19～0.21cm、径0.39～0.41cmに集中し規格性が感じられる。2号主体部のものと同様に胴にやや張りを有し稜線を作りだしている。

第6表 3号主体部出土滑石製臼玉法量および観察表

(単位：mm)

番号		厚さ	径	孔 径	重さ(g)	色 調	備 考
1	滑石製臼玉	2.1	4.3	1.6	0.0588	淡白灰色	
2	滑石製臼玉	2.0	3.5～4.3	2.0	0.0423	淡白灰色	
3	滑石製臼玉	2.9	4.0～4.1	1.7	0.0666	淡白黄色	
4	滑石製臼玉	2.1	4.0	1.8	0.0518	淡白緑色	
5	滑石製臼玉	2.8	4.2	1.7	0.0745	淡緑黒色	
6	滑石製臼玉	1.4	3.9	1.8	0.0284	淡緑黒色	
7	滑石製臼玉	1.9	3.7～3.7	1.5	0.0411	淡緑黒色	ふるい出土

5 周溝の調査

調査は、墳丘裾まで宅地が隣接して迫り、南側の浅間宮祠の参道部分と北斜面の2箇所に限られ、狭い範囲での調査を余儀なくされた。南側の参道は、現況幅5m・長さ18.5mを測るが、境には宅地との境界線のブロック塀が設けられるため安全保持の観点から、幅2m・長さ13mのトレンチを設定し行った。また、北斜面は既に削平された範囲を除いて12m四方を調査対象とした。

調査の結果、南側のトレンチ調査では東側土層断面で標高29.3~4mの現地表面から周溝底までは最大3m程を測るが、覆土上半分の1.5mほどが宅地造成時の客土で、下半分の1.5mが古墳本来の周溝覆土である。周溝覆土の墳丘裾側に幅3.5mの比較的古い段階の掘り直しが断面から観察されるが、南側断面では客土が充満し、これがある程度に渡って行われたものなのか不明である。他の部分では、黒色土を主体にレンズ状を呈し、概ね自然堆積状況を示している。トレンチ南端では旧表土は無く、地山はローム面で緩やかに傾斜し、周溝外側の平坦面まで完全に確認するまでに至らないが、周溝外側は急角度で立ち上がる壁面を以て古墳外径になるものであろう。客土以前の周溝部分は、外側と比べ最大で0.7m程窪んだ状態であったことを物語っている。

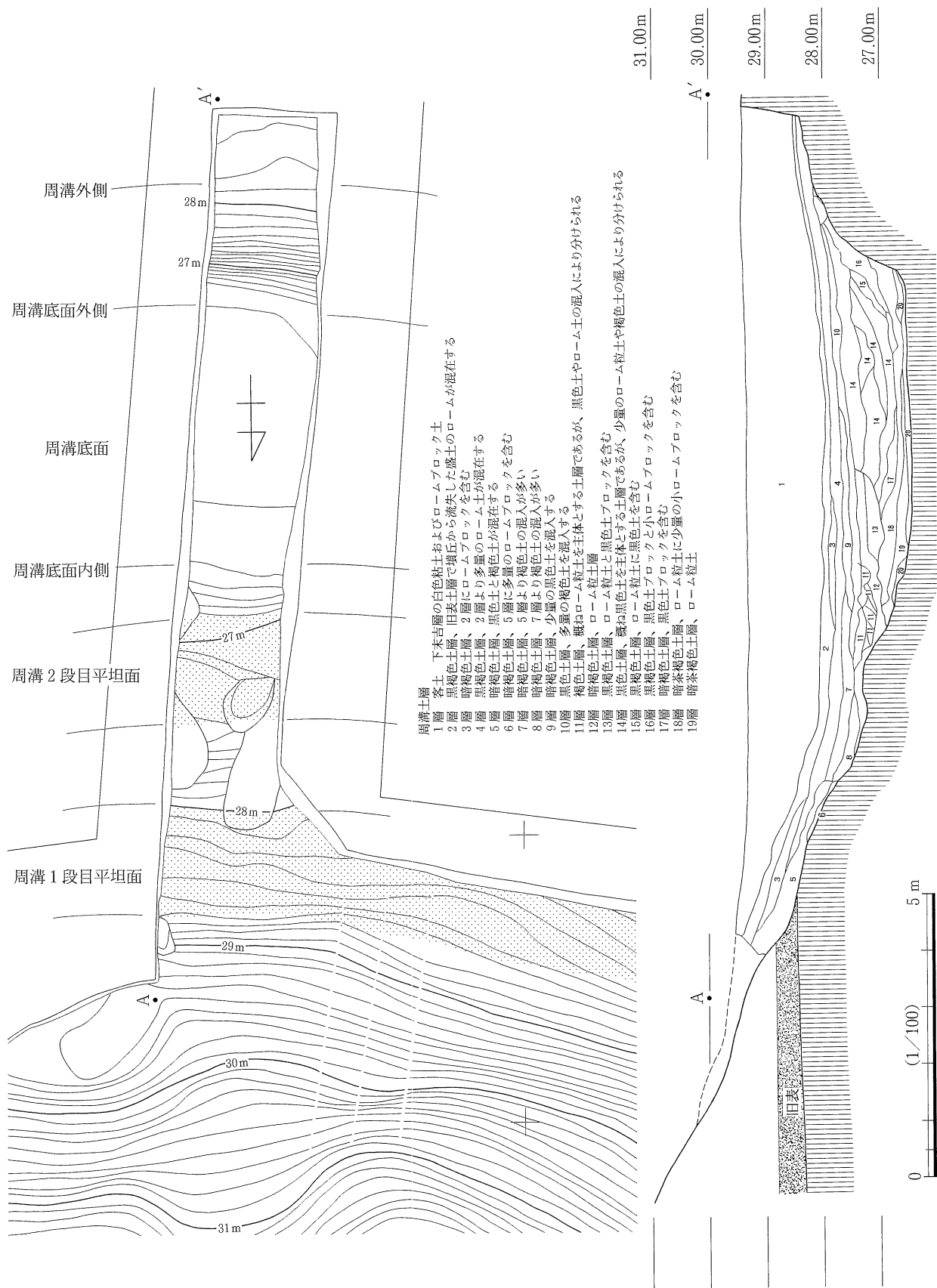
周溝形態は、墳丘裾の旧表土ならび地山のロームを削り出した幅1m程の犬走り状の平坦面2段を有し、周溝底面内側まで緩やかな傾斜面を造り出している。周溝底面は、最深部標高26.4mに置き幅5.3mほどを測り平坦である。周溝底面外側から周溝外側にいたる壁面は急角度で立ち上り、外側壁高は1.6mほどを計測する。周溝外は緩やかに高さを増しながら立ち上がって行くが、周溝底面最深部と周溝外地山面との最大比高差は2mほどとなる。周溝上面幅は、墳丘裾の1段目平坦面内側から周溝外側までとすると約13mを計測する。

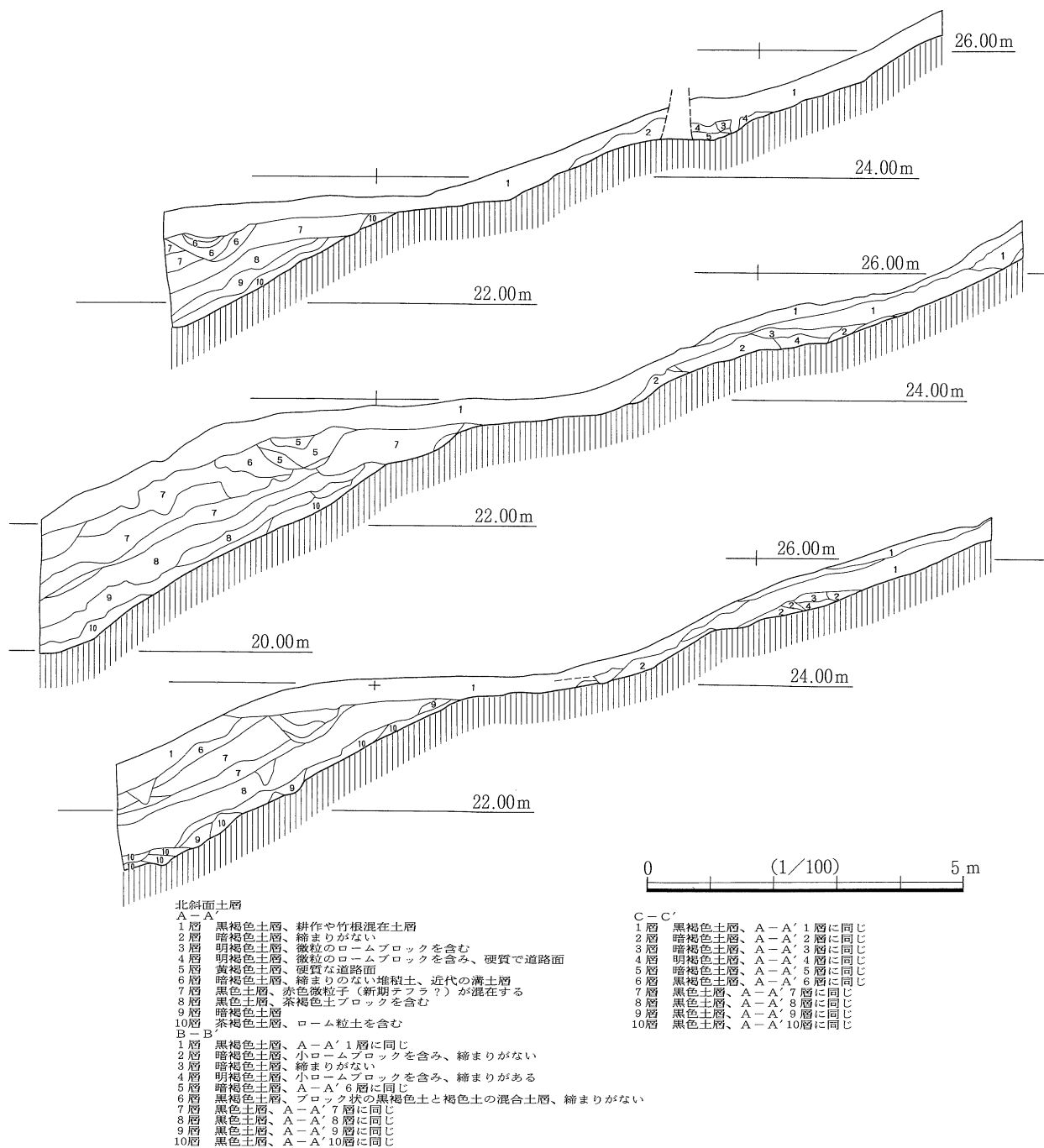
北斜面部の調査では、墳丘寄りの斜面部から中央の平坦面にかけて0.5mほどの数層に分かれる現表土が、更に斜面下方には最大で2mの新期テフラを含む旧表土層が厚く堆積し、土層からは周溝の痕跡を判断できない。地山面のローム面では、標高23.6~8mに平坦が観察されるが、この平坦面は近現代の畑地として使用されていた耕作によるものと感取され、古墳築造に伴う台地整形痕の可能性を残しながらも、積極的にそれとは判断できない。また、北側斜面土層断面図（第16図）のB断面では、これより墳丘側の標高25m前後に僅かに地山面の変換線が認められ、仮に墳丘中心点を第1主体部中央に設定した場合、南側周溝底面内側とほぼ等距離の25m程にあり、北側斜面での古墳築造に伴う台地整形痕跡を僅かに感じとれる。古墳復元に際しては、後者を採用したが、北側斜面の調査では、古墳築造に伴う台地整形を明確にできなかった。

6 盛土と棺の設置

古墳築造に際し、先ず最初に行う行為が場所の選定で、次に築造地の整地、それと同時にそれらに伴う祭祀行為が行われるものであろう。当地域では、出現期の神門古墳のうち、四・三号墳でその様子を伺え知れる、多量の土器と共に竪穴遺構が検出される他は類例を見ない。本古墳でも、整地作業やそれに伴う祭祀行為の明確な痕跡は確認されない。墳丘土層断面A-A'では旧表面が標高28.5mとほぼ水平な線を呈し、整地作業の行われた可能性を示すが、墳丘下地形測量図（第24図）から判断するとその可能性は極めて低いものと思われる。

古墳の盛土高さの指標となる基点の各標高は、墳頂部で35.4m、墳頂部真下の旧地表面で28.5m、



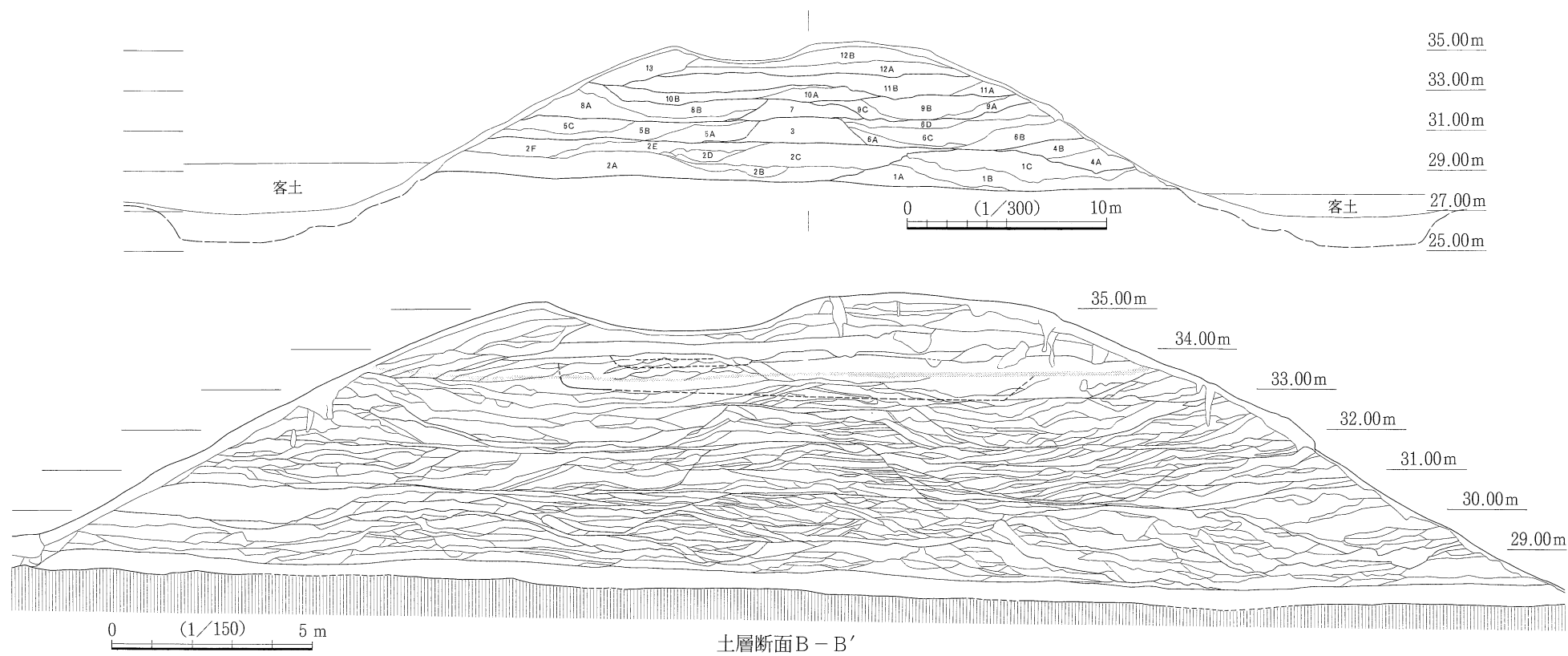
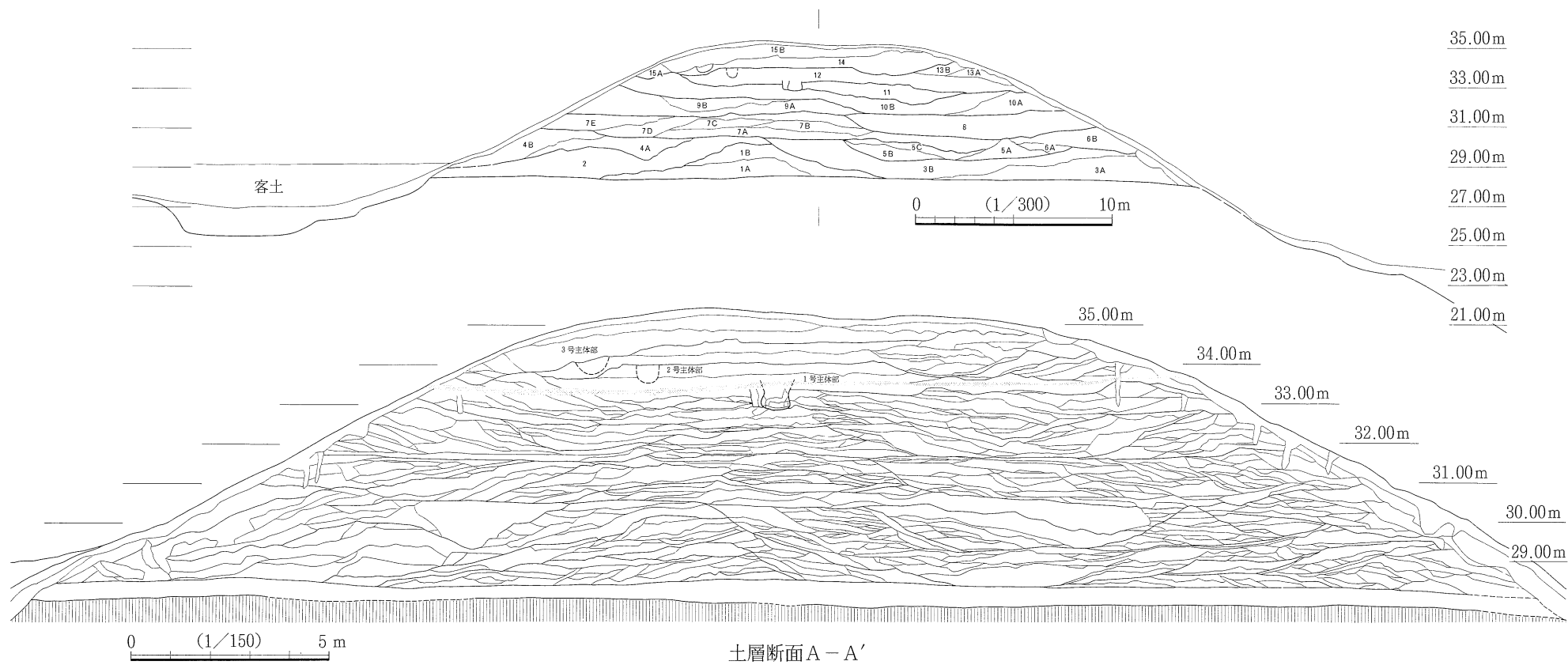


第16図 北側斜面土層断面

墳丘土層断面A-A' 南北土層の北側端で28.5m、南端で28.5m。同断面B-B' 東西土層の東端で28.9m、西端で28mをそれぞれ計測する。盛土の高さは、墳丘中央で6.9m、各地点での比高差は6.5mから最大で7.4mを測る。

墳丘盛土の順序は、墳丘土層断面AとB方向とでは様相が異なり一様ではないが、概ね6段階の工程に分けられる。

まず、最初の盛土は西側から中央寄りの南にかけて始まり、高さ2m程の断面台形の土手状の盛土を築き、これを核として1段目墳丘を高さ2m程まで築き整地する。北側はやや乱れる。（第17図



第17図 墳丘土層断面

A-A'・1A/1B/2/3A/3B/4A/4B/5A/5B/5C、B-B'・1A/1B/1C/2A～2Fの各層)

2段階目は、1段階目を整地し、中央に高さ1.3mの円錐台形の核を築き、西側では端に高さ1.5mの土手を築き中央の円錐台形盛土の間に土砂を流し込み、南と東側は中央の核から外側に向かって土砂を落とし込む様に築く。1段階目と2段階目の境は硬く踏みしめた跡が観察され明瞭である。(第17図A-A'・6A/6B/7A～7E/8、B-B'・3/4A/4B/5A/5B/5C/6A～6Dの各層)

3段階目は、中央に2段階目よりはやや低い1m程の円錐台形の核となる山を築き、東・西・南に3方向の端に断面三角形や台形の土手を築き、中央の円錐台形の核や周りの土手から土砂を流し込むようにしている。北側では3段階目盛土上面をそのまま残している。2段階目と3段階目の境も前工程同様、硬く踏みしめた跡が観察され明瞭である。(第17図A-A'・9A/9B、B-B'・10A/10Bの各層)

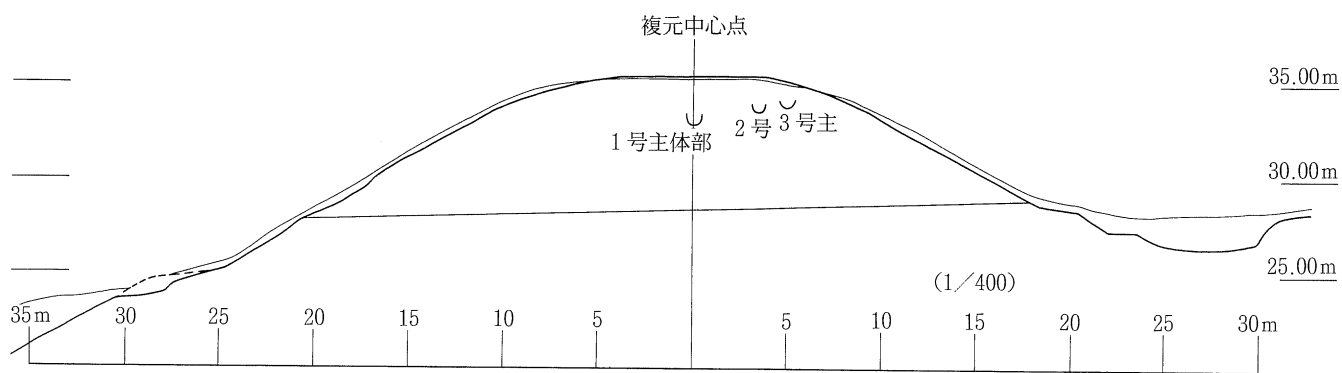
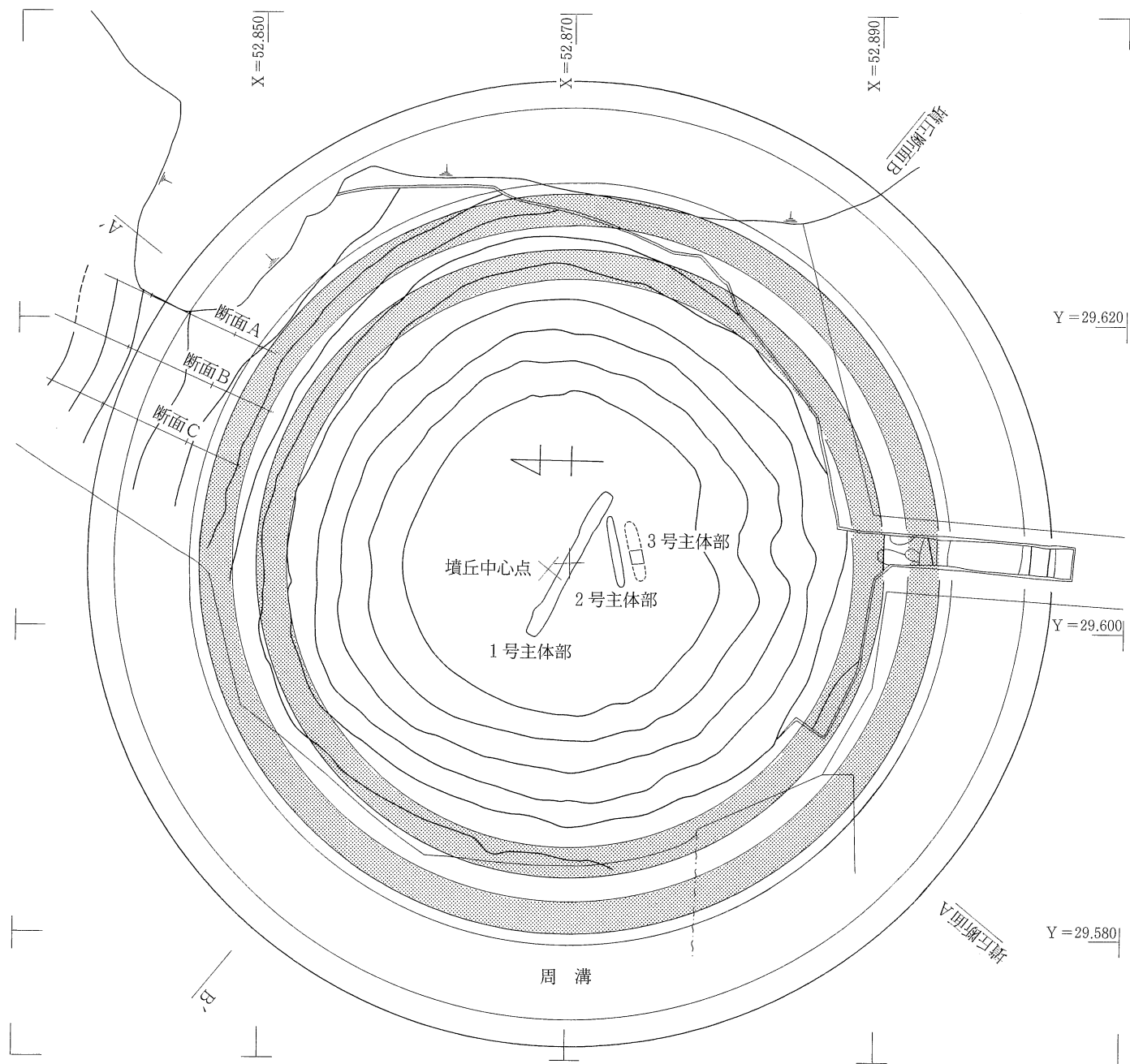
4段階目は、長大な1号主体部木棺設置を目的とした盛土と木棺の設置となる。これまでの核となる中央の盛土とは、形状や構築方法が異なりやや雑な感がある。3段階目までの核となる中央の円錐台形の盛土は、幾重にも水平方向に意識して盛られた土砂から成るが、この工程ではこれまでの円錐台形の規格性のある形状を示す核が明確ではない。盛土高も0.8mほどに過ぎず、3段階目と4段階目の境も各地点で相違を示す。(第17図A-A'・10A/10B、B-B'・10A/10Bの各層)

1号主体部検出のきっかけは、木棺の陥没を示す盛土の乱れであったが、陥没面精査においてもプランを明確にできなかった第一の要因は、本主体部が無墓墳であることを強く示唆している。1号主体部設置段階の検出状況を示すC・D・Eラインの土層断面(第6図)は一様ではないものの、C・Dラインでは木棺覆土の南側盛土が水平を保ち構築され、北側で緩やかに傾斜する土層が検出される。また、Eラインでは、南側盛土に墓墳の存在を思わせるラインがあるが、棺の北側ではC・Dライン同様の状況が伺われる。このような状況から4段階目盛土は、1号木棺の設置を考慮して南側で水平を保ち高くし、北側は傾斜を有し3段階目に僅かに被覆する程度であったであろう。そして、南と北側盛土の変換線上を木棺に見合う盛土の整形をし、1号主体の木棺を設置したものと考えられる。

5段階目は、第1主体部木棺設置後の盛土被覆の段階である。被覆土は、これまでの墳丘構築土がローム土を主体とするもののローム土以外の黒色土などがある程度混在するものであった。しかし、この段階では、墳丘外側にある程度の黒色土が混在するものの、主体部被覆土はローム土のみであると言っても過言でないほどに意識的な行為が見うけられ、第2主体部の木棺上面の標高34.1mまでローム土で墳丘を構築する。(第17図A-A'・12/13A/13B、B-B'・11A/11Bの各層)

6段階目は、第2・3主体の被葬者埋葬とその後の墳丘構築である。前段階と同様に墳丘内側の盛土はローム土のみで行う。(第17図A-A'・14/15A/15B、B-B'・12A/12B/13の各層)

ここで問題となるのが、第2・第3主体の被葬者の埋葬が何時の時点で行われたかであるが、第2・第3主体には墓墳が伴わないことは既に記した通りで、第2・第3主体の被葬者埋葬が最終的な墳丘構築過程において追葬された状況を呈している。しかしながら、棺の主軸方位が第1主体とは大きく異なる点や副葬品の比較によって1号→2号→3号の順で埋葬されたことは明らかで、第1と第2・3主体とには明確な時間差が見られる。そうだとすると、本来ならば第2・3主体部には墓墳が伴うはずである。第3主体については、検出時点で上層の土層観察用ベルトを取り外した後であるため、見落としの可能性はあるものの、第2主体部上層の盛土中には、追葬に伴う掘方が検出されない。



第18図 古墳復元図

7 墳形の復元

墳丘部分については、ほぼ調査を実施できたが、周溝は南側のトレンチ 1 箇所のみで、北側斜面では周溝や古墳築造に伴う台地整形面を明確にすることができず、墳形の復元は限られた資料から判断せざるを得ない。

墳形は、張出付きの可能性は残しながらも円墳である。南側周溝のトレンチ調査では、墳丘裾の地山面を削り出した幅 1 m ほどの 2 段から成るテラス状の平坦面を巡らすことが想定され、復元中心点を第 1 主体部の中心に置き、周溝底面内側までの周溝底面内径の半径 25m で墳形の復元を試みたのが第 18 図である。墳丘径は周溝底面内径で 50m を越えるものと推定できる。北・東・西側では、1 段目平坦面内側のラインが盛土裾に設定され、現況測量図では東側にその存在を推定されるものの北・西からは観察できない。但し、北側斜面の調査で、標高 25m ラインに僅かに変換線が認められ、周溝底面内側ラインが想定される。周溝外側の外径では 63m 強を計測する。

墳丘径は 50m と復元したものの、これは最小規模で、北側の近現代に畑地として利用されていた部分が北側周溝底面に当たると見なすと、墳丘径 54m 前後を測る可能性もある。

8 墳丘出土の土器

墳丘からは、底部焼成前の埴輪壺ともいえる土器片を出土するものの、その全体の器形を復元できたものはない。

1～28 は、墳丘表土中から検出した、焼成前底部穿孔土器と思われるもので、1～22 は丁寧な作りである。

1・2 は接合しないが同一固体であろう。口縁は大きく外反し推定口径 40cm、有段部径約 24cm、頸部下端径約 16.5cm・上端径約 22.5cm、推定頸部高 10cm、推定口縁高 15cm を計り、二重口縁を呈する。口縁直立部下端が断面 U 字形を呈して僅かに垂下し、有段部内面には稜を持たない。口縁端部は手慣れたシャープな横ナデが施され、内外面共に細かな刷毛目整形を施す。

3 と 4 も同一固体であろう。口縁は大きく外反し推定口径 43cm、有段部径約 22cm、頸部上端径約 21cm、口縁高約 20cm を計り二重口縁を呈する。口縁直立部下端が僅かに垂下し、有段部内面には稜を持たない。口縁端部には手慣れたシャープな横ナデが施され、内外面ともに細かな刷毛目整形を施すが、外面中位は鋭い筧ナデ、内面には指頭圧痕を施す。

5 は有段部径約 24cm、現存高 6.5cm、頸部上端径約 23cm を計り、内面には稜を持たない。内外面共に細かな刷毛目整形を施す。

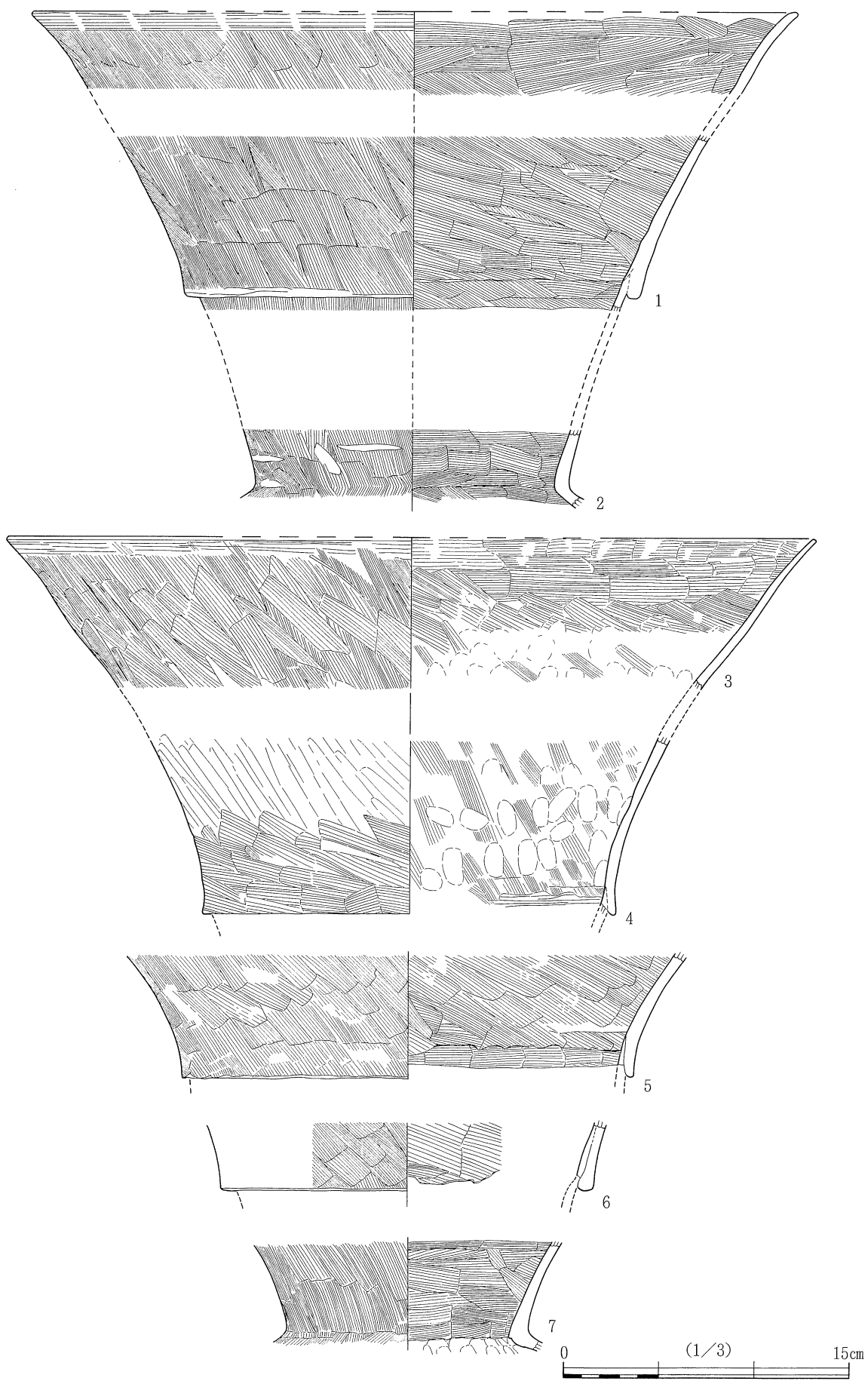
6 は有段部径 20～24cm、現存高 3.5cm を計り、内面には稜を持たない。内外面共に細かな刷毛目整形を施す。

7 は頸部片で、頸部下端径約 13cm、頸部上端径約 16.5cm、現存高 5cm を計り、内外面共に細かな刷毛目整形を施し、肩部内面には指頭圧痕を残している。

8～12 は口縁部小破片である。

8 は推定口縁径 24～30cm、9 は口縁径 14cm 以上を計り、口縁端部内外面に強いシャープな横ナデで、外面には斜行する細かな刷毛目整形を施す。

10 は推定口縁径 32cm、現存高 8cm を計り、口縁端部は丁寧な横ナデ、外面には斜行する丁寧で細か



第19図 古墳出土遺物(1)

な篋ナデ、内面には横位の篋ナデを施す。

11は推定口縁径30cm、有段部径約19cm、現存高8.5cm、頸部上端径約18cmを計り、口縁端部は丁寧な横ナデ、外面は斜行する丁寧な篋ナデ、内面は丁寧な篋ナデ、有段部外面には篋による横位の強いナデを施す。

12は推定口縁径29cm、有段部径約20cm、口縁高5.5cm、推定頸部径18.5cmを計り、口縁は内外面共に大きく横ナデで、外面下端は丁寧な篋ナデを施し、口縁下端は僅かに垂下する。

13～16は頸部の小片である。

13は頸部下端から肩部の小片で推定頸部径13.5cmを計り、外面には縦位の丁寧な細かい刷毛目、内面には斜行する不規則な細かい刷毛目を施し、頸部上端部内面には強いシャープな横ナデを施す。

14は推定頸部径15cm、現存頸部高5.5cmを計り、外面にやや斜行する細かい刷毛目、内面不規則な斜行する細かい刷毛目を施す。

15は推定頸部下端径16cm、頸部上端径18.5cm、現存頸部高5cmを計り、外面にやや斜行する細かい刷毛目、内面斜行する不規則な細かい刷毛目を施す。14・15は同一固体の可能性もある。

16は推定頸部下端径15cm、頸部上端径15.5cm、現存頸部高6cmを計り、外面丁寧な縦位の篋ナデ、内面斜行の刷毛目の後横位の篋ナデで下端には横位の刷毛目を施す。

17～19は頸部直下の肩部片である。

17・18は、頸部直下屈曲部の肩部片で、相方とも上端径約18cmを計り、上端外面には強いナデにより僅かに凹面を呈し、外面は丁寧な斜行する篋ナデ、内面は横位の篋ナデを施す。

19は外面縦位の刷毛目、内面に粘土継目痕跡と指頭圧痕を残す。

20～22は、焼成前底部穿孔土器片である。

20は底径9cm計り、急角度で立ち上がり胴部へ移行し、端部はやや厚みを増し穿孔切り口はシャープなコの字状を呈し、内外面丁寧に細かい刷毛目整形を施す。

21は底径11cmを計り、緩やかに立ち上がり、端部の切り口はシャープなコの字状を呈し、内外面丁寧に細かい刷毛目整形を施す。

22は小片で底径11cmを計り、端部は急に厚みを増しシャープな切り口を呈し、外面丁寧に細かい刷毛目整形を施し、内面に部分的に刷毛目を残すものの丁寧な篋ナデを施す。

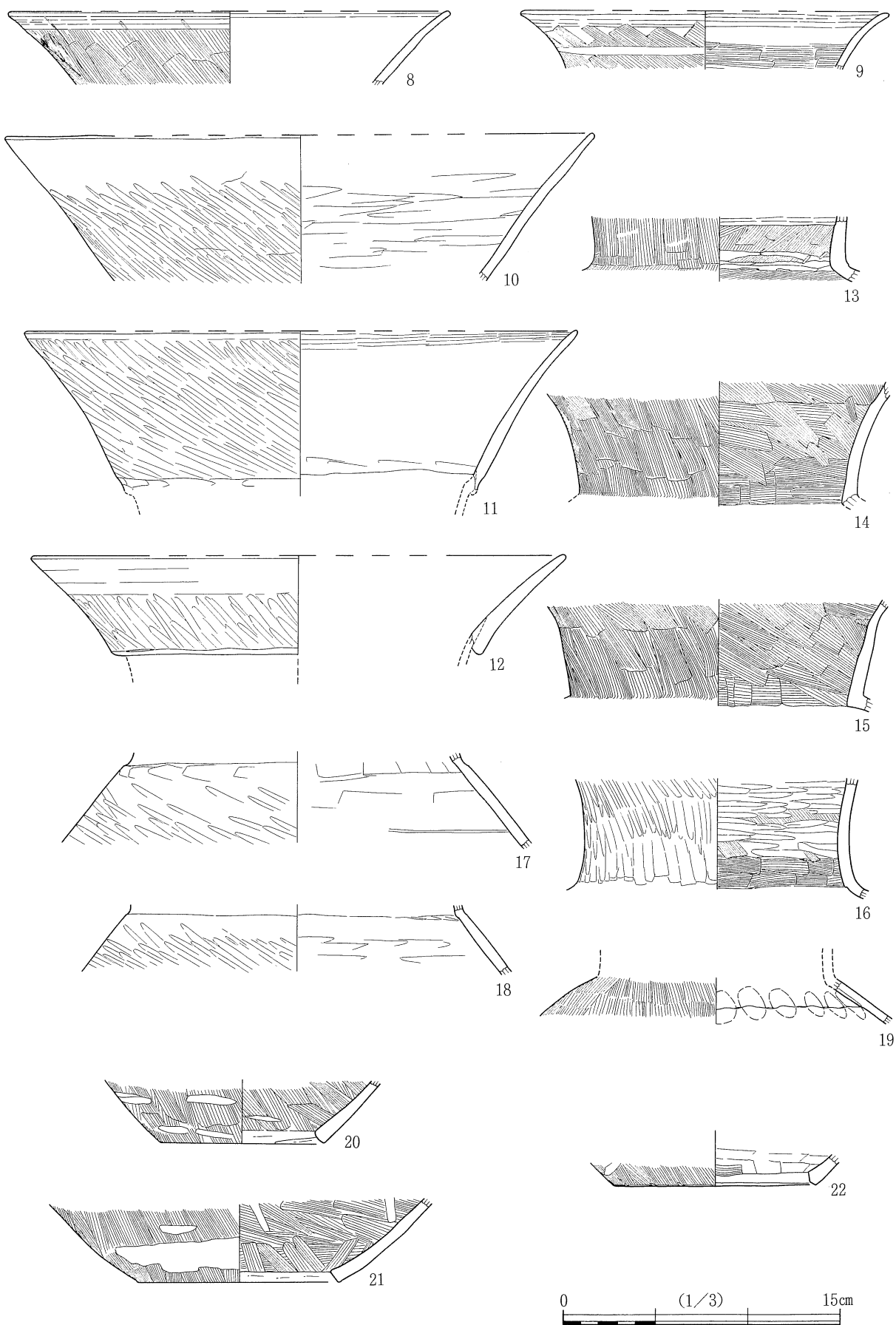
23～28は、雑な作りの感のある焼成前底部穿孔土器である。23は胴片の部分的な遺存で、胴最大径21cm、現存器高12cmを計り、球状の胴部を呈する。外面上端は斜行の丁寧な篋ナデで、それより下は横位の雑な篋ナデ。内面には部分的に輪積痕をとどめる雑な削り状の篋ナデを施す。

24は胴から底部で推定胴最大径26cm、底径9.5cm、現存器高20cmを計り、球状の胴部を呈する。外面には凹凸を有し上端は斜行の篋ナデで、それより下は横位の雑な篋ナデ。内面には部分的に輪積痕をとどめる雑な削り状の篋ナデを施す。外面には竹管工具による線刻が施されている。

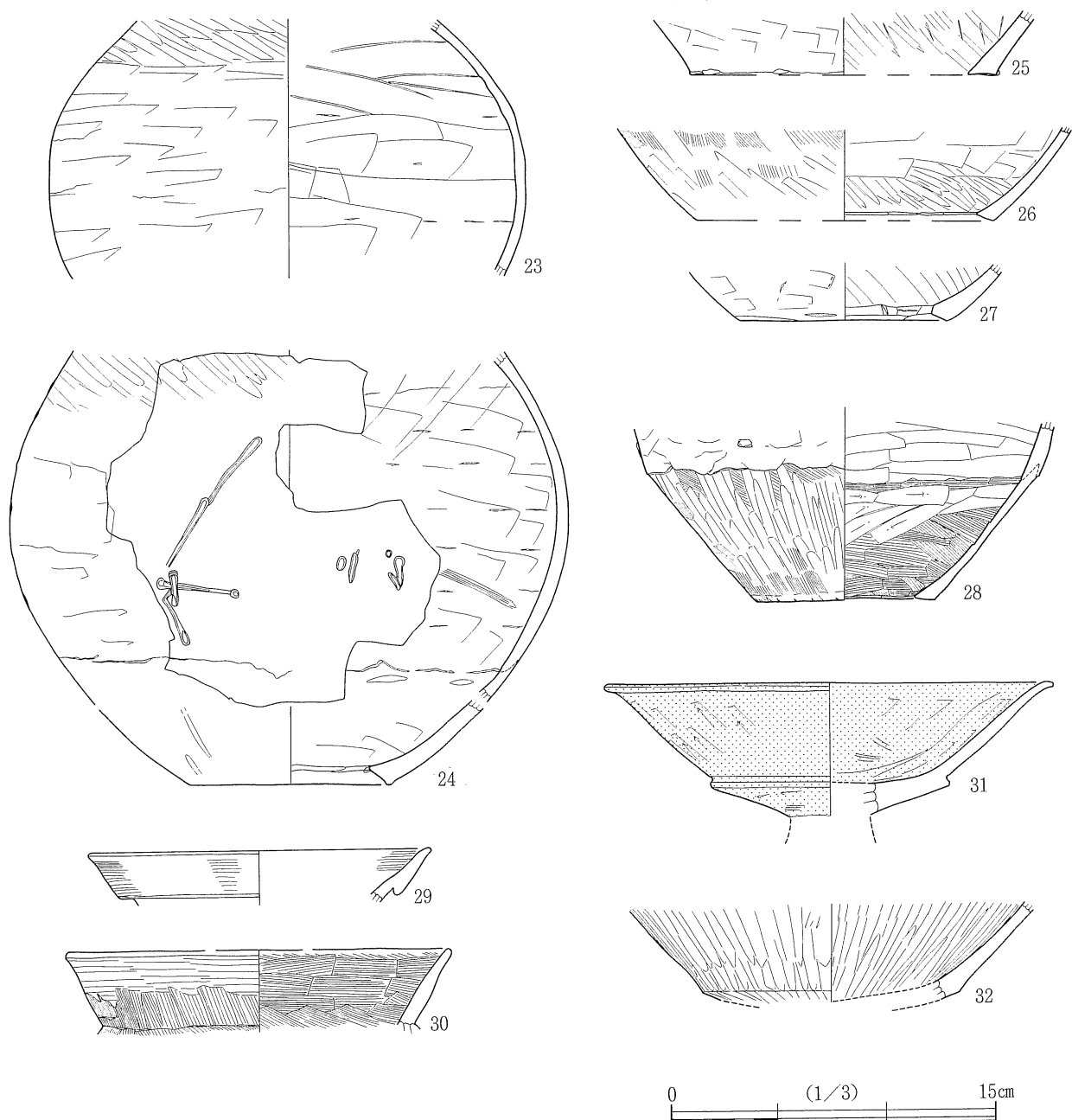
25～27は底部で片である。

25は推定底径14～18cmを計り、直線的に外方に関き胴長の器形を推測させる。端部切り口は鋭角を呈し、切り口は水平となる。外面は雑な篋ナデ、内面は弱い雑な篋ナデで篋の圧痕を残す。

26は推定底径17cmを計り、急角度で立ち上がり胴部へ移行する。端部内側の切り口は鋭角を成す。外面刷毛目の後篋ナデで、内面上端は横位の篋ナデ、下端は斜行の丁寧な篋ナデを施す。



第20図 古墳出土遺物(2)



第21図 古墳出土遺物(3)

27は底径10cmを計り、端部切り口は数度に渡り抉った後が残りが非常に雑である。外面雑な篋ナデ、内面丁寧な篋ナデを施す。

28は底部～胴部片で、底径8～9cm、現存器高8.2cmを計り、胴部下端に屈曲が見られ胴長の器形を連想させる。外面上端は凹凸を残す荒い篋ナデ、下端は刷毛目を篋ナデで消している。上半は横位の篋ナデ、下半は雑な刷毛目を部分的に削り状の篋ナデで消している。

29～32は、墳丘表土中から検出した土師器片である。

29は小片で推定口縁径16～20cmを計り、口縁立ち上がりの短い二重口縁を呈する。有段部は僅かに断面U字形を呈し僅かに垂下し、内面には明瞭な稜線を持たない。口縁内外面とも手慣れた横ナデを施し、口縁端部を摘み出す様に整形している。

30は甕口縁部で推定口径16～20cmを計り、頸部はくの字状に強く屈曲する。口唇から外面上半は手慣れた強い横ナデを施し、下半には縦位の刷毛目、内面には横位の刷毛目を施す。

31は、高坏で脚を欠き坏の一部の遺存である。口縁径21cm、現存器高6cmを計り、口縁は僅かに湾曲しながら緩やかに大きく開き端部は水平となり、坏部下端に鐔状の突出部を有する。外面には篋ナデを施すものの部分的に削り状となる。内面は篋ナデで、内外面とも丹彩を施す。

32は、高坏坏部片で口縁と脚を大きく欠く。下端には稜線を有し屈曲して大きく開く。内外面共に丁寧に篋ミガキを施す。

1～28の焼成前底部穿孔の二重口縁壺は、その器形・整形痕などの特徴から分けられる。

1・2や3・4などの様な有段部からの口縁の立ち上がりが高く、頸部も比較的長く、器表面に刷毛目を施すものと（A類－1）、10・11・12などの有段部からの口縁の立ち上がりが10cm以下と前者に比して低く、器表面に篋ナデを施すもの（A類－2）。底部については前者が20や21、後者が26がその胎土や焼成の特徴から考えられる。また、口縁形態が不明だが、23・24などのやや雑な作りの球形の胴部を特徴とする焼成前底部穿孔土器（B類－1）、そしてより雑な作りの28の様な胴下端に継目による屈曲があり鈍い稜線を有し、穿孔部切り口が水平を呈する（B類－2）ものも存在する。A類からB類の2つに大別でき更に細分可能であるが、これは同時に時期差を示すものと理解できる。

A類－1については、胴部形態が不明だが、口縁径40cm強を計測し大型化し、検出された土器片の細部の特徴や部位から4個体以上のが存在したものであろう。A類－2は口縁立ち上がり10cm前後とやや幅があるが口縁径30cm前後を計測し、比較的大型のものを予測させ、3個体以上の存在がある。B類－1は胴径22～26cmを計り、A類－2より小型化し、3個体ほどが存在する。B類－2は胴径20cm前後とより一層小型化し、1個体が存在するものと思われる。

9 盛土内出土の土器

古墳築造に際し、墳丘の盛土中に混入していた土器で、大厩浅間様古墳築造以前の周辺の状況を示す資料である。縄文時代から古墳時代前期の土器が検出されるが、縄文時代の土器については、別項を予定し、今回は掲載しない。

1～37は、弥生時代中期の所産と思われる。

1は、細頸壺の頸部小片である。頸部に6条の条線を巡らし、下端に2条の条線からなる波状ないし同心円の一部分が観察される。2は細頸壺の頸部下端の小片で横位の条線と不規則な縦位の条線を施す。1・2は弥生中期須和田式期の所産と思われる。

3～9は、口縁内面に折り返しを有する鉢である。3～7・8の口唇部は指頭の摘みを施し、口縁波状口縁を呈している。3～6の内面折り返し端部には指頭圧痕を施す。3・4の外面には細い条線が施される。7の内面には横位の刷毛目を施す。

10～17は鉢の口縁部片で、10～15は、口縁を摘み上げにより波状を呈する。11の外面には2条単位からなる羽状描文を施す。12・13の外面には3条単位からなる羽状描文を施す。14の外面には刷毛目状のナデを施す。16の口唇部は刻みを施し、口縁波状を呈する。17は口唇部に指頭の摘みを施し、口縁波状を呈する。

18～26は鉢胴部の小片である。18は、不規則な櫛目を施した後、条線により羽状描文を施す。19・

25は、条線で不規則な横位の羽状描文を施す。20は、不規則な櫛目を施した後、3本単位の条線により横位の羽状描文を施す。21は、2本単位の条線により横位の羽状描文を施す。22は、刷毛目を施した後、2本単位の条線により横位の羽状描文を施す。23・24は、3本単位の条線により横位の羽状描文を施す。26には、5本単位の条線により縦位の羽状描文が施されている。

27～32は装飾壺の小片である。27・28には6～7本単位の条線と3本単位の波状文を巡らし、無文帯には丹彩を施す。29には、非連続の5本単位の条線を巡らす。30は、単節の縄文帯と結紐からなり、結紐縄文には5条の条線を重ね、無文帯には丹彩を施す。31には、結節縄文帯を等間隔に3段施す。32は、幅広の結節縄文帯を巡らし、無文帯には丹彩を施す。

33～35は、壺の口縁部である。33は口径7cmを計り、口縁立ち上がりが短く、器肉が厚く雑な作りである。外面口縁は櫛目で頸部から胴部には雑なミガキを施す。34は、推定口縁径16cmを計り、ラッパ状に大きく開き、外側に折り返し複合口縁を呈する。内外面とも雑なミガキを施し、口唇部には結節縄文を転がす。35は、推定口縁径10cmを計り、僅かに開き内側に折り返し、口唇部はシャープなコの字状を呈し、部分的に無節縄文を施す。外面は縦位の雑な篋ミガキを施し、内面折り返し部は丁寧なミガキで以下篋ナデを施す。

36～37は鉢ないし壺の底部である。36は底径7.5cmを計り、外面は荒い縦位の櫛ナデで、内面篋ナデである。37は、底径7.8cmを計り、高台状を呈する。

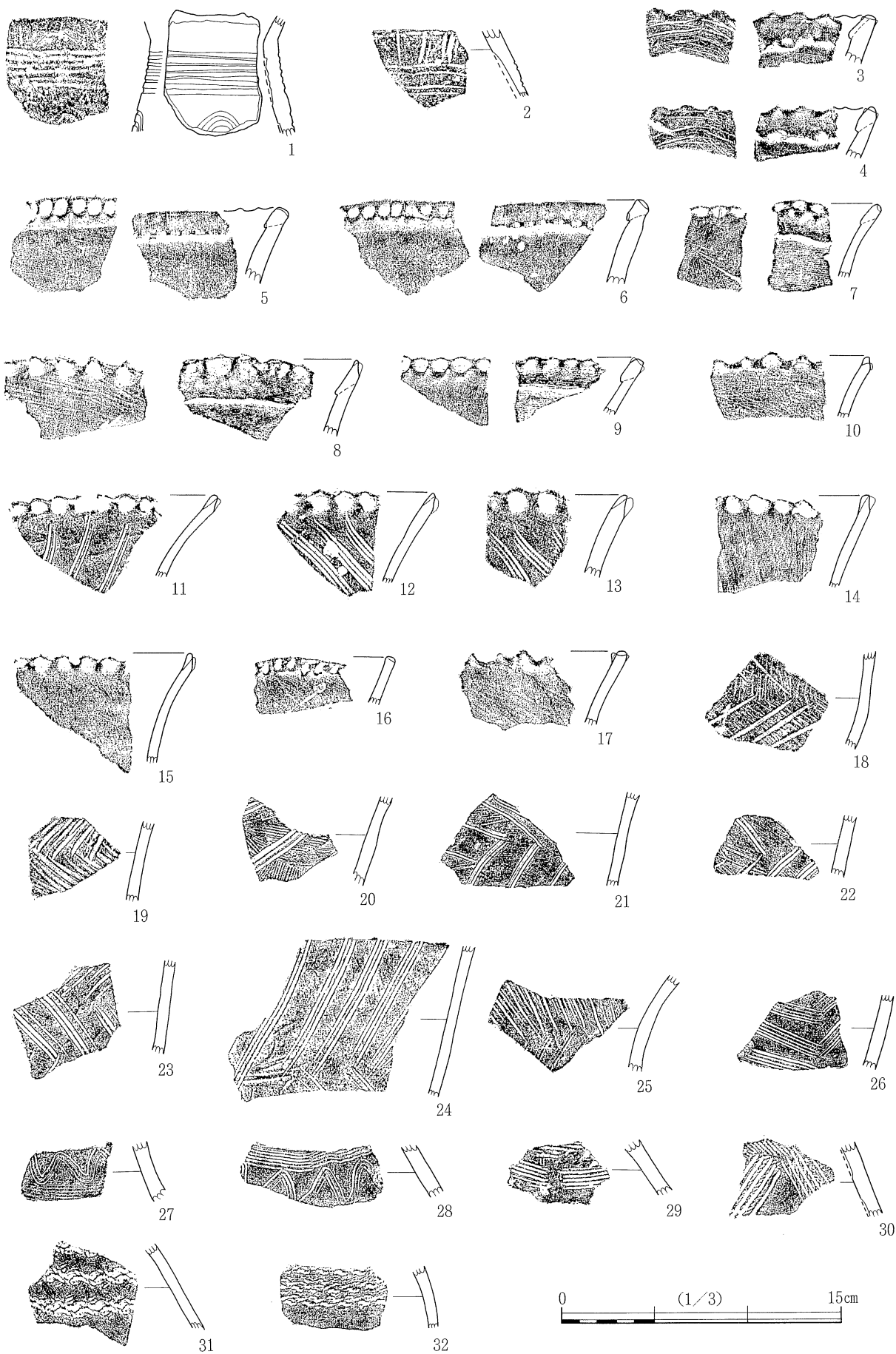
38～48は弥生後期の所産と思われる。38は、壺ないし鉢で口縁径26cmを計り、粘土帯張付けにより複合口縁を呈する。口唇と張付け端部には指頭押捺により波状を呈する。

39～41は壺の口縁部である。39は、推定口径20cmを計り、粘土帯張付けにより複合口縁を呈する。口縁には羽状縄文地に沈線の山形文が3段に巡り、円形朱文を施す。下端は刻みにより波状を呈している。40は、口縁径21cmを計り、口縁端部が大きく垂下し、内面に稜線を残し大きく開き有段状を呈している。口縁外面には明瞭な10本の条線が巡らされ、内面は丁寧に篋ミガキを施す。頸部には内外面ともに丹彩を、口縁内外面は黒彩を施す。41は、口縁径21cmを計り、端部は僅かに上方に立ち上がる。外面に不鮮明な結節縄文帯を巡らし、内外面ともに篋ミガキを施す。

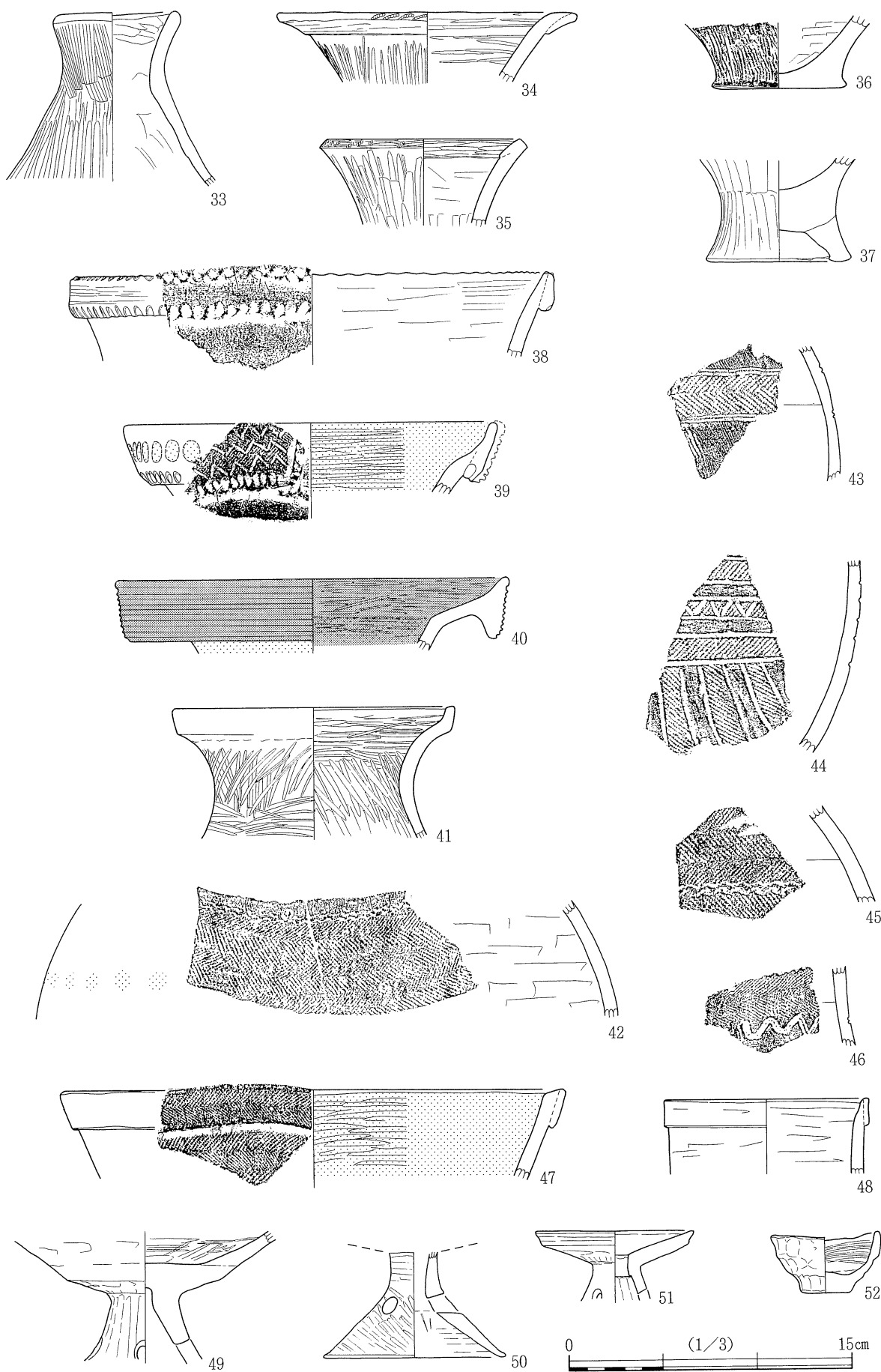
42～46は壺の胴部小片である。42は、3段以上の羽状縄文の上端を結節縄文で区画し、羽状縄文には円形朱文を巡らす。43は、単節縄文・山形文・無文帯を沈線区画で組み合わせ、無文帯には丹彩を施す。45は、単節羽状縄文帯に結節縄文帯を巡らす。46は、単節羽状縄文帯下端を2条の沈線で山形文で区画する。

47は、鉢口縁部小片で口縁は粘土帯を張り付け厚くし、口唇と外面には羽状縄文を巡らし、内面篋ミガキで丹彩を施す。48は、口縁に粘土帯を張り付け厚く直立する。

49～52は、古墳時代の土師器である。49は高坏で脚と坏部の小片である。脚には円形の孔が穿たれ、坏下端は僅かに屈曲し鈍い稜線を有する。外面篋ナデ、坏内面は雑なミガキを施す。50は、器台脚で坏部を欠く。脚高は5.5cmを計り、上端は柱状を呈し、円形の3孔が穿たれる。51は、器台で口径8.5cmを計り、脚端を欠く。口唇は横ナデで摘まみ出し、脚には円形の3孔が穿たれる。52は手づくね土器で口径6cm、底径2.7cm、器高3.2cmほどを計り碗形を呈する。



第22図 古墳盛土出土遺物(1)



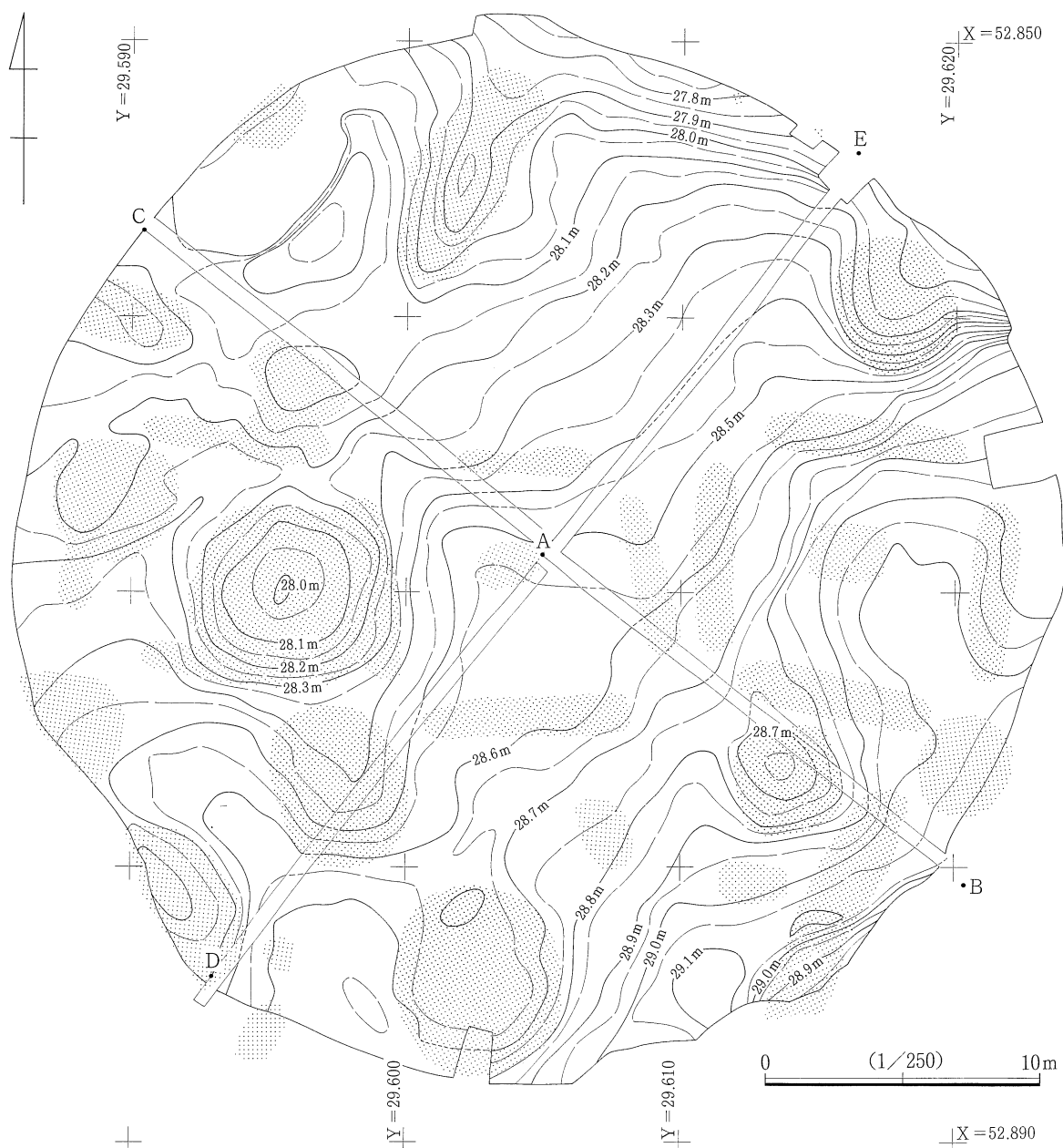
第23図 古墳盛土出土遺物(2)

第3章 墳丘下の遺構と遺物

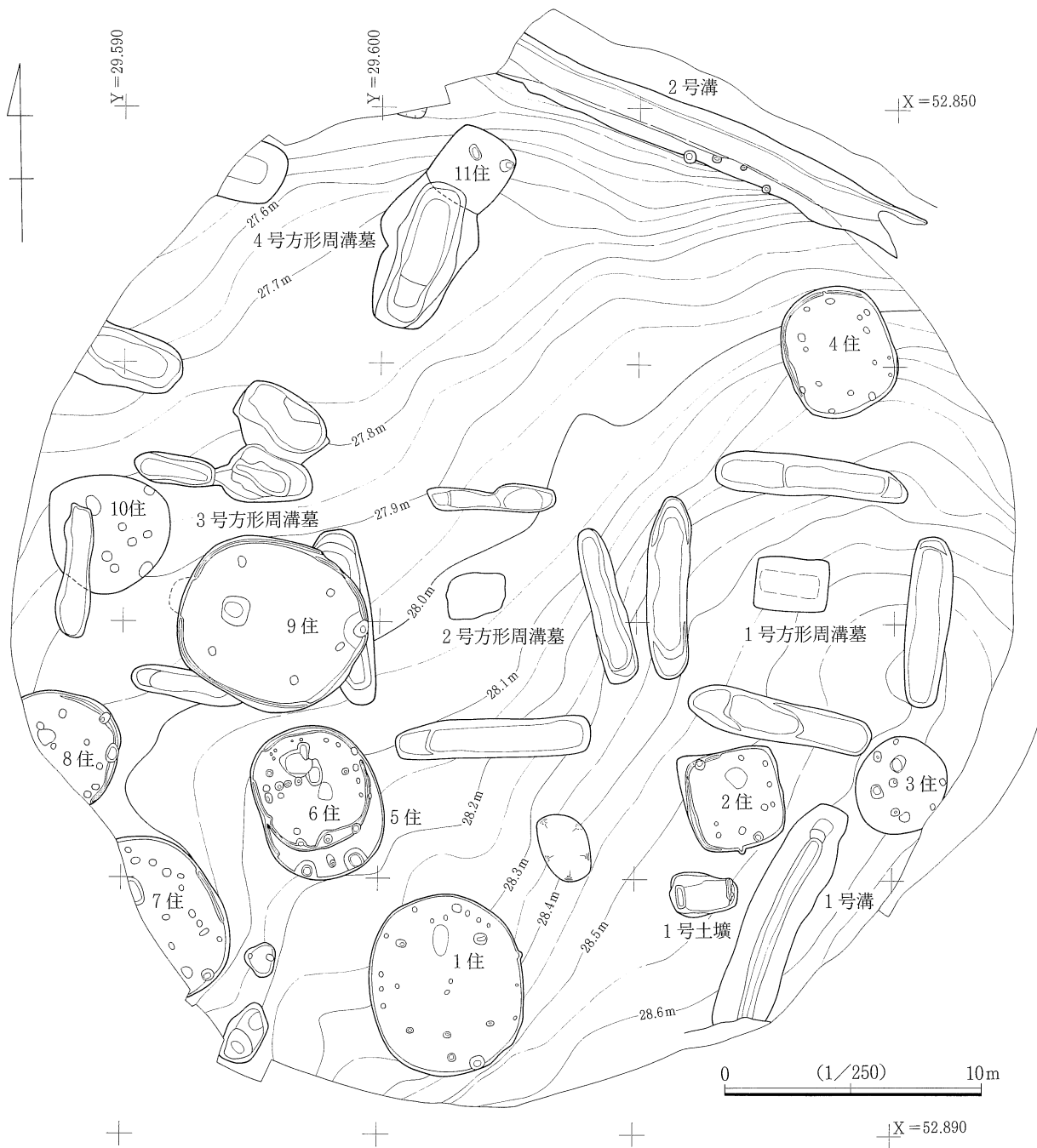
1 墳丘下の状況

墳丘盛土は、第1主体部設置状況を記録後に、重機により掘削搬出し、旧表土直上の10～15cmの盛土は手作業により搬出した。

古墳盛土除去後の旧表土上面には、墳丘構築に伴う遺構・遺物の検出は皆無であった。墳丘下旧表土面の標高は、27.7～29.1mで、比高差1.4mを測る。旧表土面には、凹凸が存在するものの総体的には南東が高く、北西側に向かって漸次的に低くなる。この緩やかな傾斜は墳丘下地形測量図（第24図）を見る限りでは、概ね台地縁辺の地形に則したものであろう。



第24図 墳丘下地形測量図



第26図 墳丘下遺構全体図

旧表土上面の凹凸面下には、その後の調査で竪穴住居跡や方形周溝墓等の遺構が検出された。凹面は古墳盛土の圧力により遺構覆土が沈降し、より凹面化したことも考えられるが、この凹面は遺構が廃絶され自然堆積を保持したままで、古墳構築に伴う計画的な土地の整地が行われなかったことを強く示唆するものである。この事は凸面でも同様なことが言え、1・2・4号方形周溝墓方台部には、等高線から墳丘らしき盛り上りが観察できる。この盛り上がりは、ローム土を含まない腐食土の黒褐色を主体とするものである。

墳丘下の遺構の調査は、基本的な土層観察後、重機により表土除去を実施して行った。従って、下層の遺構の規模は、旧表土除去後のソフトローム面上での確認の数値である。

2 竪穴住居跡と出土遺物

1 号住居跡

墳丘下南端にプラン全体を検出した。南側に試掘調査時の縦長の長方形の攪乱がプラン南端にかかり、床と南壁の一部を削平する。平面形は楕円形を呈する。炉跡とP(ピット) 5やP 6の梯子穴を結んだ主軸方位はN-5°-Wを指向し、長軸は主軸にある。規模は、長軸長6.96m・短軸長5.98mを測る。確認面からの深さは0.18~0.35m、旧表土上面からは0.56~0.69mを測るものと推定され、南西壁が高い。炉跡はプラン中央を通る中軸線上の北側に敷設され1.18×0.6mを測る。ピットの深さは、P 1-79.3cm・P 2-105.5cm・P 3-89.2cm・P 4-99.5cm・P 5-15.8cm・P 6-18.9cm・P 7-45.9cm・P 8-3.5cm・P 9-4.2cmで、P 10~P 31は3~10cm以下を測りピット底面に僅かに柱痕跡と思われる圧痕を残すものである。支柱穴はP 1~P 4の4穴で、支柱穴間はP 1~P 2が3m、P 2~P 3が3.3m、P 3~P 4が3.1m、P 4~P 1が3.3mを測る。床面積は31.89㎡を計る。覆土および床面には焼土や建物部材の炭化物が大量に見られ火災住居跡であるが、床面上から良好な遺物の検出が無く、廃絶後の消失とも思われる。

出土遺物は、小破片が大半で正確な器形を把握できるものはない。1は甕の口縁の破片で器表面に明瞭な輪積み痕跡を残し、内面篋などで、口唇は押捺により波状を呈し、推定口径28cmを計る。2は甕の頸部から胴部破片で頸部外面に明瞭な輪積み痕跡を残し、内面はミガミ状の篋ナデで部分的にミガミを施し、推定頸部径20cmを計る。3は鉢の口縁破片で口唇と口縁外面に細縄文を施し口縁外面は羽状を呈している。内面は雑な篋ナデで、内面と太い沈線で仕切られた胴部には丹彩を施している。プランの形状や出土遺物から弥生後期久ヶ原期の所産である。

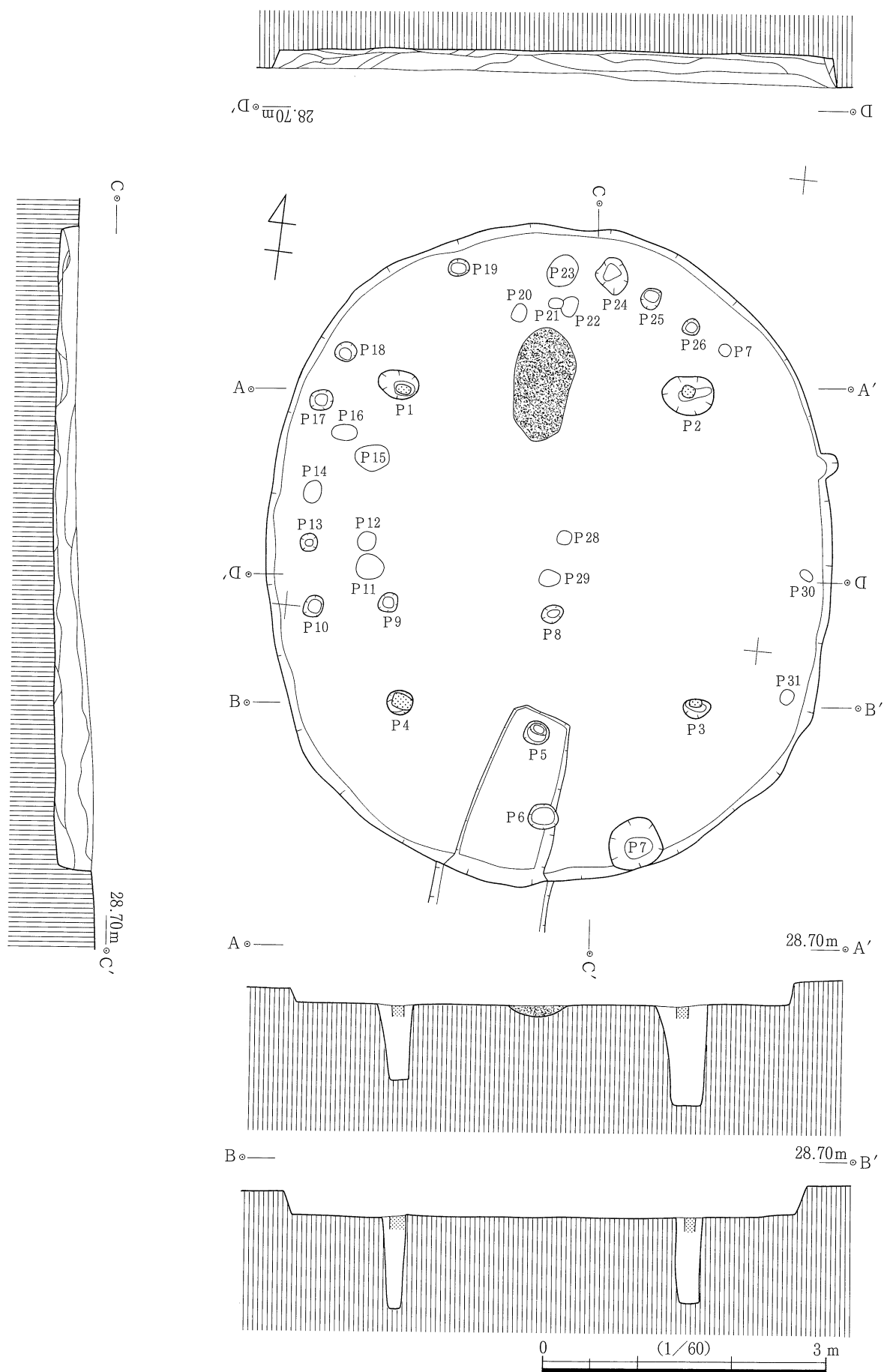
2 号住居跡

墳丘下東南側にプラン全体を検出した。平面形は、北西隅に壁上面で2段に掘り込まれやや均整を欠くが、胴張り気味の隅丸方形を呈する。主軸方位はN-11°-Wを指向し、長軸は主軸にある。規模は、長軸長3.9m・短軸長3.75mを測る。確認面からの深さは0.31~0.33m、旧表土上面からは0.58~0.72mを測るものと推定さる。炉跡はプラン中央を通る中軸線よりやや東に寄って敷設され不整な円形で0.85×0.8mを測る。ピットの深さは、P 1-66.4cm・P 2-4.4cm・P 3-7.8cm・P 4-6.5cm・P 5-5.9cm・P 6-5.3cm・P 7-3.1cm・P 8-20.6cm・P 9-3.1cmで・P 10-3.1cm・P 11-11.8cm・P 12-8.0cm・P 13-5.6cmを測り、支柱穴は明瞭にできない。プラン北西半分と西・南隅壁直下に壁溝を敷設している。床面積は11.95㎡を計る。覆土は概ね自然堆積状況を示すものであるが炭粒を含む土層が観察される。

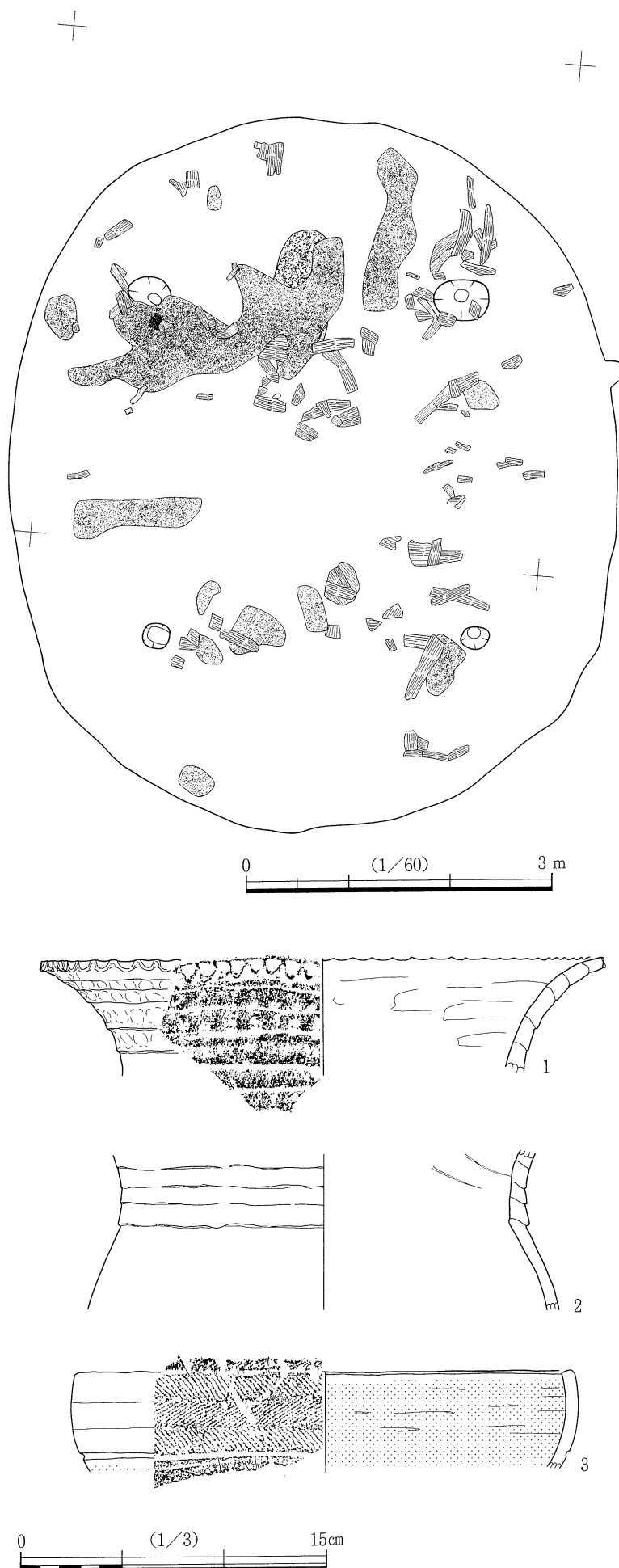
出土遺物は、小破片が大半で正確な器形を把握できるものは台付甕1点である。脚端部を欠く2分の1が遺存する。口径21cm、最大胴部径19.8cm、現存器高22.4cm。口唇は棒状工具によるキザミで波状を呈する。器表面胴上半は板状工具により荒いナデで条痕を、下半は斜方の削り状の篋ナデ。内面上半は横位のミガキ、下半は削り状の篋ナデを施す。器表頸部外面にススの付着が強く観察される。弥生後期末の所産である。

3 号住居跡

墳丘下東端にほぼプラン全体を検出した。平面形はほぼ円形を呈する。支柱穴が無く、炉跡もやや不規則な位置に設けられることから主軸方位は不明であるが、P 5を梯子穴と見なし炉跡と軸線を引



第27图 1号住居跡



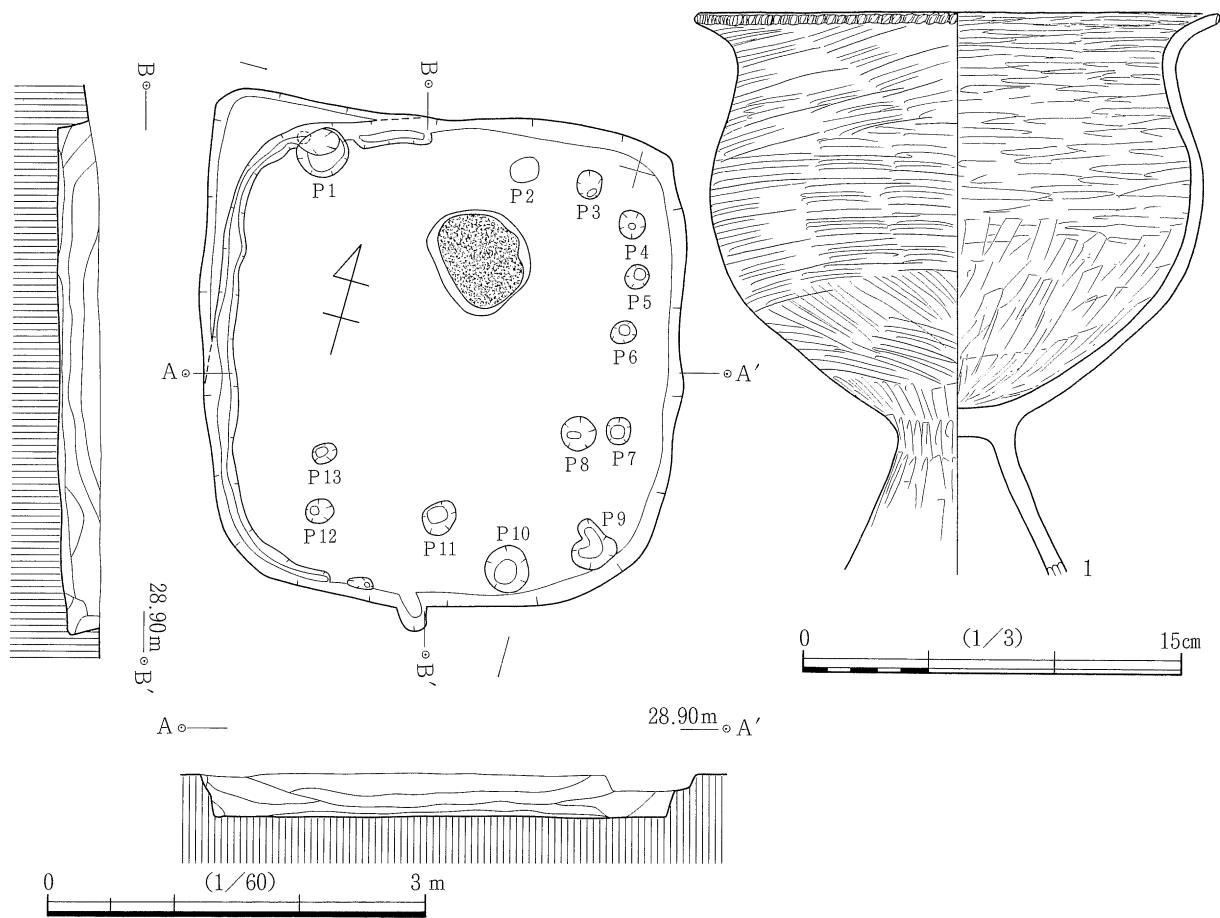
第28図 1号住居跡焼土検出状況と出土遺物

くとN-15° -Wを指向する。長軸方向はN-31° -Eを指向し、規模は、長軸長3.80m・短軸長3.42mを測る。掘り込みは浅く、確認面からの深さは0.03~0.05m、旧表土上面からは0.40~0.45mを測るものと推定される。炉跡はプラン北側に敷設され0.56×0.36mを測る。ピットの深さは、P 1-26cm・P 2-65.3cm・P 3-29.2cm・P 4-38.8cm・P 5-54.1cm・P 6-22.3cm・P 7-16.9cm・P 8-27.7cmを測る。床面積は10.29㎡を計る。

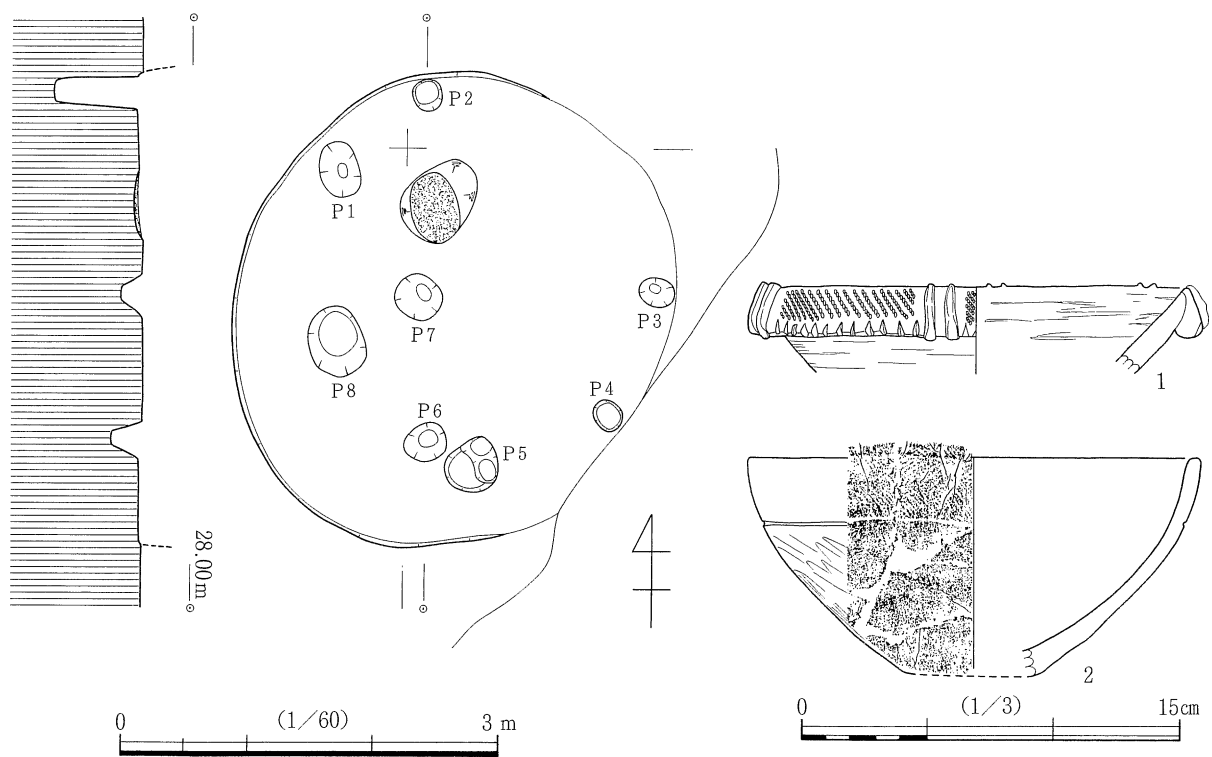
出土遺物は、僅かに数点出土する。1は壺口縁の破片で、2本1組の棒状浮文を6対配置したものと復元できる。外面には斜状縄文と下端にキザミを、内面はミガキ状のナデを施し、P 1より出土する。2は鉢で、口唇と口縁外面に羽状縄文を施し、沈線で体部と分けている。内面と体部外面は丹彩でミガキを施す。弥生後期後半の所産と感取される。

4号住居跡

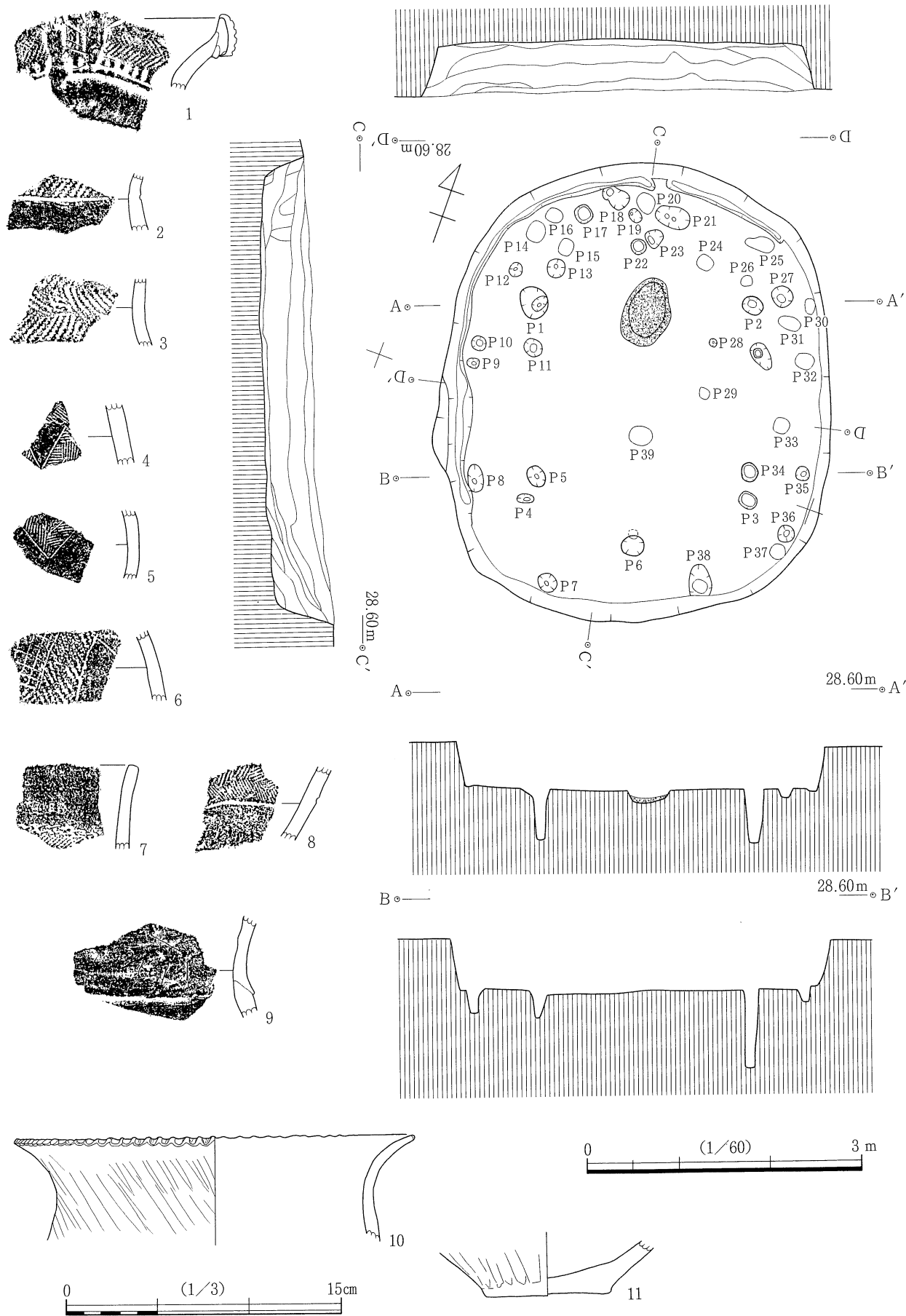
墳丘下北東端にプラン全体を検出した。平面形はほぼ楕円形を呈する。炉跡とP 6の梯子穴を結んだ主軸方位はN-16° -Wを指向し、長軸は主軸にある。規模は、長軸長5.04m・短軸長4.25mを測る。確認面からの深さは0.44~0.64m、旧表土上面からは0.56~0.82mを測るもの



第29図 2号住居跡と出土遺物



第30図 3号住居跡と出土遺物



第31図 4号住居跡と出土遺物

と推定され、南西壁が高い。炉跡はプラン中央をとおり中軸線上の北側に敷設され0.73×0.5mを測る。ピットの深さは、P 1－53.0cm・P 2－56.9cm・P 3－52.1cm・P 4－59.9cm・P 5－29.1cm・P 6－26.2cm・P 7－12.4cm・P 8－25.3cm・P 10－23.6cm・P 11－12cm・P 12－15.4cm・P 18－11.5cm・P 23－23cm・P 35－13.8cm・P 38－23.7cm・P 40－16.5cmで他のPは10cm以下を測る。支柱穴はP 1～P 4の4穴で、支柱穴間はP 1～P 2が2.35m、P 2～P 3が2.15m、P 3～P 4が2.4m、P 4～P 1が2.13mを測る。壁溝は、北と西に設けられるが東と南には無い。床面積は16.04㎡を測る。覆土は、レンズ状の堆積を示すがブロック状の土が混入し、所々に硬化面が存在し、廃絶後まもなく埋めもどされた様相を呈している。

出土遺物は、小破片が大半で正確な器形を把握できるものはない。1～6・11は壺で、7は直口壺口縁、8は鉢、9・10は甕の破片である。弥生後期後半の所産と感取される。

5号住居跡

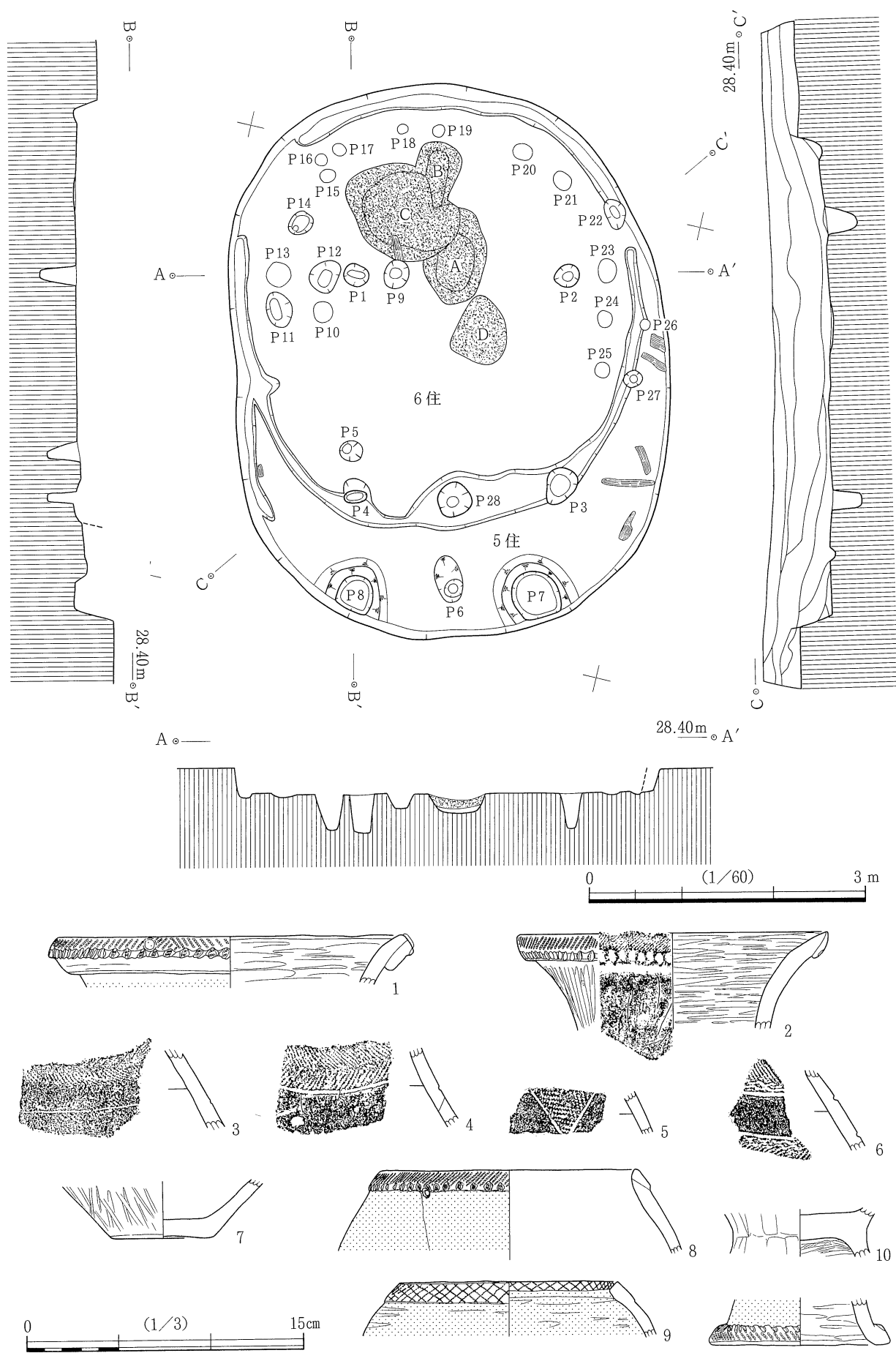
墳丘下南西部にプラン全体を検出するものの、床面を同一レベルに置く6号住居跡にプランを大きく掘り込まれ良好な遺存状態とは言えない。平面形はほぼ楕円形を呈する。炉跡AとP 6の梯子穴を結んだ主軸方位はN－11°－Wを指向し、長軸は主軸にある。規模は、長軸長は推定で5.5m・短軸長4.75mを測る。確認面からの深さは0.26～0.30m、旧表土上面からは0.64～0.72mを測るものと推定される。炉跡は6号住居跡内のAが本跡の炉でプラン中央をとおり中軸線上に敷設されている。ピットの深さは、P 1－38cm・P 2－38.3cm・P 3－47.4cm・P 4－35cm・P 6－24cm・P 7－18.7cm・P 8－8.2cmで、P 1～P 4の4穴が支柱穴を構成し、P 6は梯子穴である。南壁にP 7とP 8がP 6を挟んで設けられ、ピットの周囲にはローム土により土手状に床面より4～6cm盛り上げられている。壁溝は、西壁の一部が残るだけである。床面に住居構築材の炭化木が検出され火災住居跡であろう。推定床面積は19.8㎡を測る。

6号住居跡

墳丘下南西部にプラン全体を検出するものの、5号住居跡北側プランを大きく掘り込み、床面を同一レベル置く。平面形は丸みを帯びた楕円形を呈し、主軸方位は、支柱穴が明確でないが炉跡Bと梯子穴P 28を結んだ線を仮定すると、N－15°－Wを指向し、長軸は主軸にある。規模は、長軸長で4.9m・短軸長4.5を測る。確認面からの深さは0.20～0.32m、旧表土上面からは0.52～0.74mを測るものと推定される。炉跡はプラン内北側にA～Dの4ヵ所を検出するがAは5号住居跡の炉跡と考えられる。ピットの深さは、P 9－14.5cm・P 10－2.4cm・P 11－39.6cm・P 12－39cm・P 13－4.4cm・P 20－6.5cm・P 21－6.4cm・P 22－12.2cm・P 23－4.9cm・P 24－3.1cm・P 25－1.7cm・P 26－10.7cm・P 27－13.9cm・P 28－35.8cmを測る。壁溝は、北西隅と東の一部には検出されない。

5・6号住居跡出土遺物

出土遺物は、小破片が大半で正確な器形を把握できるものはない。1～7は壺で、1の壺口唇は張り付け肉厚となり口唇には縄文と丹彩された円形浮文を施す。内面および頸部外面はミガキで丹彩を施す。2は折り返しの口縁外面に縄文とキザミで、内外面丁寧なミガキを施す。3は羽状縄文の間に沈線を施す。3は沈線で区画された羽状縄文を施し、無文帯は丹彩。5は三角形の沈線で区画された縄文と無文帯は丹彩を施す。6は沈線と結節縄文で区画された縄文を施し、無文帯は丹彩。7は底部で外面は雑なミガキ、内面ナデを施す。8は鉢上半部で折り返しの口縁は肉厚で外に縄文とキザミを



第32図 5・6号住居跡と出土遺物

施す。9は鉢上半部で折り返しの口縁は肉厚で角状を呈し、口唇と口縁外に撚り糸で斜格子文を施す。10・11は台付き鉢で、11は脚端部を折り返し縄文とキザミを施す。12～15は甕の破片である。12は外面篋削り状のナデ、内面篋ナデ、口唇部は押捺により波状を呈する。13は輪積痕を明瞭に残し、内面篋ナデ、口唇部は押捺により波状を呈する。14は頸部破片で輪積痕を残し、下端の輪積には棒状工具に縄を巻き付けた圧痕を施す。15は小型甕で雑な作りで、内面に輪積痕を残し、口唇部キザミで波状口縁を呈している。16は鉢か甕の底部で尖底状を呈し、外面は回転により摩滅している。

5・6号住居跡の出土遺物は、小片が多く必ずしも遺構に伴うものと言い切れないが、16以外は弥生後期の範疇で考えられ、遺構の切り合い関係から5→6号住居跡で、6号住は後期末の弥生町期と判断される。

7号住居跡

墳丘下南西端にプラン半分を調査区域外に置き検出した。平面形は楕円形を呈するものと思われる。南西半分が調査区域外に在り明らかではないが、炉跡と支柱穴を構成するP1・P2から主軸方位はN-32°-Wを指向し、長軸は主軸にあると思われる。規模は、長軸長6.5mで、短軸長は5.2mと推測できる。確認面からの深さは0.27～0.36m、旧表土上面からは0.83～0.88mを測る。炉跡はプラン中央を通る中軸線上に北東半分を検出する。ピットの深さは、P1-56cm・P2-46cm・P3-51.4cm・P4-40.3cm・P5-20cm・P6-13.2cm・P7-24.1cm・P8-22.5cm・P9-10.1cm・P10-16.6cm・P11-4.8cm・P12-36.6cm・P13-6.7cm・P14-9.7cm・P15-7.6cm・P16-10.7cm・P17-6.7cm・P18-23.8cm・P19-12.4cm・P20-26.9cm・P21-27.4cmで、P1～P2が支柱穴を構成する4穴の内の2穴で支柱穴間は2.75mを測る。床面積は推定で26.4㎡を測る。覆土および床面には焼土や建物部材の炭化物が大量に見られ火災住居跡である。壁溝は北東壁の一部に敷設されている。

出土遺物は、破片が大半で正確な器形を把握できるものはない。1は甕の口縁胴部片で棒状工具先端で圧痕により胴部輪積痕を押さえている器表面は板状工具でナデ、内面篋ナデを施す。2は壺口縁片で折り返し肉厚で口唇に縄文を施し、器表面丹彩される。3は壺底部で器表面丹彩を施す。4は全長7.8cmで前面と背面に削りだしの加工痕跡を残している。

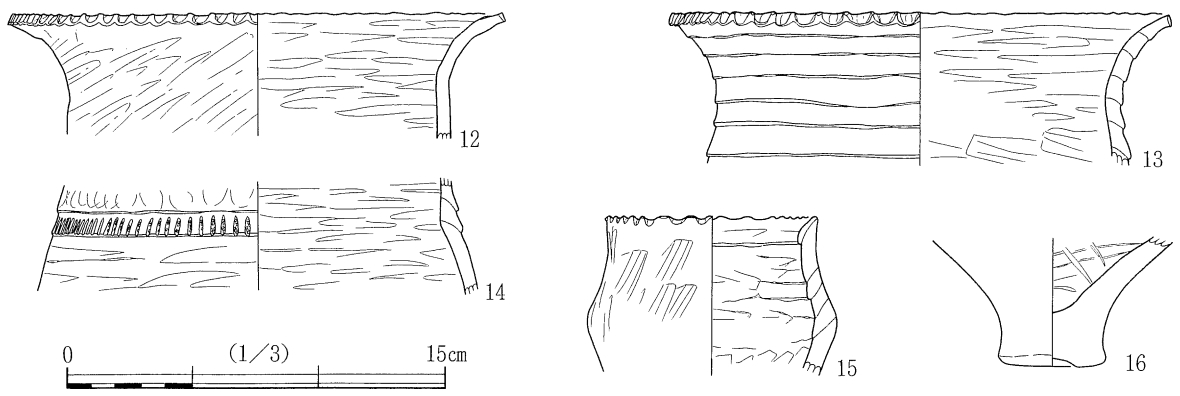
本住居跡の帰属時期は、覆土中の遺物や住居跡形態から弥生後期後半以降の所産と思われる。

8号住居跡

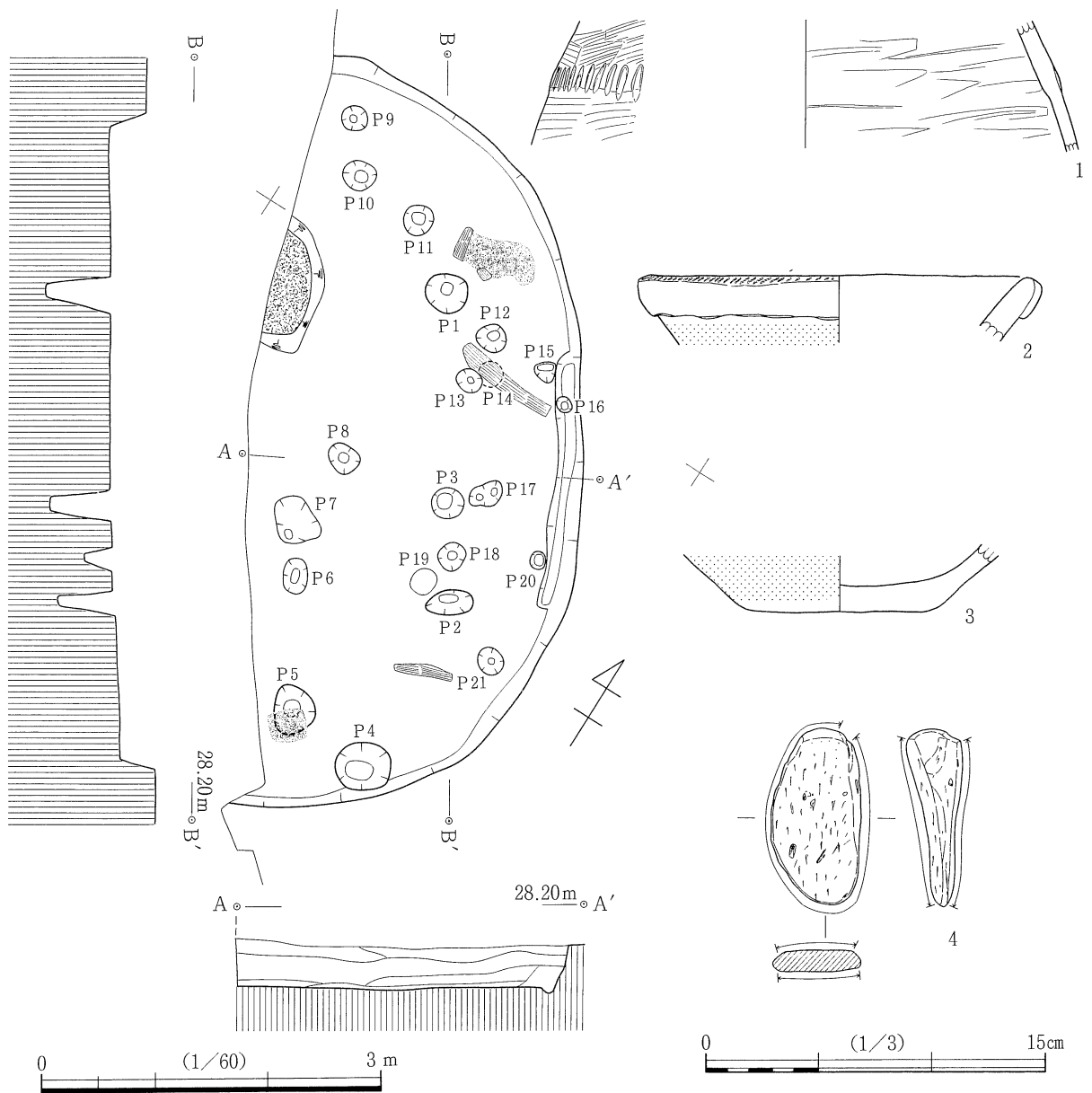
墳丘下南西端にプラン半分を調査区域外に置き、7号住居跡北に検出する。半分が調査区域外に有るため明らかではないが、不整な円形を呈するものと思われる。主軸方位は不明。規模は最大長4.4mを測る。確認面からの深さは0.05～0.08m、旧表土上面からは0.49～0.57mを測る。炉跡は不整な円形で径0.65mほどである。ピットの深さは、P1-16.3cm・P2-26cm・P3-8.6cm・P4-24.7cm・P5-16.8cm・P6-9.4cm・P7-17.6cm・P8-22.3cm・P9-35.7cmを測る。支柱穴はP1・P2が4穴のうちの2穴でP5が梯子穴とも考えられる。壁溝は北側を除き検出される。

出土遺物は、破片が若干出土しているが器形全体を把握できるものはない。1は壺口縁片で折り返し肉厚で口唇に縄文とキザミを施す。2は壺頸部片で表面縦の篋ミガキで丹彩を施す。3は壺胴片で強く膨らみ最大胴部復元径29cmを計り、胴中位は横、下端は斜方の篋ナデである。

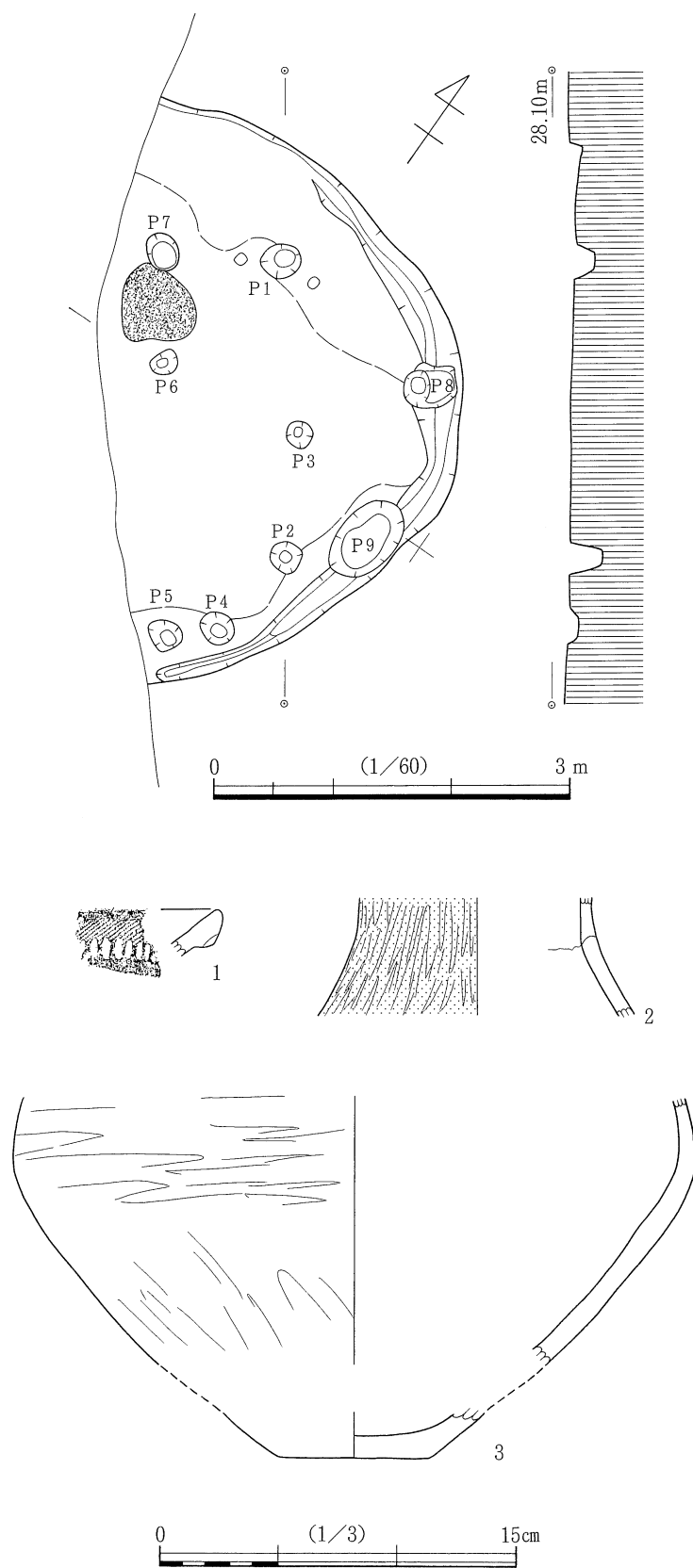
プランの形状や出土遺物から弥生後期の所産である。



第33図 5・6号住居跡出土遺物



第34図 7号住居跡と出土遺物

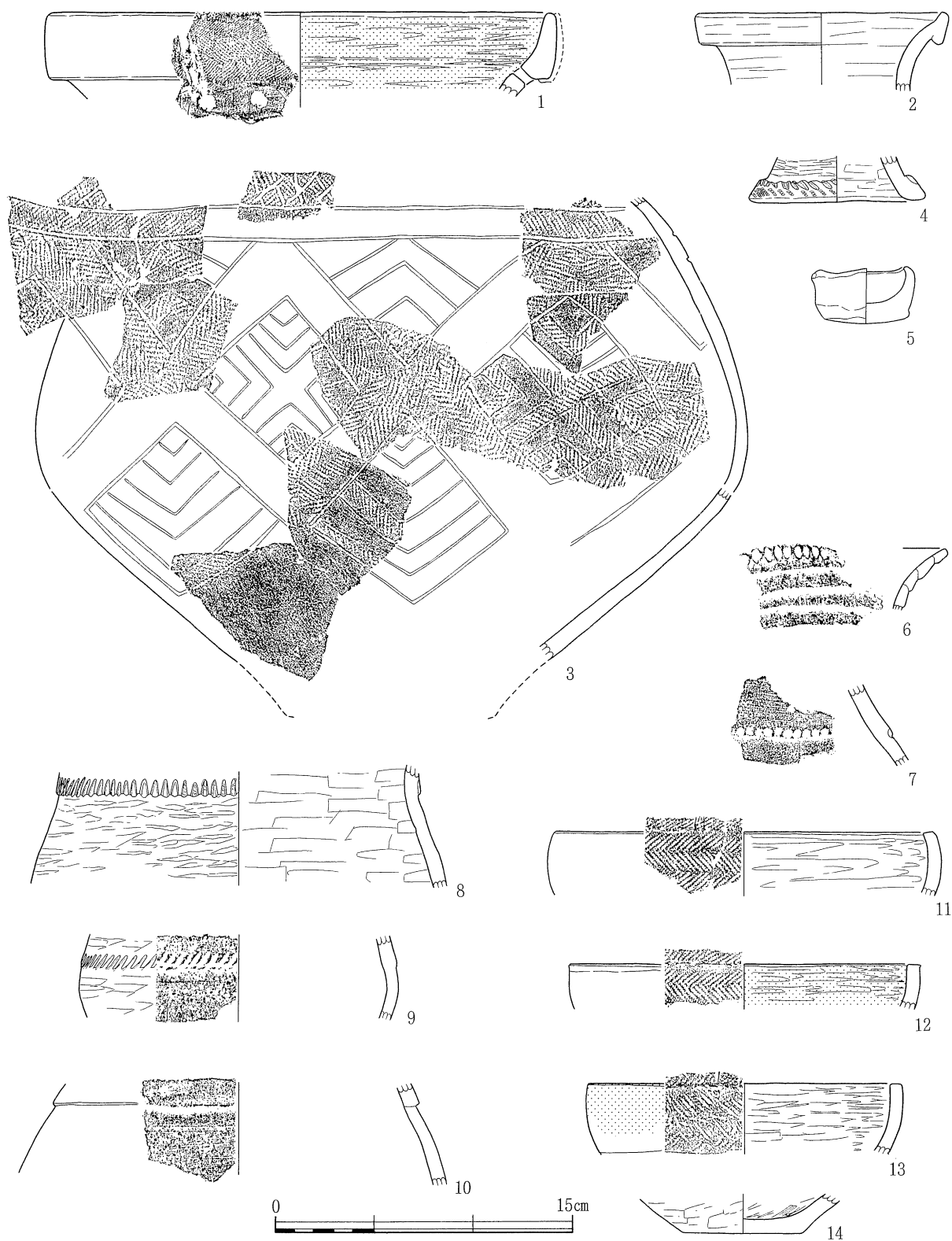


第35図 8号住居跡と出土遺物

9号住居跡

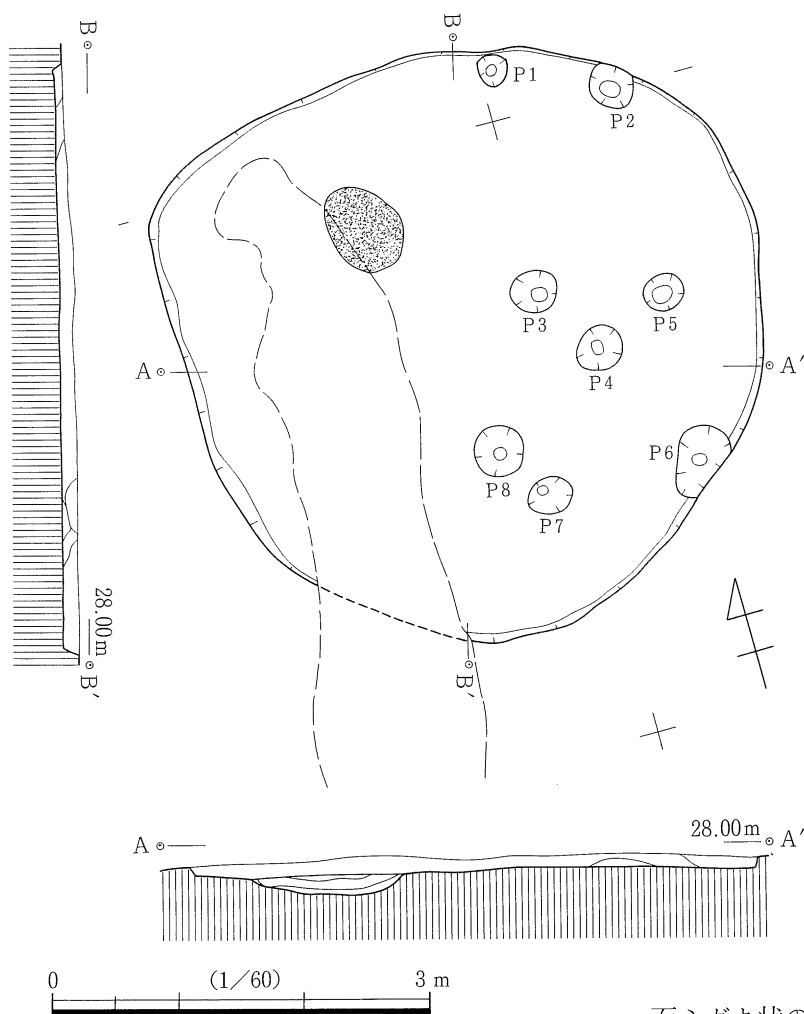
墳丘下中央の西側からプラン全体を検出した。平面形はほぼ楕円形を呈する。主軸は炉跡とP5の梯子穴を結んだ線上にあり、主軸方位はN-70°-Wを指向し、長軸は主軸にある。規模は、長軸長7.2m・短軸長6.5mを測る。確認面からの深さは0.38~0.52m、旧表土上面からは0.73~0.85mを測る。炉跡はプラン中央を通る中軸線上の北側に敷設され1.15×1.16mの窪み内に0.7×0.55mの範囲で焼土の堆積がある。ピットの深さは、P1-58.9cm・P2-74cm・P3-63.4cm・P4-78.9cm・P5-30.1cm・P6-46cm・P7-8.1cm・P8-10cm・P9-18cm・P10-4.1・P11-6cm・P12-6.1cm・P13-9.9cmで、P14~P21は5cm以下を測りピット底面に僅かに柱痕跡と思われる圧痕を残すものである。主柱穴はP1~P4の4穴で、主柱穴間はP1~P2が3.6m、P2~P3が3.6m、P3~P4が3.7m、P4~P1が3.3mを測る。北東隅壁直下に設けられてP6の床面寄りには地山を掘り残した土手が半円弧状に高さ5cm、幅40cmほどに渡って巡らされている。床面積36.58㎡を測る。

出土遺物は、小破片が多く器形全体を把握できるものはない。1~3は壺で、1は推定口径26cmの口縁部小片で直立気味の複合口縁は外面に羽状縄文に棒状浮文を施



第37図 9号住居跡出土遺物

し、口縁直下には焼成前の2穿を有している。2は口縁に粘土帯張付けで複合口縁を成し、上下方向に鋭く摘みだし器表面ナデを施す。3は部分的で接合しないが同一固体で胴上方から下端の破片で、推定胴部最大径36cmを計る。上端には斜格子の沈線で区画した縄文帯、下には上下沈線で区画した帯状の縄文帯を、その下には上中下に3段の構成から成る連続菱形文帯を巡らしている。4は台付鉢の



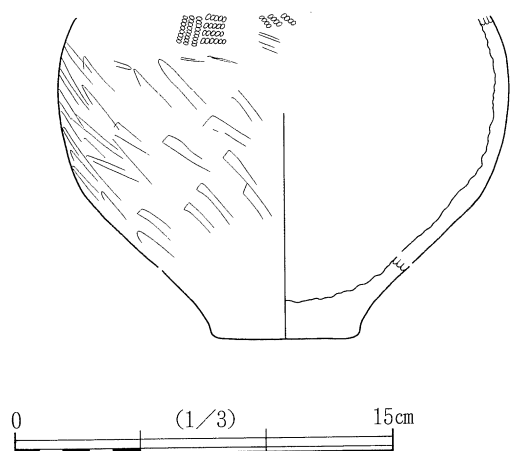
脚で端部には縄文と刺突状のキザミを施し、外面は丹彩する。5は手づくね土器で径5.4cm、器高2.9cmを計る。6～10は甕である。6の口縁外面には輪積痕を明瞭に残し、口唇はキザミにより波状。7は肩部突帯に圧痕帯を施す。8は肩部突帯には縄文圧痕を施し、外面ミガキ状の篋ナデ。9は胴中位に突帯を有し斜行のキザミを巡らす。10は輪積痕による突帯を有する。11～14は鉢。11は推定口径19.5cmで口唇は角状を呈し、口唇と外面に縄文を施す。12は推定口径18cmで口唇は角状を呈し、口唇と外面に縄文施し、内面丹彩する。13は推定口径16cmで口唇は角状を呈し、口唇と外面に不規則な縄文を施し、外面丹彩する。11は底径6cmの鉢底部で内

面ミガキ状のナデを施す。

本跡の時期は、弥生後期の久ヶ原期の所産であろう。

10号住居跡

墳丘下西端に3号方形周溝墓西溝上に張り床しプラン全体を検出した。平面形は不整な円形を呈する。主柱穴がなく主軸方位を明確にできないが、炉跡とP7の梯子穴と思われるライン方向はN-18°-Wを指向する。平面規模は、径4.65～5mほどを測る。確認面からの深さは0.09～0.10m、旧表土上面からは0.44～0.56mを測る。炉跡はプラン北側に敷設され0.70×0.50mを測る。ピットの深さは、P1-10.2cm・P2-20.1cm・P3-21.7cm・P4-16.2cm・P5-13.9cm・P6-26.7cm・P7-11.3cm・P8-16.6cmを測る。床面積は、16.6㎡を測る。



第38図 10号住居跡と出土遺物

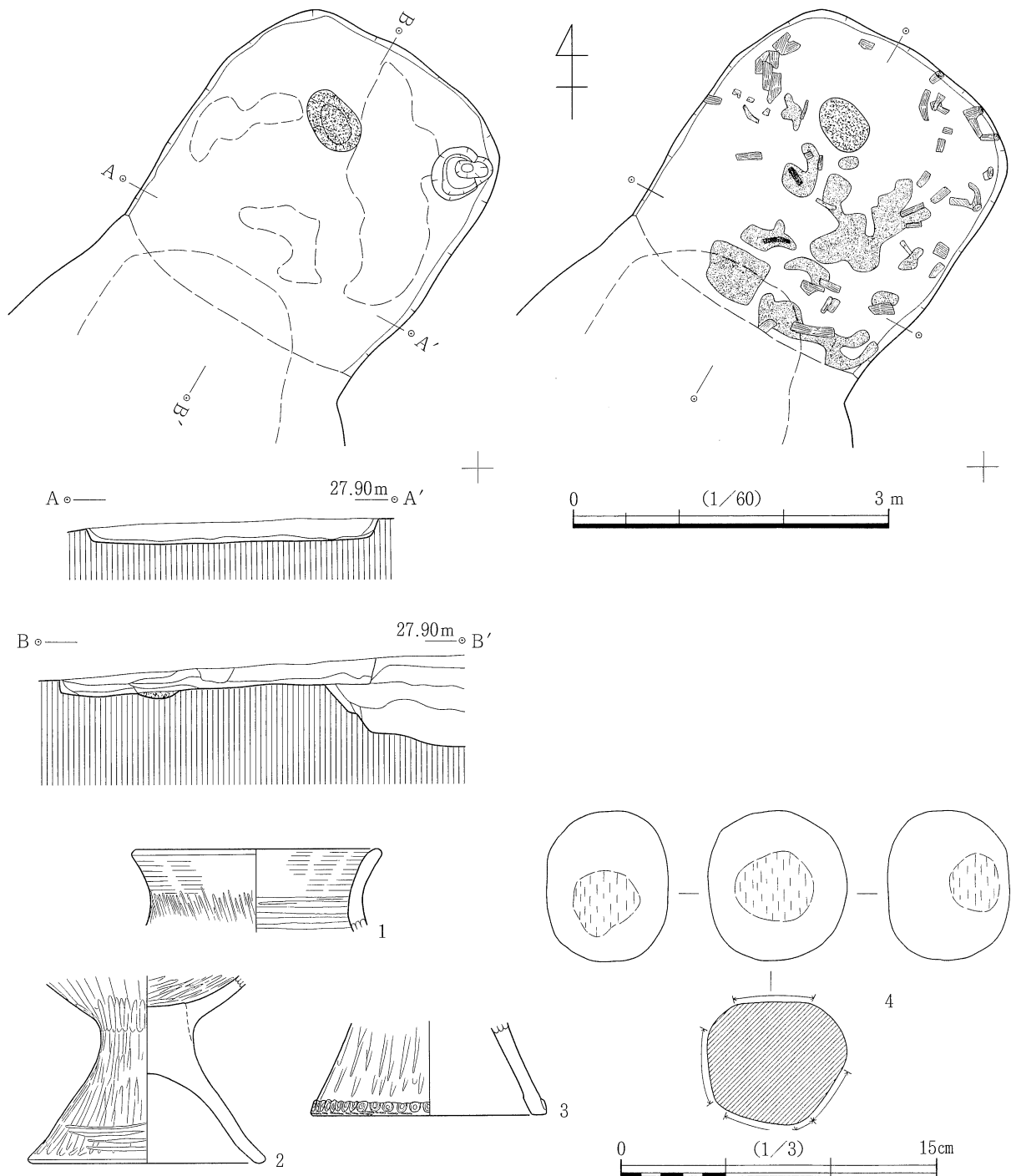
壁溝は確認されない。

出土遺物は、僅かに床面より壺の一部を検出するにとどまり、底部と胴は接合しないものの同一固体である。最大径18cm、底径6cm、現存器高12.9cmを計る。胴上位に単節縄文を部分的に施す。

本跡の所属時期は出土土器から、弥生後期の末葉が考えられる。

11号住居跡

墳丘下北端に4号方形周溝墓東溝上に張り床しプラン全体を検出した。平面形は各壁辺がやや胴張



第39図 11号住居跡と出土遺物

りする隅丸方形を呈する。主柱穴がなく主軸方位を明確にできないが、炉跡の長軸と各壁辺を考慮すると主軸は北側に寄り短軸に設定され推定主軸方向はN-54°-Wを指向する。平面規模は、長軸長3.0m・短軸長2.85mほどを測る。確認面からの深さは0.06~0.17m、旧表土上面からは0.33~0.55mを測る。炉跡はプラン北側に敷設され0.53×0.37mを測る。ピットの深さは、P1-42.7cmを測る。床面積は、7.19cm²を測る。壁溝は確認されない。床面に焼土と住居跡建築部材の炭化木が多量に検出されることから火災住居跡である。

出土遺物は、小破片が多く器形全体を把握できるものはない。1は推定口径12cmを計る甕口縁部で、口縁内外面とも丁寧なヨコナデで外面頸部には櫛状工具によるナデを施す。2は台付甕で、台径11.4cm、外面ナデとミガキ、胴内面底部にはミガキを施す。3は小破片で台付鉢の脚部と思われる、端部には円形竹管の刺突文を巡らしている。5は4面に磨耗痕を残す球状の擦り石である。

本跡の所属時期は1や2の出土土器から、古墳時代初頭と考えられる。

3 方形周溝墓と出土遺物

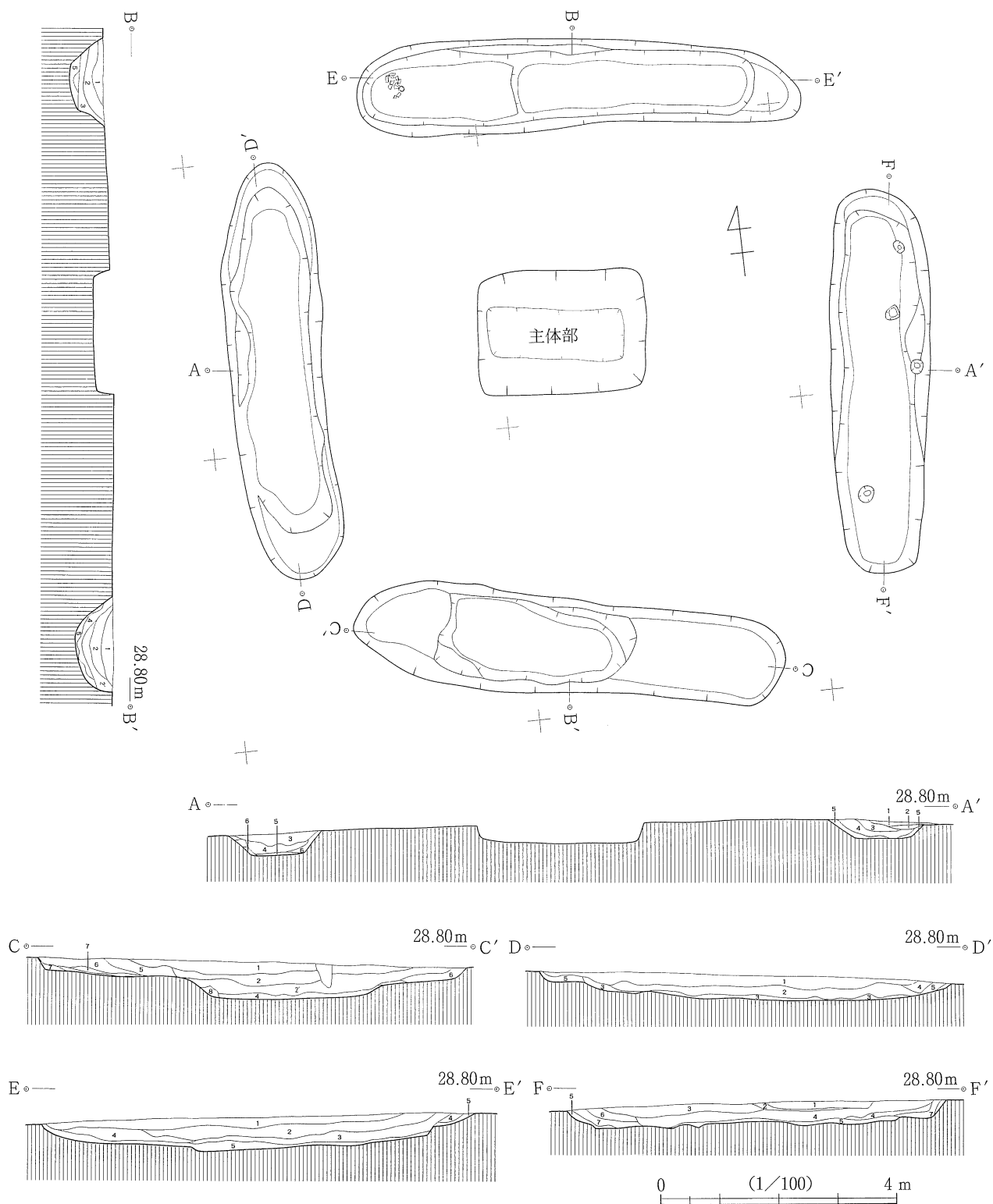
1号方形周溝墓

墳丘下西側にプラン全体を検出した。形状は四隅が途切れ、各溝が独立して掘り込まれる。溝の規模は、北溝長さ7.55m・幅1.3~1.6m・確認面深さ0.48~0.66m・旧表上面からの深さ0.78~1.13m、東溝長さ6.52m・幅1.55~1.7m・確認面深さ0.31~0.39m・旧表上面からの深さ0.64~0.79m、南溝長さ7.30m・幅1.45~1.7m・確認面深さ0.25~0.65m・旧表上面からの深さ0.58~1.03m、西溝長さ7.10m・幅1.50~1.65m・確認面深さ0.37~0.44m・旧表上面からの深さ0.49~0.75mを測る。北・南・西溝には段があるが土層断面からは、二次的な様相を呈するもののその可能性を示すに止まった。方台部長は、南北8.0m・東西8.6m程を測る。

埋葬施設である主体部は、方台部のほぼ中央に東西に長軸を置き、土壌に木棺痕跡を伴って検出する。掘方の平面形は、隅丸の均整の取れた長方形で長軸方位N-96°-Wを指向し、長軸長2.85m・短軸長2.1m・深さ0.35m、旧表上面から0.65m~0.76mを測り、底面はやや傾斜し東と南側が5~10cmほど高くなる。木棺痕跡は長軸方位N-92°-Wを指向し、側板と木口板とから成る組合せ木棺で板厚6~10cmほどが観察でき、内寸は長軸長1.95m・短軸長0.7m・高さは最大で0.32mほどを測る。底板はなく暗褐色土で硬く踏み締める。

盛土の存在は、墳丘下地形測量図から南西隅で29.05m、北西隅で28.55mと比高差0.5mを測り盛土の存在を予測させるが、旧表土除去後の墳丘下遺構全体図の等高線と比較すると地形に則したものと判断され、盛土の有無の判断はしかねる。

出土遺物は、1の壺を北溝西端床面、9の石斧型砥石を主体部墓境内裏込め覆土から検出するが、2から8は溝覆土内より出土する。1の壺はほぼ器形を復元でき口径7.2cm・胴径16.6cm・底部径6.3cm・器高27.2cmで無文で器表面ミガキ状のナデで、丹彩する。2~6は深鉢の小片である。口縁部指頭押捺で波状とし、3と4には斜行のハケ目調整を施す。5・6は胴小片で羽状の櫛描き文を施す。7は壺胴の小片で単節縄文を沈線で区画する。8は台坏甕であろうか、手づくねで台径5.6cmを計る。9は全長7.1cm・最大幅2.25cm・厚さ0.76~1.15cm・刃幅1.5cm・重さ34.9gを計り、石質は軟質砂岩で形状は石斧を呈するも砥石と感取される。

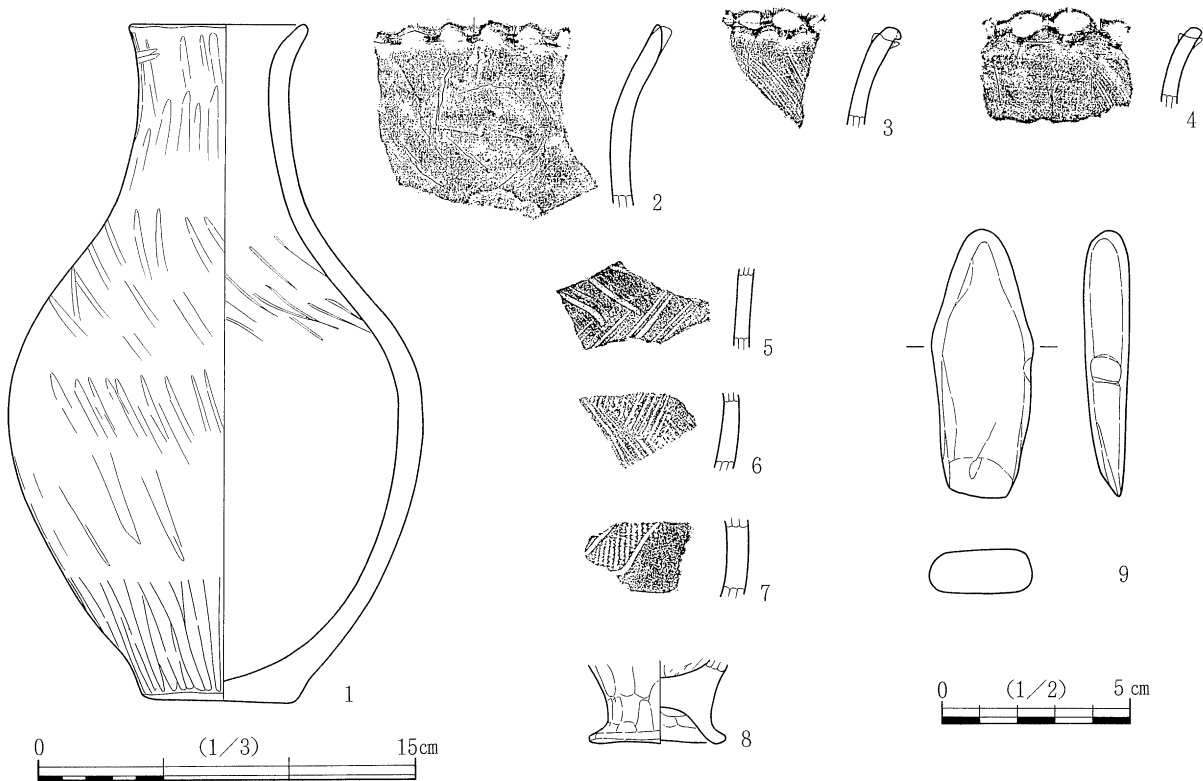
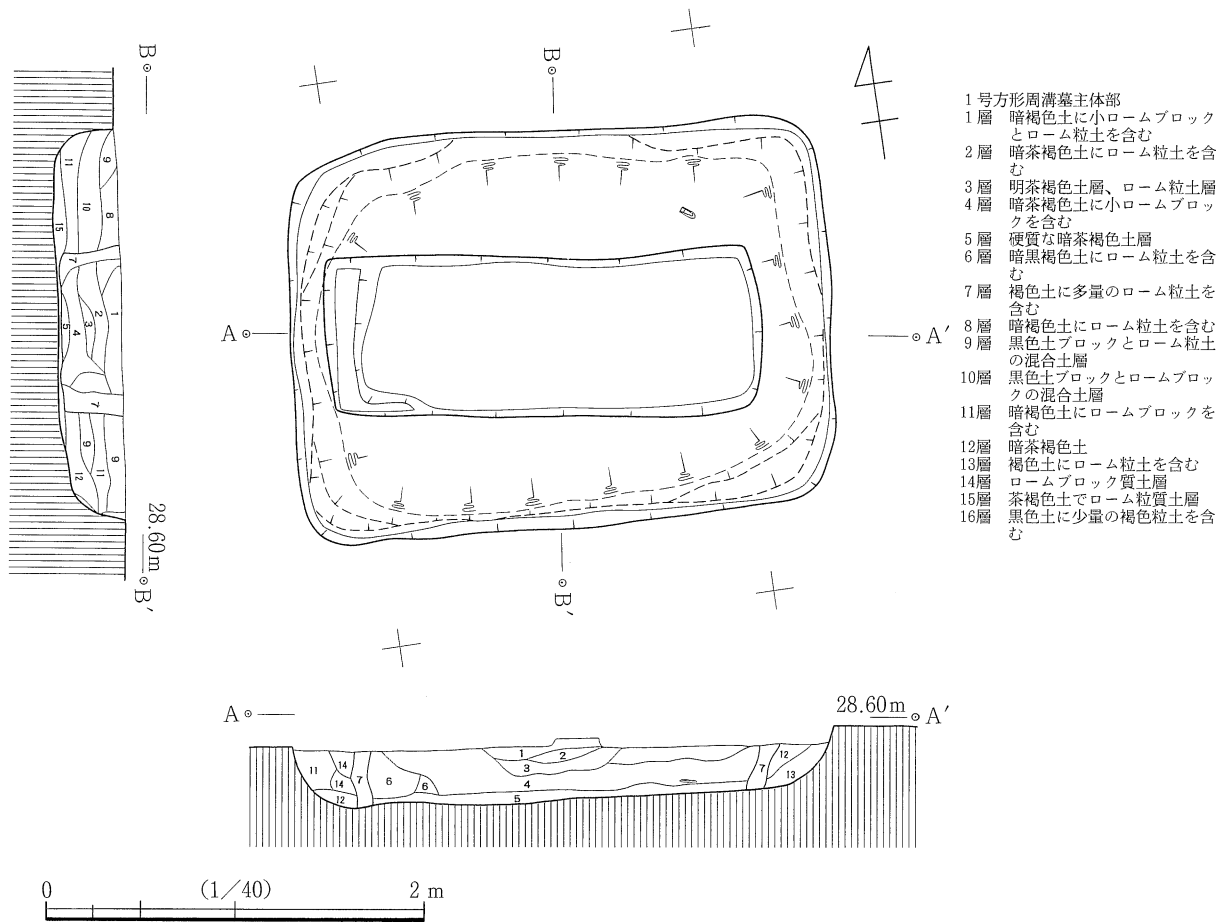


- 1号方形周溝墓
A-A'
- 1層 暗褐色土層
 - 2層 暗茶褐色土でロームブロックを主体とする
 - 3層 茶褐色土に多量の黒褐色土ブロックを含む
 - 4層 暗褐色土に少量の黒褐色土ブロックを含む
 - 5層 褐色土に少量のロームブロックを含む
 - 6層 暗褐色土に多量のローム粒土と黒褐色土ブロックを含む
- B-B'
- 1層 A-A'の3層に同じ
 - 2層 A-A'の4層に同じ
 - 3層 2層より色調を暗くする
 - 4層 暗茶褐色土層でローム粒土層
 - 5層 褐色土のブロック質土層
 - 6層 褐色土ブロック・ロームブロック・黒褐色土の混合土層

- C-C'
- 1層 B-B'の1層に同じ
 - 2層 B-B'の2層に同じ
 - 3層 B-B'の3層に同じ
 - 4層 B-B'の4層に同じ
 - 5層 暗褐色土に黒褐色土ブロックを含む
 - 6層 暗褐色土に多量の黒褐色土を含む
 - 7層 褐色土の粒土層
 - 8層 ロームブロックと褐色土の混合土層
- D-D'
- 1層 褐色土にブロック状の黒褐色土を含む
 - 2層 暗褐色土に多量の黒褐色土を含む
 - 3層 褐色土に少量のロームブロックを含む
 - 4層 暗黒褐色土層
 - 5層 黒茶褐色土層

- E-E'
- 1層 B-B'の1層に同じ
 - 2層 B-B'の2層に同じ
 - 3層 B-B'の3層に同じ
 - 4層 暗褐色土層
 - 5層 B-B'の5層に同じ
- F-F'
- 1層 A-A'の1層に同じ
 - 2層 A-A'の2層に同じ
 - 3層 ブロック状の褐色土層
 - 4層 A-A'の4層に同じ
 - 5層 A-A'の5層に同じ
 - 6層 褐色土ブロックと黒色土の混合土層
 - 7層 暗茶褐色土層でローム土を多量に含む

第40図 1号方形周溝墓



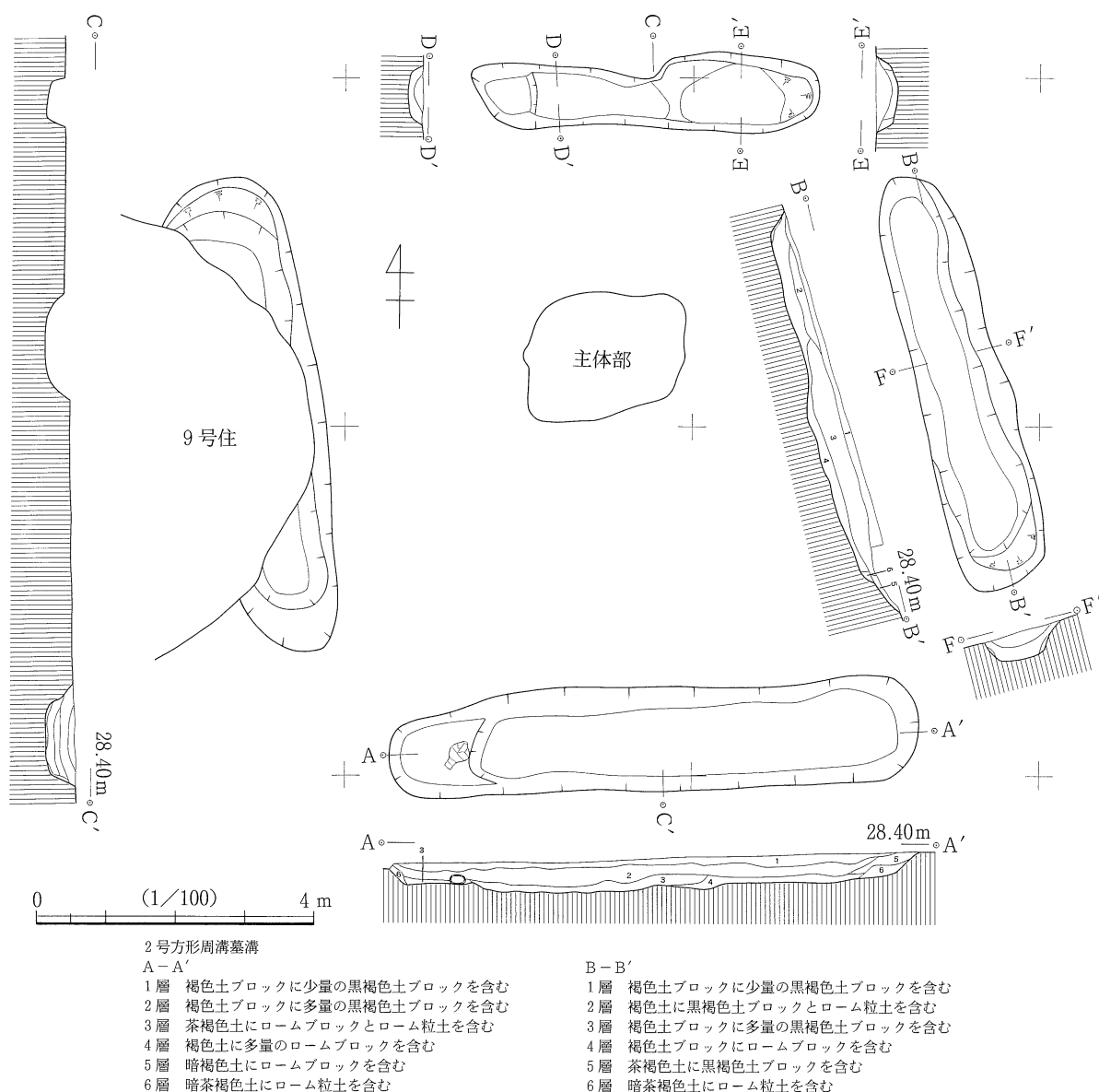
第41図 1号方形周溝墓主体部と出土遺物

所属時期は、1の壺から弥生中期宮の台期の末と感取される。

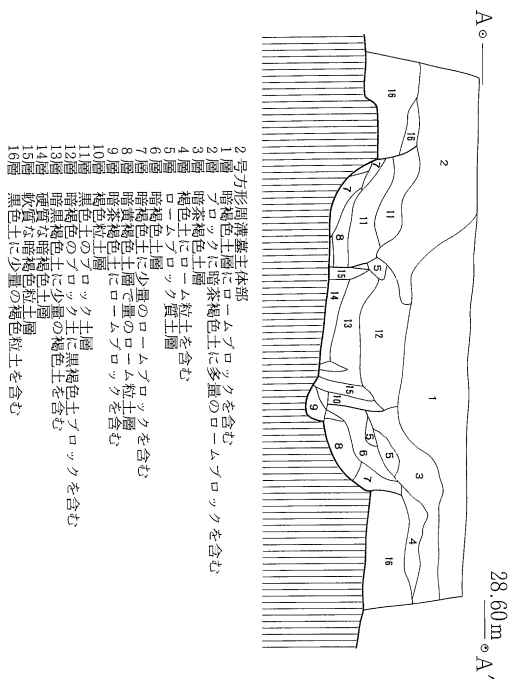
2号方形周溝墓

墳丘下中央に西溝を9号住居跡に掘り込まれるものの、ほぼプラン全体を検出した。形状は四隅が途切れ、各溝が独立して掘り込まれ、やや菱形を呈する。溝の規模は、北溝長さ5.0m・幅0.9~1.15m・確認面深さ0.26~0.38m・旧表上面からの深さ0.63~0.76m、東溝長さ6.10m・幅1.2~1.35m・確認面深さ0.40~0.51m・旧表上面からの深さ0.72~0.89m、南溝長さ7.65m・幅1.2~1.5m・確認面深さ0.34~0.45m・旧表上面からの深さ0.71~0.82m、西溝長さ6.8m・幅1.50・確認面深さ0.41~0.44m・旧表上面からの深さ0.68~0.83mを測る。北・南溝には段があるが土層断面からは、二次的な様相を呈するもののその可能性を示すに止まった。方台部長は、南北8.0m・東西8.5m程を測る。

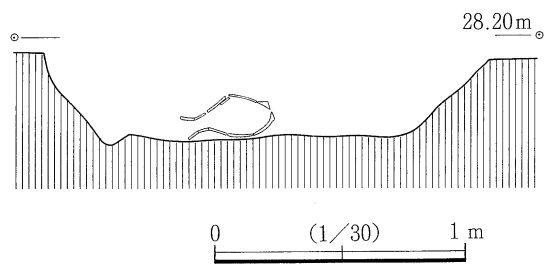
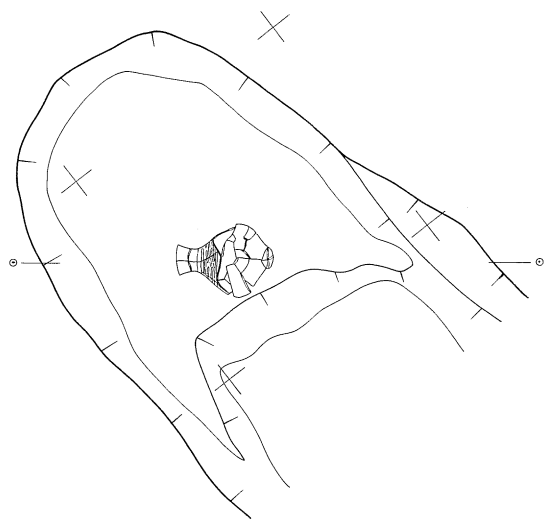
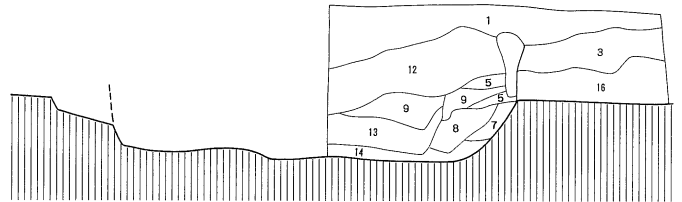
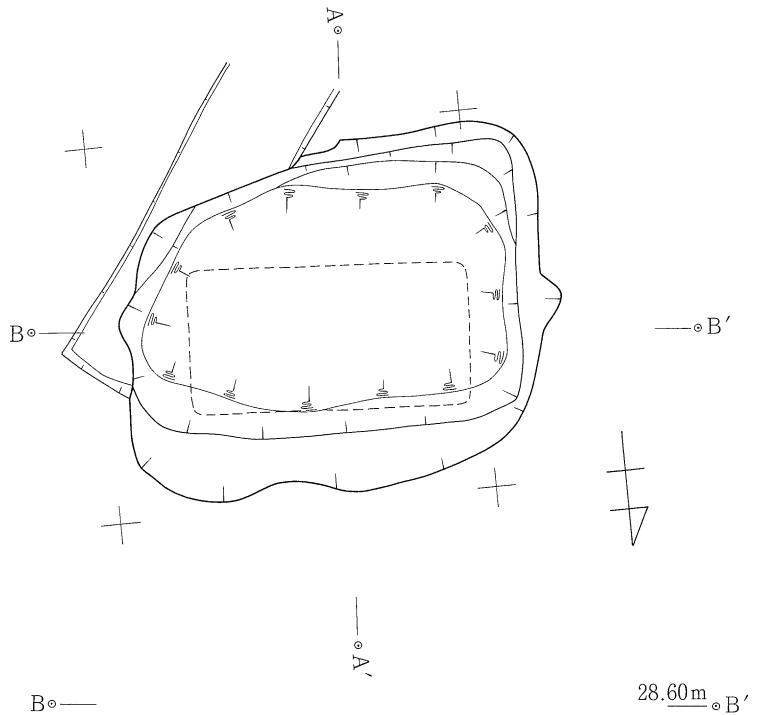
主体部は、1号方形周溝墓同様方台部のほぼ中央に東西に長軸を置き、墓壇に木棺痕跡を伴って検出する。掘方の平面形は、隅丸の均整を欠く長方形で長軸を東西に置き、長軸長2.25m・短軸長1.85



第42図 2号方形周溝墓



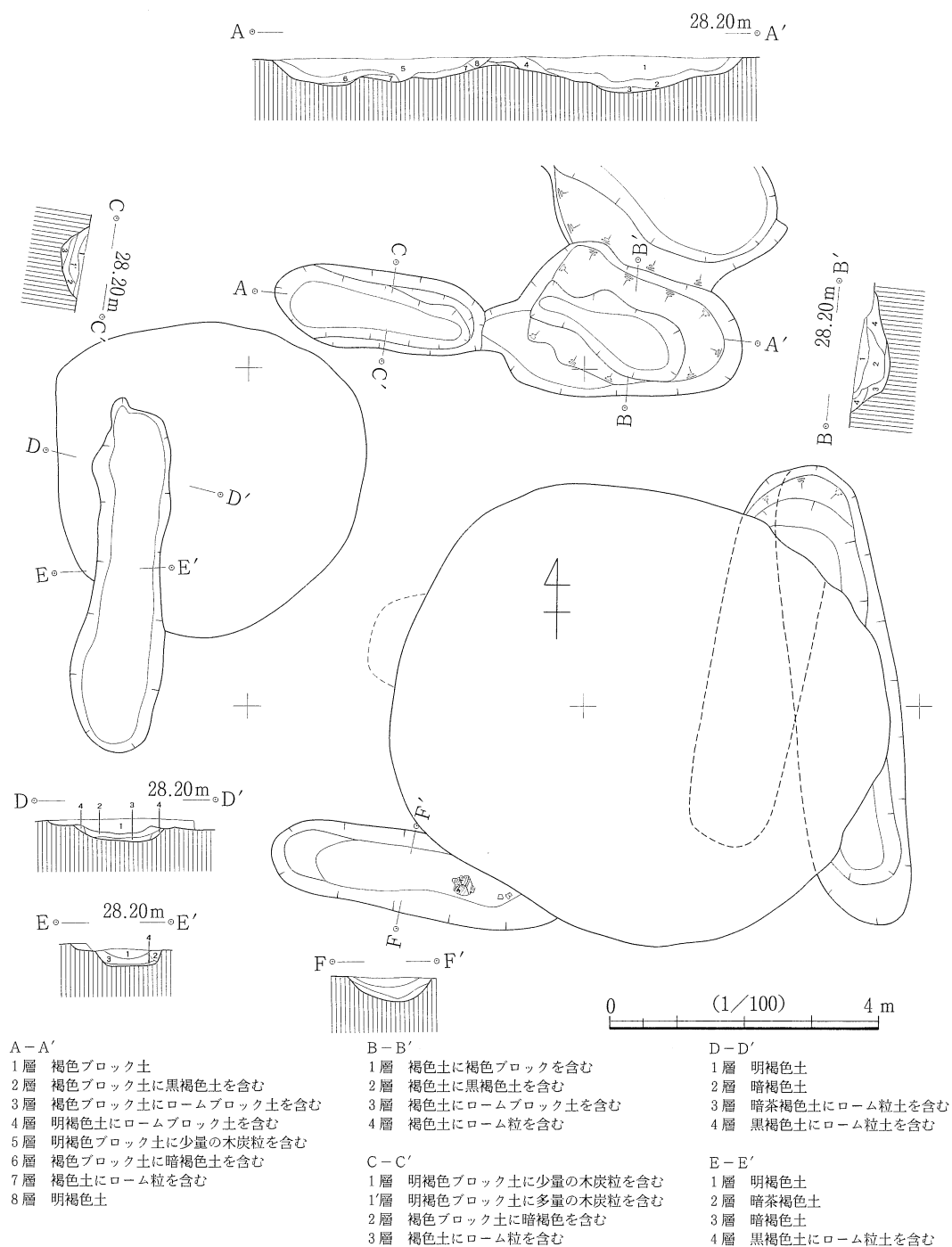
0 (1/40) 2m



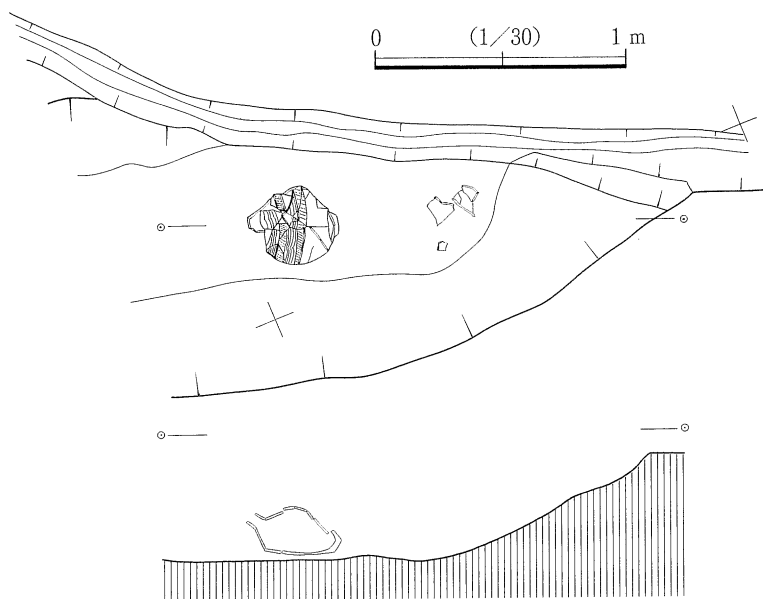
第43図 2号方形周溝墓主体部と出土遺物

m・深さ0.25～0.31m、旧表上面から0.75m～0.80mを測る。木棺痕跡は長軸方向の側板には明瞭に確認されるが短軸側には土層からその痕跡を推測するに止まる。側板は厚さ6cm程で高さ22～32cmを測る。木棺内寸の短軸長0.55m程を測る。底板はなく暗褐色土で硬く踏み締める。主体部からの出土遺物はない。

盛土の是非については、墳丘下地形測量図と旧表土除去後の地形測量図を比較すると中央から北西隅に向かって方丘系の盛土コーナーを示唆する様な地形の変化があり旧表土も他の箇所と比較してや



第44図 3号方形周溝墓



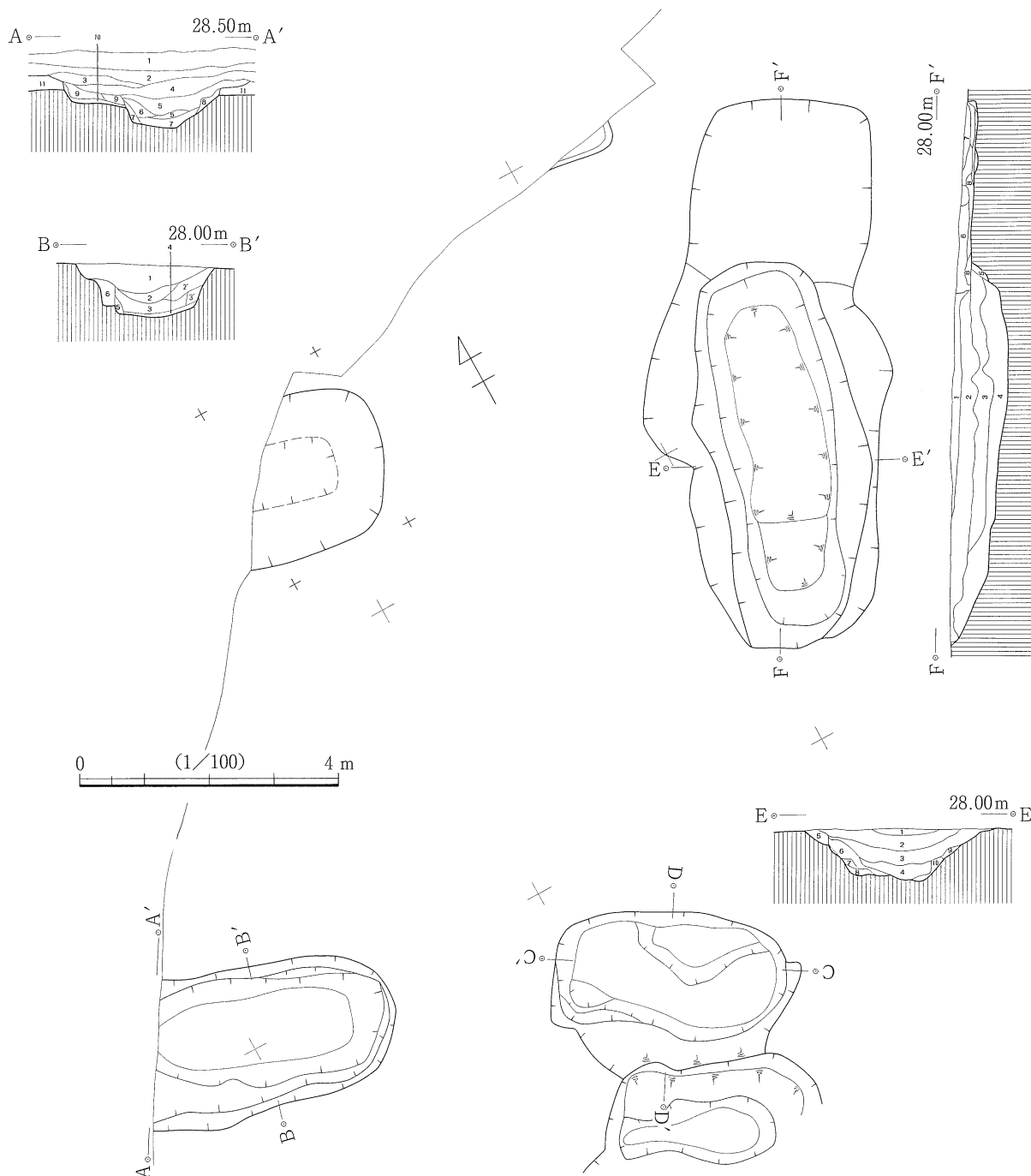
第45図 3号方形周溝墓出土遺物

や厚く堆積し盛土そのものは確認できなかったが盛土の存在を十分に推測できるものであった。

出土遺物は、南溝西端から壺を出土する。ほぼ完形に復元でき、口縁端部は欠くが疑似口縁化し口径10.7cm・最大径を胴下半に有し径23.3cm・底部径7.2cm・器高34.3cmを測る。胴中位から頸部基部にかけて擬流水文を7段巡らしている。器表面はミガキ状のナデやミガキを施す。所属時期は、壺から弥生中期宮の台期後半と感取される。

3号方形周溝墓

墳丘下西側に東・南溝を9号住居跡に西溝上層を10号住居跡に掘り込まれ検出する。形状は四隅が途切れ、各溝が独立して掘り込まれるものであろう。北溝は、途切れはしないものの西と東側とでは形状が異なり、西側は長さ3.15m・幅1.1~1.2m・確認面深さ0.36~0.44m・旧表上面からの深さ0.81~0.89m、東側は長さ3.85m・幅1.65~2.3m・確認面深さ0.35~0.59m・旧表上面からの深さ0.68~0.92mで、全長7m程を測る。東溝は9号住居跡に大きく掘り込まれ、また2号方形周溝墓西溝とプランを共有するものと思われほとんど遺存せず、北端に僅かにその痕跡を認め



4号方形周溝墓土層

A-A'

1層 茶褐色土層、ロームブロック・ローム土を含む
(古墳盛土)

2層 黒色土層(旧表土層)

3層 暗黒褐色粒土層

4層 褐色ブロック土層に少量の黒褐色土ブロックを含む

5層 褐色ブロック土層に多量の黒褐色土ブロックを含む

6層 暗褐色ブロック土層に多量の黒褐色土ブロックを含む

7層 暗褐色土に少量のロームブロックを含む

8層 暗茶褐色土

9層 暗黒褐色土層に褐色ブロック土を含む

10層 暗茶褐色土層

11層 暗褐色ブロック土層

B-B'

1層 明褐色ブロック土層

2層 明褐色ブロック土層に少量のロームブロックを含む

3層 褐色ブロック土層に多量の黒褐色土ブロックを含む

4層 暗茶褐色土にローム粒土を含む

5層 茶褐色土層、ローム土層

6層 褐色ブロック土・ロームブロック・黒褐色土ブロックの混合土層

C-C'

1層 褐色ブロック土層と黒褐色ブロック土の混合土層

2層 暗褐色ブロック土層に多量の黒褐色土ブロックを含む

3層 暗褐色ブロック土層に黒褐色ブロック土を含む

4層 黒褐色土に小ロームブロックとローム粒土を含む

5層 暗褐色土層

D-D'

1層 褐色ブロック土層に少量の黒褐色土を含む

2層 褐色ブロック土層に多量の黒褐色土を含む

3層 褐色ブロック土層に多量の黒褐色土とローム土を含む

4層 暗茶褐色にローム土を含む

5層 褐色土に黒褐色ブロック土を含む

6層 明褐色土層に多量のローム土を含む

7層 褐色土に黒褐色土を含む

D-D'

28.00m D-D'

C-C'

28.00m C-C'

E-E'

1層 黒色ブロック土と褐色ブロック土層

2層 褐色土層に黒褐色土を含む

3層 明褐色ブロック土に少量の黒褐色土をブロック状に含む

4層 黒褐色ブロック土層

5層 褐色ブロック土層に多量のロームブロックを含む

6層 褐色土層に黒褐色土を含む

7層 明褐色土層に多量のローム土を含む

8層 暗茶褐色にローム土を含む

9層 暗茶褐色

10層 暗茶褐色に小ロームブロックを含む

F-F'

1層 E-E' 1層に同じ

2層 E-E' 2層に同じ

3層 E-E' 3層に同じ

4層 E-E' 4層に同じ

5層 ローム粒土層

6層 褐色ブロック土層

(以下11号住居跡覆土)

7層 暗黒褐色土層に小ロームブロックを含む

8層 焼土・木炭粒土層

第46図 4号方形周溝墓

るにすぎない。南溝の現存長は4.45m・幅1.1～1.25m・確認面深さ0.27～0.34m・旧表上面からの深さ0.70～0.77m。西溝長さ5.3m・幅1.05～1.36m・確認面深さ0.20～0.29m・旧表上面からの深さ0.65m前後を測る。方台部長は、南北7.1m・東西約8mを測る。

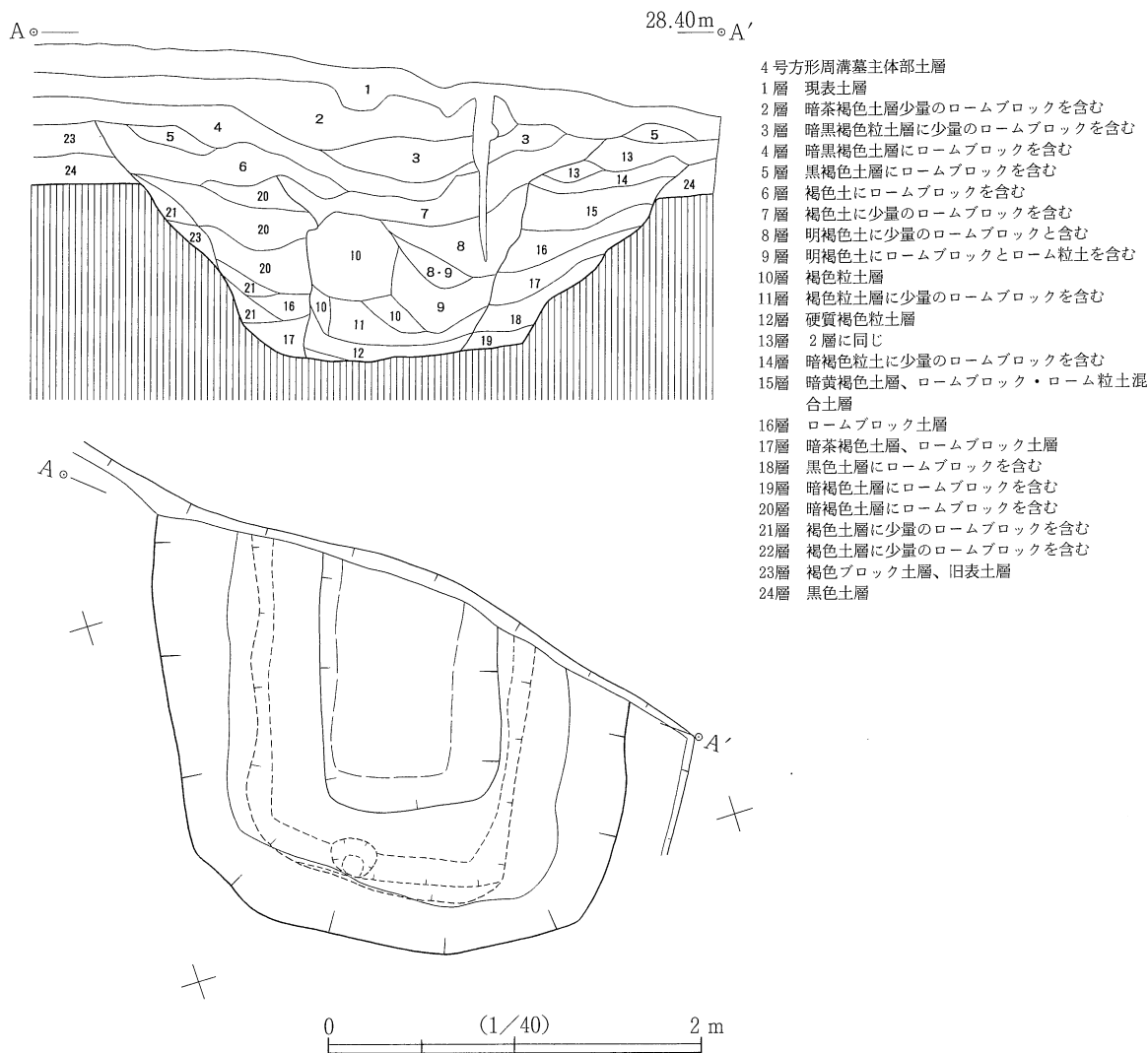
主体部は、9号住居跡に掘り込まれ失われたと思われるが、僅かにその底面の一部を土層の変化より推測するにすぎない。

南溝東側から壺を出土し、ほぼ完形に復元できた。口径11.6cm・最大径を胴中位に有し径27.3cm・底部径7.7cm・器高42.4cmを測る。口縁および口唇部に単節縄文を巡らし、頸部には上下を沈線に区画された縄文帯を上下2段に巡らす。頸部から肩にかけ間隔の広い波状の沈線を14～15条を施す。胴上半分に上下に沈線に区画された縄文、その間を14～15条の波状の沈線を巡らしている。

所属時期は、壺から弥生中期宮の台期後半と感取される。

4号方形周溝墓

墳丘下北西側にプラン西北半分を大きく調査区域外に置き、東溝北端上層に11号住居跡の床面を置き検出する。形状は1～3号方形周溝墓同様四隅が途切れ、各溝が独立して掘り込まれ検出されるも



第47図 4号方形周溝墓主体部

のであるが南溝にはさらに途切れる箇所がある。北と西溝は調査区域外にあり不明。東溝は長さ6m・幅2.9～3.75m・確認面深さ0.51～1.09m・旧表上面からの深さ0.84～1.15m。南溝は西と東の2条が在り、西側の現存長は4.75m・幅2.3m前後・確認面深さ0.59～0.95m・旧表上面からの深さ0.90～1.09m、東側では長さ3.3m・幅2m前後・確認面深さ0.34～0.40m・旧表上面からの深さ0.67～0.87mを測る。方台部長は不明だが南溝から主体部掘方のセンターまでは7.5mを測り、南北長で推定15m程になり1～3号と比較すると大型である。

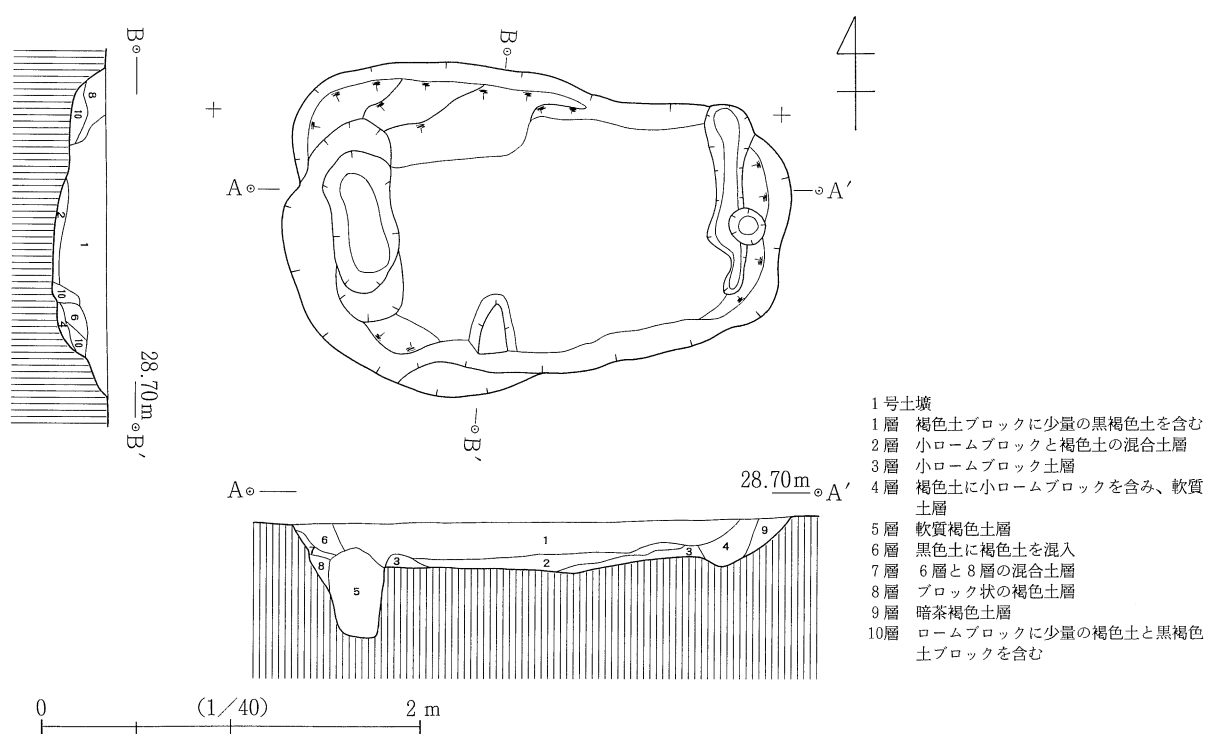
埋葬施設である主体部は、調査区域外にプランの半分以上を置き長軸を東西に置き、墓壇に木棺痕跡を伴って検出する。掘方の平面形は、隅丸の各辺が膨張する長方形を呈するものと感取される。規模は長軸長が不明だが現存長軸長2.3m・短軸長2.65m・深さ0.87～0.93m、旧表上面から1.35m程を測る。木棺痕跡の長軸方位N-70°-Wを指向する。板材の痕跡は不明瞭だが内寸で幅0.85m程を測る。棺底は褐色土で硬く締まり、底板は存在しないものと思われる。本跡からの出土遺物は小片ばかりで図示するものはない。

盛土については、墳丘下地形測量図の東溝側に旧表土の盛り上がりで削平された箇所が見られ、盛土そのものは確認できなかったが盛土の存在を十分に推測できるものであった。

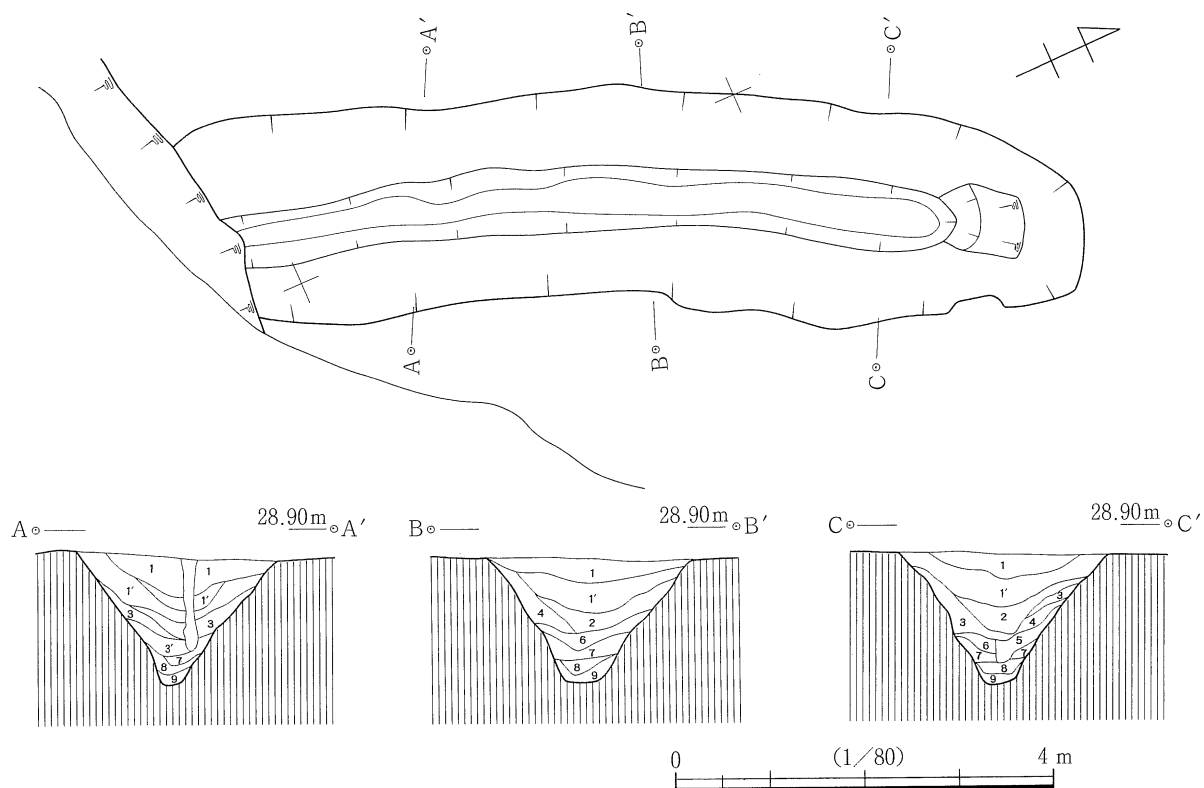
4 その他の遺構と出土遺物

1号土壌

墳丘下南東側にプラン全体を検出する。平面形は、不整な隅丸の長方形を呈し、長軸を東西に置く。長軸方位はN-92°-Wを指向する。長軸長2.65m・短軸長1.35～1.78m・深さ0.18～0.25m、旧表上面からの深さ0.65～0.72mを測る。西壁直下には深さ0.35mの溝状のピット、東壁には溝とピットを



第48図 1号土壌



1号溝

1層 暗褐色土層

1'層 1層にブロック状の褐色土を含む

2層 褐色土に多量の黒褐色土ブロックを含む

3層 暗褐色土に少量の黒褐色土ブロックを含む

3'層 3層に多量の黒褐色土ブロックを含む

4層 暗褐色土に少量のロームブロックを含む

5層 軟質黒褐色土層

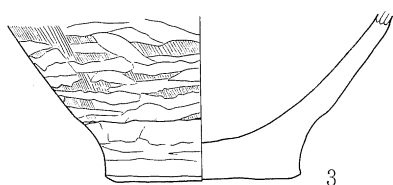
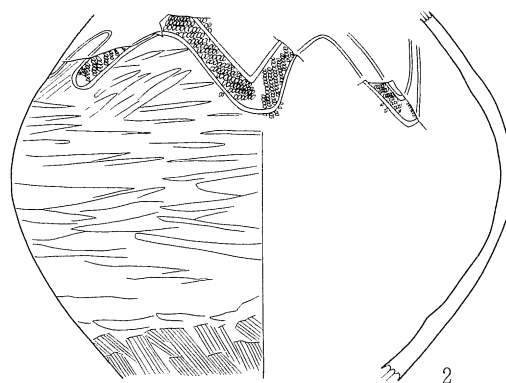
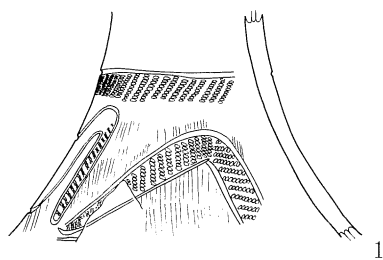
6層 1層に同じ

7層 暗茶褐色土層

8層 ロームブロックと暗茶褐色土の混合土層

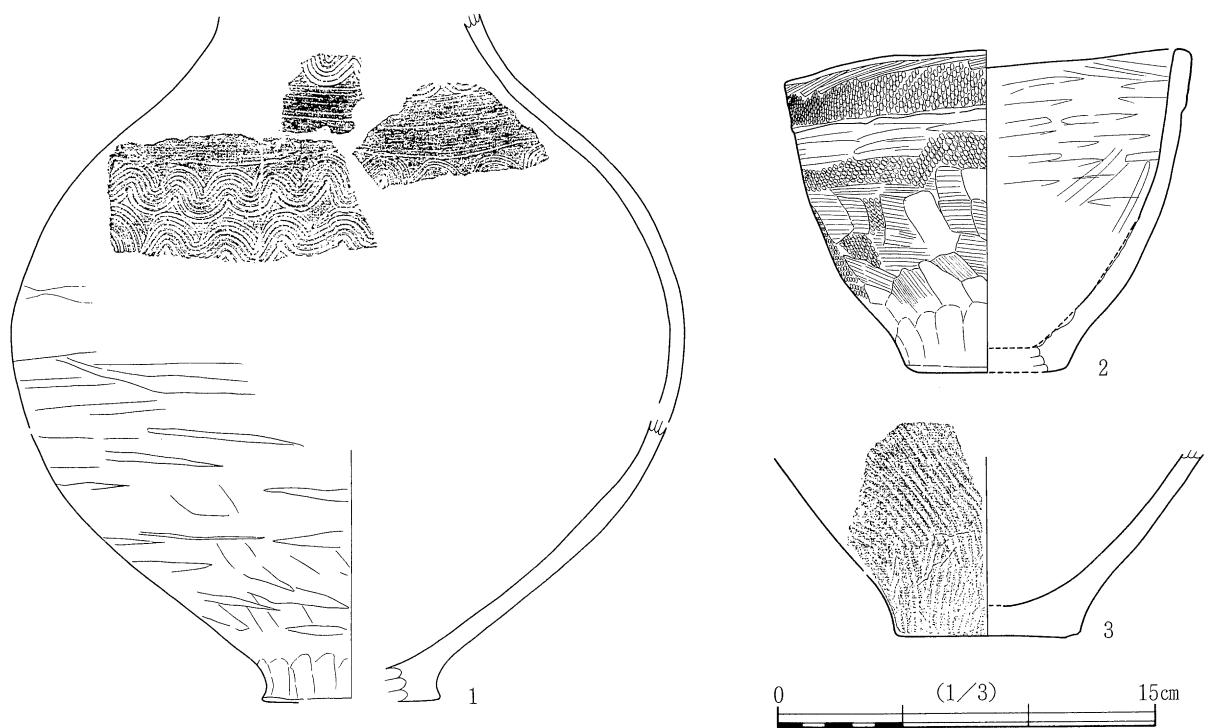
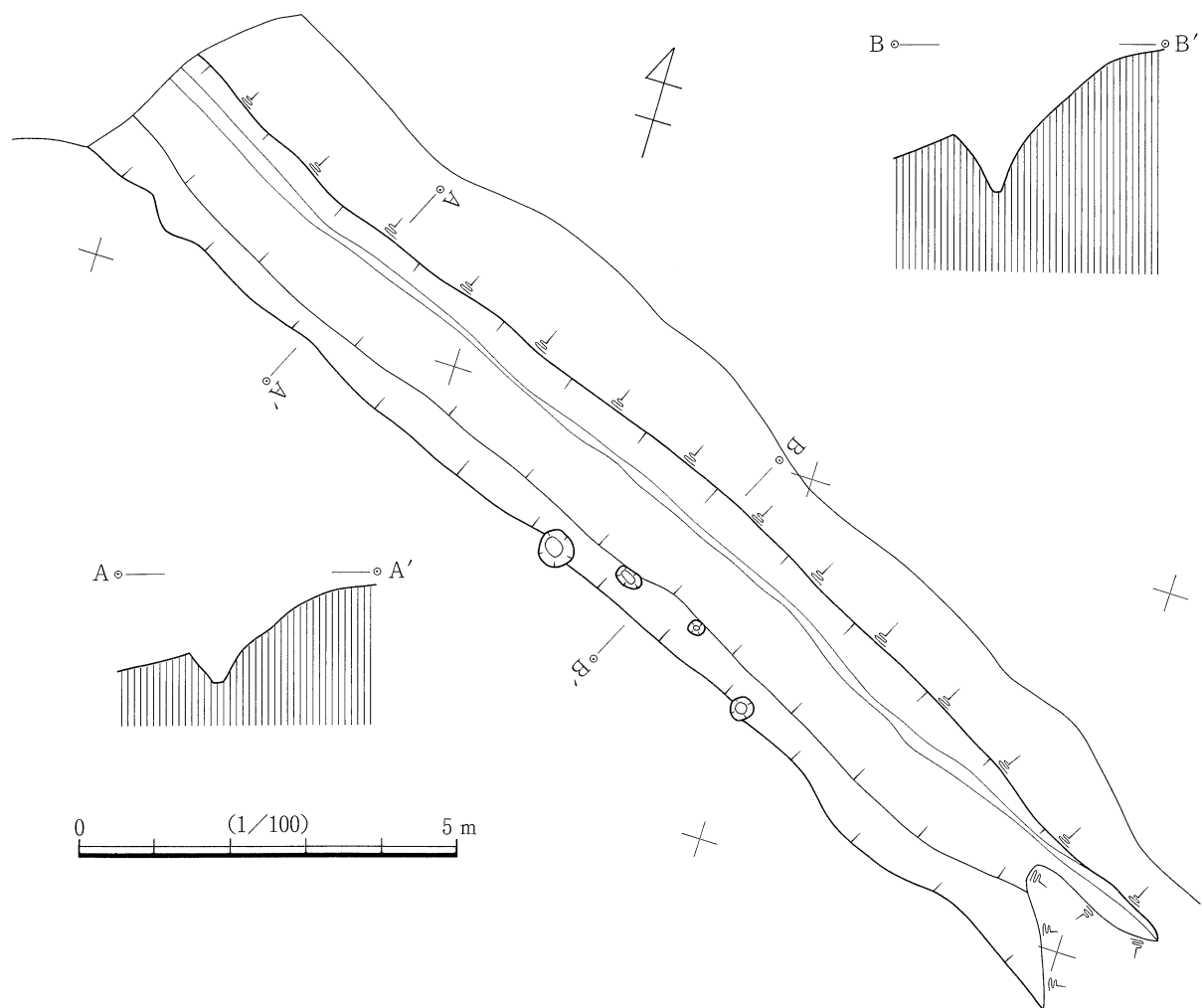
9層 黒褐色土層でやや粘質

10層 3層に多量の黒褐色土ブロックを含む



0 (1/3) 15cm

第49図 1号溝と出土遺物



第50図 2号溝と出土遺物

設ける。覆土からは壁寄りに木棺痕跡を示唆するような土層が観察されるが詳細は不明である。出土遺物が無く、時期判断ができない。

1号溝

墳丘下南東端に溝の北端を検出する。検出全長は9.7m、幅2.1～2.2m、深さ1.28～1.35m、旧表上面からの深さ1.71～1.78mを測り、断面形はV字形を呈するものの底面幅0.2～35mとやや幅広である。底面はほぼ平坦で、北端部の立ち上がりは階段状を呈する。覆土中は概ね自然堆積状況を示す。

出土遺物は、覆土中層より1～3の壺などの破片を検出する。1は壺頸部で単節縄文を沈潜で区画した山形文と上端に単節縄文を配し上下に沈線区画がある。2は壺胴部で単節縄文を沈線区画した連続山形文を巡らしている。3は底部径8cmで櫛目の後横位の篋ナデを施す。これらの遺物から、弥生中期宮の台期にその所属時期の一点を置く。

2号溝

北側台地平坦面と斜面の変換線に沿って検出し、旧表土層は僅かに上層を覆っている。確認全長は17.4m、斜面側の壁が削平されているが幅は最大で2.1程が現存している。深さは1.58～1.90m、旧表上面からの深さ1.90～2.4mを測る。断面形はV字形を呈し、底面幅0.1～0.2mと狭い。

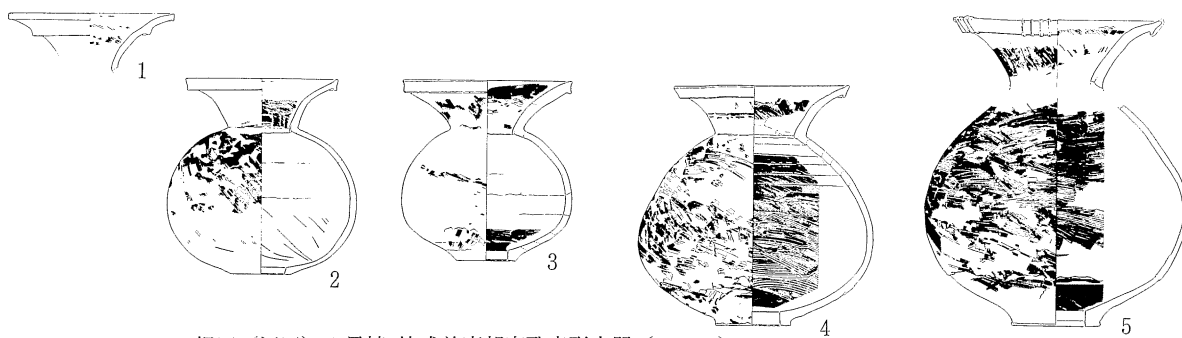
出土遺物は、覆土中層より1～3を出土する。1は壺で接合しないが同一固体で部分的に遺存する現存器高27.5cm・胴径27cm・底径7cmと復元できる。胴上には8本単位のコンパス波状文を2段に施し、条線状の櫛目で区画し頸部に再びコンパス波状文を施す。2は鉢で外表面に単節縄文を施した後櫛ナデやミガキ状のナデで縄文帯を消している。3は条痕状の丁寧な篋ナデを施し、底径7.5cmを計る鉢と思われる。出土遺物から弥生中期宮の台期にその所属時期の一点を置くものである。

第4章 ま と め

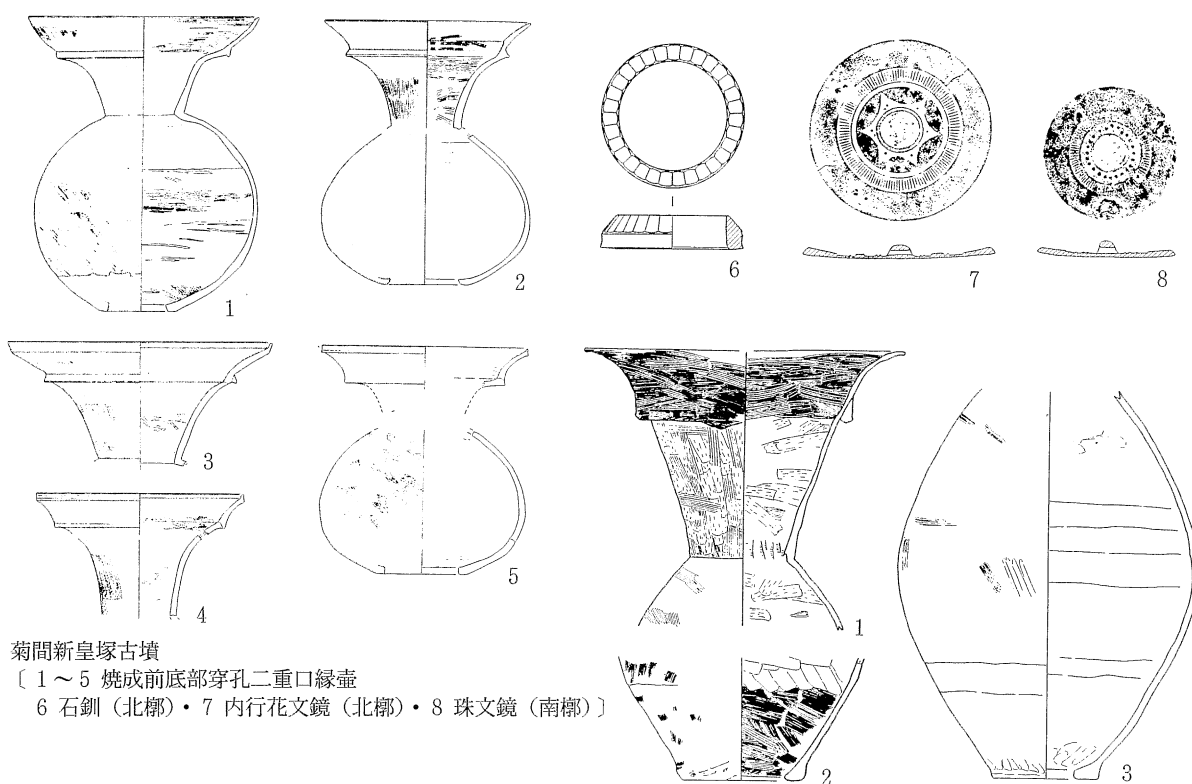
本稿では、新皇塚古墳と比較しながら大厩浅間様古墳の築造年代感を示しまとめとしたい。

本古墳の特徴的な遺物の一つに、墳丘から出土した焼成前底部穿孔の壺形土器がある。市原台地での焼成前底部穿孔壺形土器の出土古墳としては、本古墳の2km東の、直接東京湾に面する村田川河口左岸先端部の菊間新皇塚古墳⁽¹⁾で二重口縁壺が、市原台地南端地域の養老川に面した国分寺台遺跡群中の根田(辺田)1号墳⁽²⁾が顕著な例として知られている。また、焼成後の底部穿孔壺形土器は、出現期古墳の神門三号墳を始めとして、東間部多2号墳、諏訪台古墳群中に東海系を主体に二重口縁壺など数例が存在している。また、村田川対岸の草刈遺跡⁽³⁾では、138A号墳・140号墳・137号墳の方墳に焼成前底部穿孔の二重口縁壺を出土している。

根田1号墳は、周溝外径52m、墳丘径31m強、盛土高3m余りを測る張り出し付きの可能性を残す円墳である。墳丘からは主軸方位を異にした2基の木棺直葬の埋葬施設が検出されている。古墳本来の被葬者を葬る2号主体から素環頭太刀1・太刀1・短剣1・槍2・ヤリガンナ1・管玉1・小形素文鏡1が検出されるが、1号主体からは副葬品の出土は皆無である。詳細は不明であるがここで興味深い点は、2号主体部主軸方向が東西方向から南に大きく振れ、追葬されたと考えられる1号主体部が軸線をほぼ東西方向に置いており、2号主体被葬者頭部位置は東側に推測している。このことは大厩浅間様古墳と酷似した状況を呈するものである。また、古墳からは完形品を含む4点の焼成前底部



根田（辺田）1号墳 焼成前底部穿孔壺形土器（1～5）

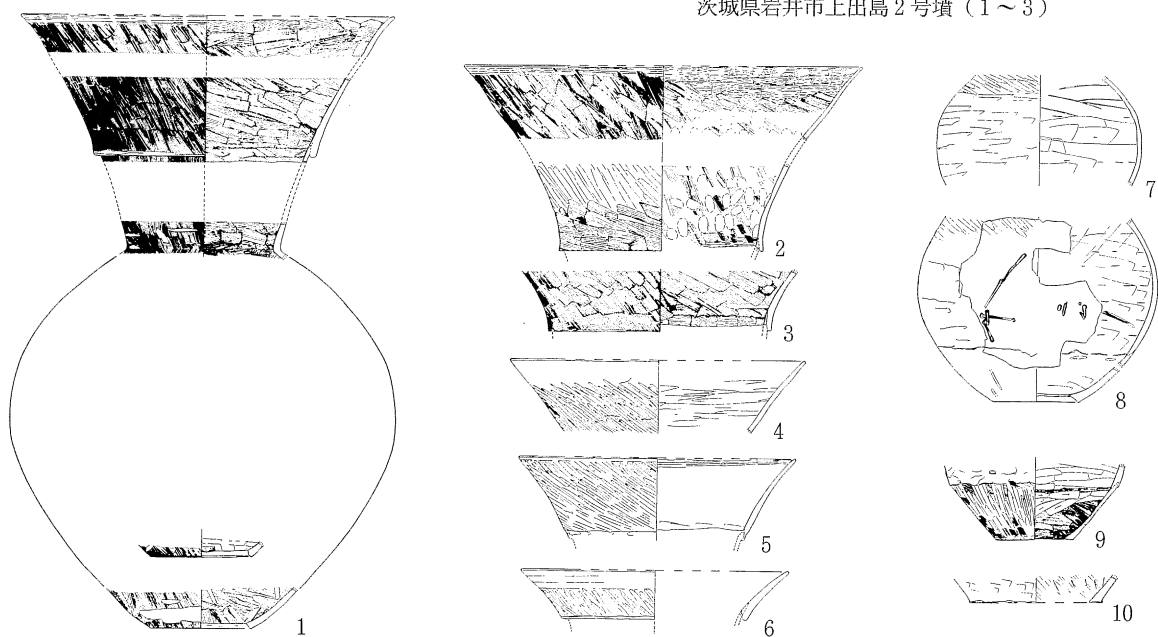


菊間新皇塚古墳

〔1～5 焼成前底部穿孔二重口縁壺

6 石釧（北槲）・7 内行花文鏡（北槲）・8 珠文鏡（南槲）〕

茨城県岩井市上出島2号墳（1～3）



大厩浅間様古墳（1～3 A類1・4～6 A類2・7～8 B類1・9～10 B類2）

第51図 市原台地出土の焼成前底部穿孔壺形土器比較資料

穿孔壺形土器と二重口縁壺の口縁部片を墳丘および周溝から検出している。その出土状況からテラス状に成形された墳頂部に配置されたものが、墳丘斜面や周溝にころがり落ちたものと解釈されている。いずれもやや肉厚気味で内外面共に刷毛目調整を施している。しかし、細部の作りはそれぞれ異なり、器形・法量においても相違が見られる。1は口径18cm前後の二重口縁壺。2は口径約16cm、器高約20.5cm、胴部径は約20cmを計測し、底部は突出しない。3は口径約18cm、器高約19cm、胴部径は約18cmを計測し、底部は突出気味である。4は口径約19cm、器高約25cm、胴部径は約25cmを計測し、底部は柱状に突出する。1から4の口縁部は、端部に粘土帯を張り付け複合口縁となり、下端は垂下する。5は口径約22cm、復元器高約32cm、胴径は約28cmを計測し、底部は柱状に突出する。また、複合口縁には張り付けにより4条単位からなる棒状浮文を施している。全体の法量は、口縁径16～22cm、器高19～32cm、胴部径を18～32cmを計測する。平均的な法量は、口縁径18.6cm、器高24.1cm、胴部径22.8cmを計測する。

菊間新皇塚古墳は、後方部径40m強を計測する前方後方墳と考えられている古墳で、南槨と北槨の2基の粘土槨を有する割竹形木棺が確認されている。2基は主軸方位を平行にしほぼ東西に置くものの、南槨に遺骸を埋葬した後、北槨を構築したと推定されている。副葬品は、南槨から珠文鏡1・短剣1・太刀1・刃子1・鑿1・ヤリガンナ2・鉄斧1・管玉5・ガラス小玉1、北槨から内行花文鏡1・石釧1・水晶勾玉1・琥珀勾玉1・管玉94・鉄剣1・刃子5・鉄鏃1・ヤリガンナ1・鎌2・鍬先状鉄器1・鉄斧1を検出する。焼成前底部穿孔二重口縁壺は周溝から検出されているが、その出土状況から墳丘に置かれたものが周溝に落ちたものと判断されている。壺は、器形をほぼ復元できた3固体の他に口縁部片や円形の透かしを有した胴部片などの計14点が報告されている。1は口径24.7cm、器高31cm、球形の胴部径23.8cmを計測する。2は口径22cm、器高27.7cm、胴部最大径を下半に置き22.2cmを計測する。3の口径28.1cm。4は口径22cm。5は口径22cm、復元器高24cm、胴部径22cmを計測する。口縁や有段部の細部の作りは微妙に異なるものの、器表面と口縁内面に丹彩を施し、刷毛目を残す篋ナデにより整形され、同種形態と考えてさしつかえないものとされている。全体の法量は、口縁径21～28.1cm、器高24～31cm、最大径を22～23.8cmを計測する。平均的な法量は、口縁径23.7cm、器高27.6cm、胴部径22.6cmを計測する。根田1号墳と法量比較から器高が高くやや大形化の傾向がうかがえ、全体的に器形が縦長の傾向を示す。

大厩浅間様古墳では、全体を復元できたものがなく、4タイプが検出されている。A類1は口縁径40cm強、大形で口縁内面に明瞭な稜線を有しない二重口縁を呈し、有段部からの立ち上がりが15～20cmと長くなることに特徴を有し、器表面刷毛目整形を施す。A類2は口縁径30cm前後を計測し、口縁は複合状の段を有するが、A類1同様に内面に明瞭な稜線を有さず、有段部からの立ち上がりが5～10cm弱で短く、器表面には丁寧な篋ナデ整形を施す。B類1は口縁を欠損し口縁形態不明であるが有段口縁壺ないし直口壺を成すものと判断され、胴部は球形で胴部径20cm前後～26cmを計測し、篋ナデによるものと雑な刷毛目と篋ナデを施すものがある。B類2は胴下端から底部片で全体の器形は不明だが、胴下端に鈍い稜線を有し長胴を思わせる器形を呈し、雑な整形を施す。A類とB類とでは、その器形や整形が異なり、時間的な差を生じるものと思われ、A類1・A類2→B類1→B類の大きく3段階の変遷が考えられ、第1→第2→第3主体の墳頂祭祀において使用されたことを暗に示唆するものかも知れない。4種の焼成前底部穿孔壺形土器のなかではA類1が本古墳築造頭初の第1主体部

墳頂祭祀に使用されたものとみなすことができるものと判断される。土器は頸部から口縁部の破片と底部小片を図示したのみで胴部を図示できなかったが、胴部小片を観察する限りでは長胴か球形かの明確な判断はできない。法量的にはかなり大形のものが予測され、他の類例から口縁径と胴径を比較した場合、口縁径と胴径とは極端の相違が無いことを考慮すると本例の場合の胴径も口縁径に応じた数値を計測することとなる。胴部の形態の判断としては、突出しない穿孔底部片からやや丸みを有する形態が想定され、図示した口径40cm強、器高65cm強を計る器形が復元される（第51図大厩浅間様古墳－1）。この種の大形の焼成前底部穿孔の壺形土器の類例としては、未公表で詳細は不明であるが千葉県長生郡長南町に所在する、全長93m前後を測る前方後円墳の油殿1号墳から口縁径40cm以上を計る大形の二重口縁壺が存在している⁽⁴⁾。

現時点で知れる浅間様古墳と同種の壺は、茨城県岩井市に所在する全長56mの前方後円墳の上出島2号墳⁽⁵⁾に頸部の発達した口縁径34cmを計る大形の壺に類例を求めることができる。古屋紀之氏⁽⁶⁾によると上出島2号例は、二重口縁壺C形式に分類し、「C形式の基準となる内側に稜のない口縁部は、…とC形式は極めて長胴であるものに限られる。」としている。浅間様例は長胴化の兆しはあるものの典型的な長胴の形態を示さないが、時期的には氏の言う6～7期に比定できるものと思われる。また、新皇塚古墳は、5期に比定している。根田1号墳・菊間新皇塚古墳・大厩浅間様古墳とも市原台地と言う小地域での焼成前底部穿孔壺形土器はそれぞれ特徴を異に、系譜の相違を確認するにとどまったが、壺形土器から根田辺田1号古墳→菊間新皇塚古墳→大厩浅間様古墳の変遷が可能であろう。

浅間様古墳と新皇塚古墳の共通する副葬品としては、石釧・管玉などがあるが、これらの比較ではどうであろうか。

石釧は、新皇塚例は外斜面に幅広い凹帯を放射状に匙面取りし、外面に匙面取りされた凹帯を1段めぐらすものである。これに対して浅間様例は、外斜面に細刻線を放射状に施し、これを幅広い凹帯2個1組として3箇所⁽⁷⁾に施し外斜面を3区分し、外面に匙面取りされた凹帯を1段めぐらしている。

碧玉製腕飾類は先学諸氏の研究により、鍬形石の祖形となったものがゴホウラ製貝輪を忠実に模したものを最古型式とし、祖形から離れた形態ほど後出することを明らかにしている。同じ貝輪を祖形とするであろう石釧も、形態変遷において基本的に同じ傾向にあるとみて差支えなからうとするのが大方の所見である。

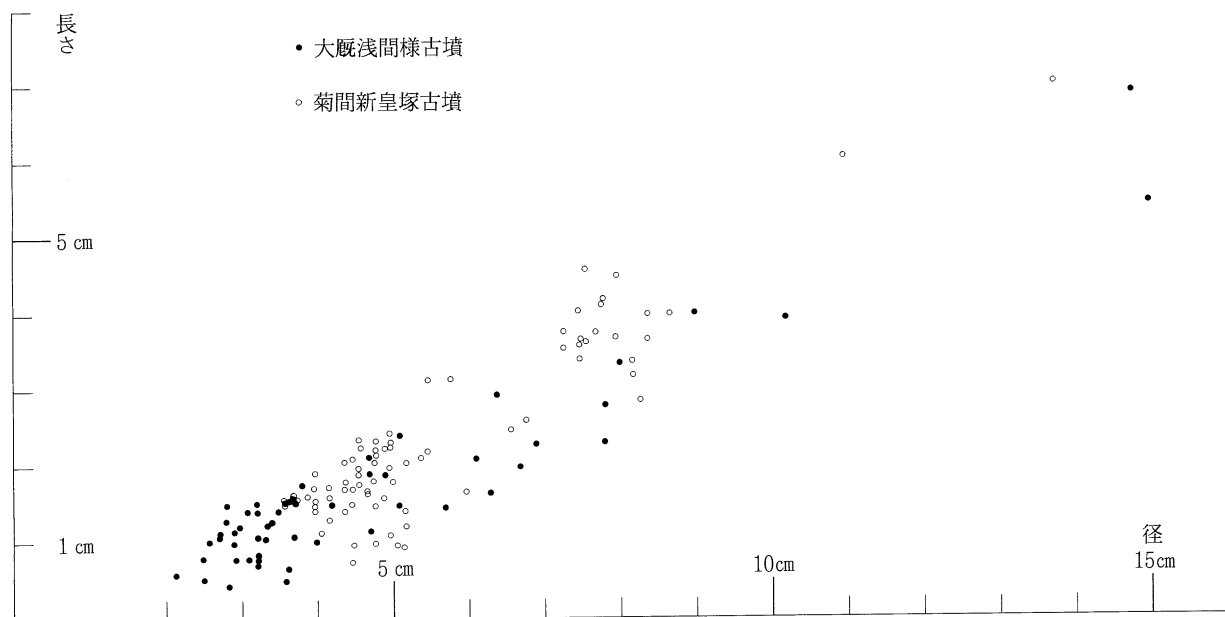
石釧の型式分類については、西田巖氏⁽⁷⁾がA～Eの5型式大別している。A型式は外斜面・外面共に細刻線を放射状に施したもの。B型式は外斜面にA型式同様、細刻線を放射状に施し、外面に匙面取りされた凹帯を2段めぐらすもの。C型式は外斜面に幅広い凹帯を放射状に匙面取りし、外面に匙面取りされた凹帯を1段めぐらすもの。D型式は外斜面にA型式同様、細刻線を放射状に施し、外面に匙面取りされた凹帯を1段めぐらすもの。D'型式として、D型式とほぼ同形態だが、外斜面に施した細刻線のうち4箇所で刻みの間隔を広くとっているもの。E型式として、石釧を2つ合わせたように上下に外斜面をもつものである。A型式→D→B→Eの変遷が可能とし、C型式については明らかにしていない。

また、蒲原宏行氏⁽⁸⁾は形態からⅠ～Ⅶの7種の大別し、刻みの種類でa・a'・b・cに分け、7類22型式の分類をしている。Ⅰ類は斜面と側面に刻みを有するもの。Ⅱ類は斜面に刻みを有し、側面に1段の匙面となるもの。Ⅲ類は斜面に刻みを有し、側面は2段の匙面となるもの。Ⅳ類は斜面に刻み

を有し、側面は3段以上の匙面となるもの。Ⅴ類は上・下に斜面を有し、環体高と環体幅が同程度のもので、刻みを上下にのけるものと片面のみのものがある。Ⅵ類はⅤ類同様上下に斜面を有し、環体高が環体幅の2倍を越えるものとし、刻みは上下両斜面にある。Ⅶ類は原則として刻みを有さず、斜面も側面も匙面によって構成されるものとしている。a種刻みは断面V字またはU字形の刻みを密に配するもの。b種刻みは面状に幅広く削り出すことによって山と谷を構成し、稜には沈線を入れるものが多い。c種刻みは幅広の匙面を放射状に配するもので、稜には沈線を入れないものが多い。a'種刻みとして、a種刻みの間にb種刻み、あるいはc種刻みを等間隔に配するものを上げている。

西田分類では、新皇塚例はC型式、浅間様例はD'型式からの変化とみることが可能で、C型式はD'型式からのさらなる変化（祖形から離れた形態）とみることができ、D'型式→C型式、浅間様例→新皇塚例の変遷を経るものであろう。蒲原分類では、新皇塚例はⅡ類cに、浅間様例はⅡ類a'とみることができ、浅間様例が古相を呈している。

管玉類の比較ではどうであろうか。新皇塚例の北塚では、最大で長さ7.44cm径1.65cm、最小で長さ0.69cm径0.45cmを計る94例中完形品84点がある。大形品3点を除くと長さ3.0cm～4.9cm・径0.7～0.9cmの中形のグループ21点と、長さ1.4cm～2.5cm・径0.4～0.55cmの小形のグループ55点とに大別され、長さ0.69cm～1.18cm・径0.45～0.52cm以下の極小の5点がある。浅間様例では、最大で長さ6.95cm径1.48cm、最小で長さ0.45cm径0.28cmを計る55例中完形品52点がある。大形品2点を除くと長さ3.3cm～4.0cm・径0.78～1.02cmが3点と、長さ1.4cm～2.95cm・径0.31～0.89cmが24点、長さ0.45cm～1.29cm・径0.21～0.47cm以下の23点がある。大塚例に極小が多く見られ、小形の製品を古相と見なすと、浅間様古墳→新皇塚古墳の変遷となる。



第52図 大塚浅間様古墳と菊間新皇塚古墳出土管玉計測比較図

共通副葬品ではないが、大厩浅間様古墳副葬品の特徴的な遺物としてガラス勾玉がある。本ガラス勾玉については、小瀬康行氏⁽⁹⁾によると、畿内と関東で33箇所156例が知られ、関東では19箇所61例が知られている。小瀬は関東地方出土の勾玉を3分類し、「気泡列が頭部から尾部方向に走る勾玉である。気泡列は微小気泡が直線状に連鎖して形成されている。気泡の大きさが極めて微小であり、肉眼でこの気泡列を確認するのはかなり難しい。ガラス内部には不純物や気泡列以外の気泡は少なく、そのためガラスはきわめて透明で光をよく通す。コバルトブルーの勾玉に限られる形式である。」とし、浅間様例をⅡ群に分類している。また、浅間様例以外のⅡ群は「長さが1.4cm+-0.2cmに集中しており、他の類型と比べてきわめて規格性が高いもので少なくとも5世紀初頭を上限と考えることができるとし、定形よりずっと小形の浅間様例はこの時期をさかのぼる」ことを示唆し、兵庫県城の山古墳例からⅡ群のコバルトブルー勾玉は4世紀末を初現期であろうとしている。

浅間様古墳と新皇塚古墳の比較では、焼成前底部穿孔の壺形土器からは新皇塚古墳→浅間様古墳の変遷が、副葬品では浅間様古墳が古相を呈する結果となる。古墳築造時期については、副葬品が被葬者の所有物となった時期や伝世的な性格があることなどの時間的な問題を考慮する必要があり、被葬者の埋葬時に行われたであろう墳丘祭祀に使用された焼成前底部穿孔の壺形土器を築造時期の判断とすることが妥当であろう。

(註) および参考文献

1. 斎木勝・種田齊吾・菊地真太郎他 1974年「市原市菊間遺跡」財団法人千葉県都市公社
2. 米田耕之助 1985年「根田遺跡「市原市文化財センター年報・昭和60年」財団法人市原市文化財センター
3. 高田博・山口直樹・梶淳他 1986年「千原台ニュータウンⅢ・草刈遺跡(B区)」財団法人千葉県文化財センター
4. 車崎正彦氏の御教示による
5. 大森信英・高根信和他 1975年「上出島古墳群」茨城県岩井市教育委員会
6. 古屋紀之 1998年「墳墓における土器配置の系譜と意義・東日本の古墳時代の開始」「駿台史学第104」駿台史学会
7. 西田巖 1990年「石釧について」「京都府平尾城山古墳」財団法人古代学協会
8. 蒲原宏行 1987年「石釧研究序説」「比較考古学試論」雄山閣出版
9. 小瀬康行 1989年「古墳時代ガラス勾玉の成形法について」考古学雑誌第75巻第1号
10. 塩谷修 1998年「前期古墳から中期古墳へー古墳出土の土器(関東)」「第3回東北・関東前方後円墳研究大会シンポジウム資料一」

写真図版



古墳近景（南から）



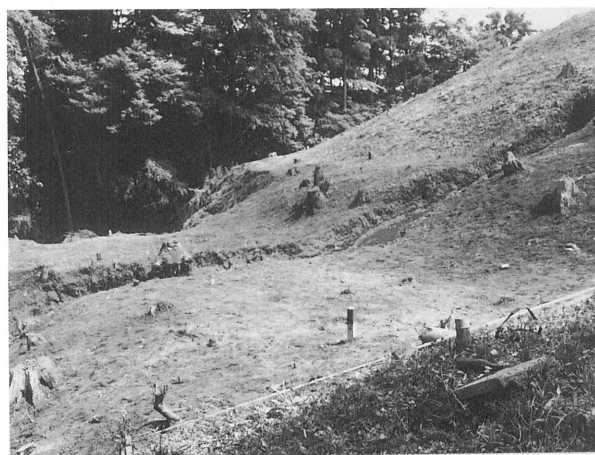
墳頂部浅間宮祠近景



墳丘東側近景



墳丘北側斜面近景（東から）



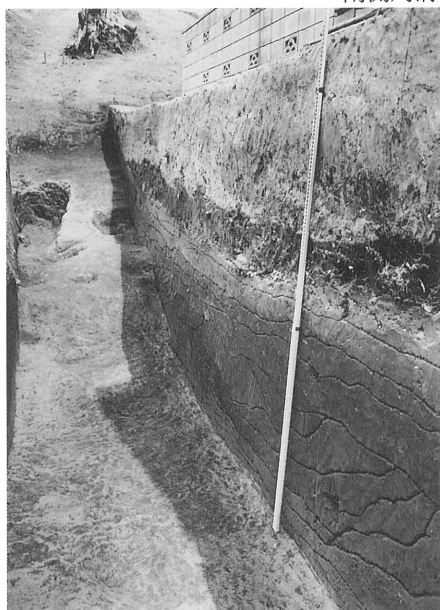
墳丘北側斜面近景（西から）



南側周溝トレンチ全景



周溝土層（墳丘側から）



周溝土層（南から）



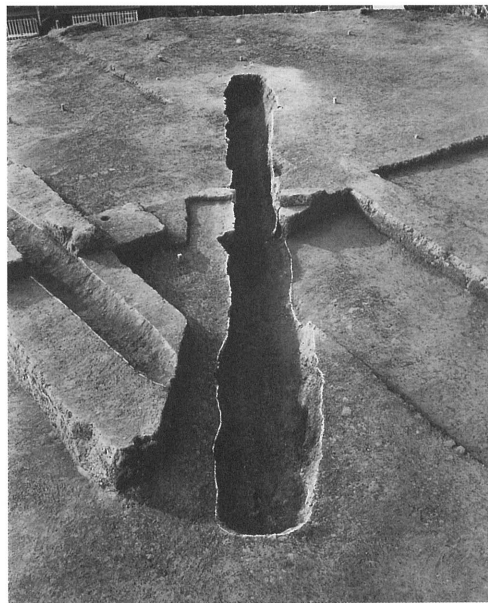
北側斜面近景



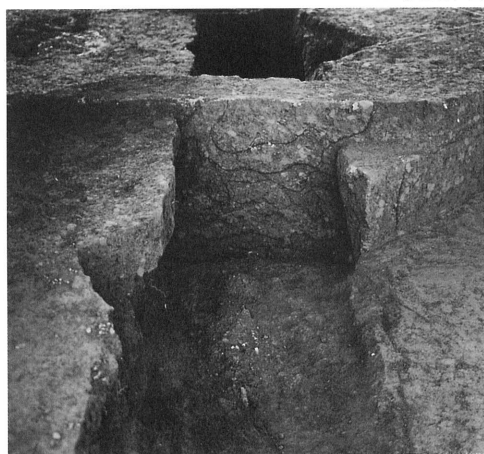
墳頂部土層（南から）



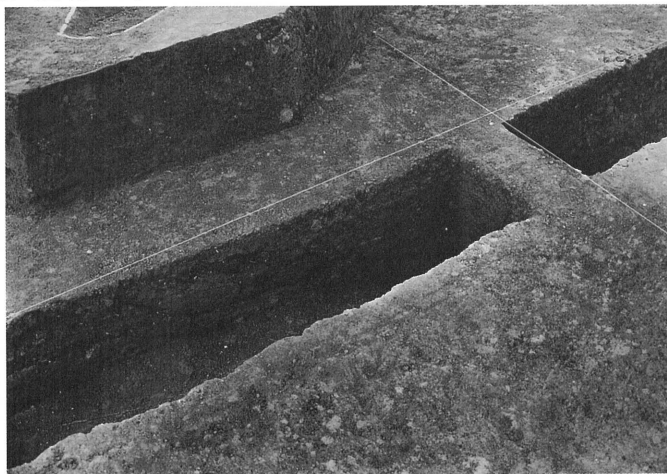
1号主体部全景（西北から）



同全景（東南から）



1号主体部覆土（中央付近）



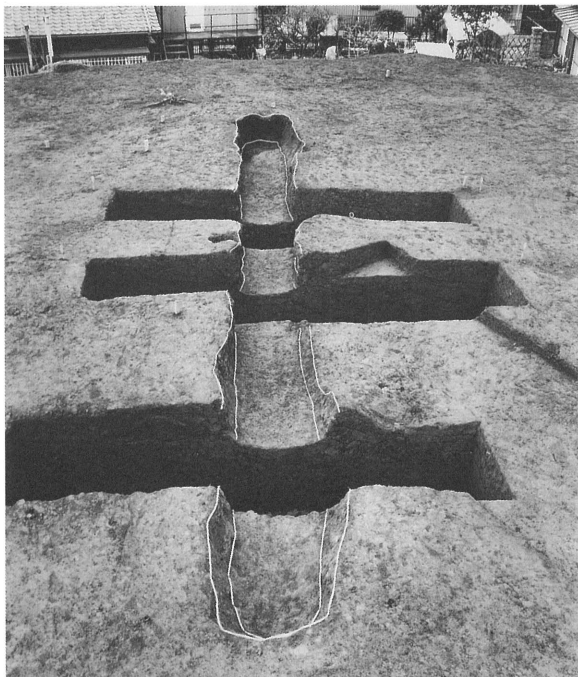
同覆土（東側）



1号主体部副葬品出土状況



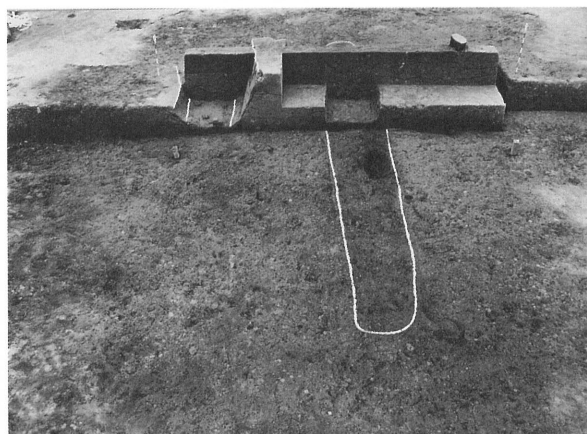
同覆土（中央付近）



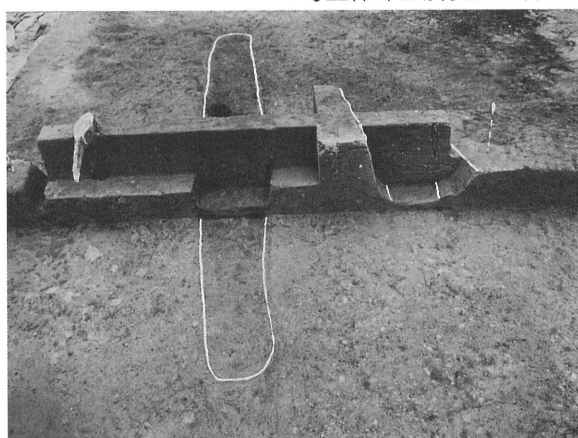
1号主体部埋設状況土層



同主体部埋設状況土層（中央付近）



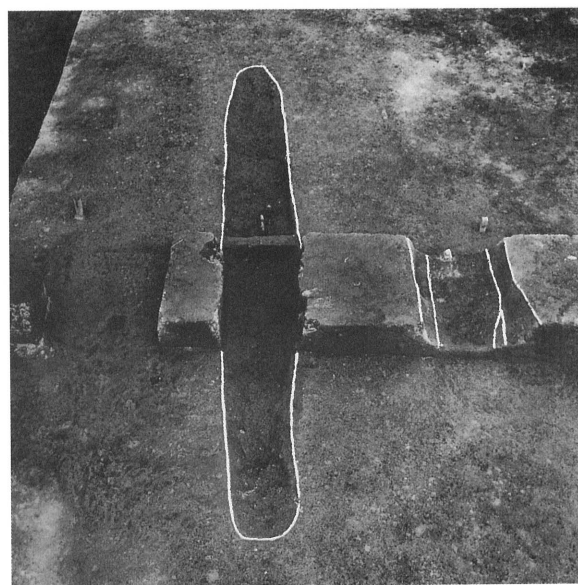
2・3号主体部全景（東から）



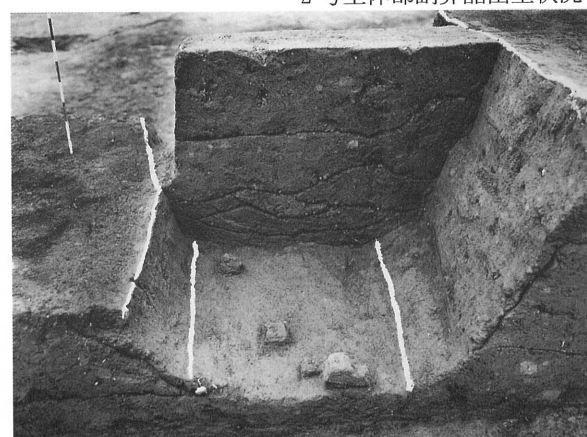
2・3号主体部全景（西から）



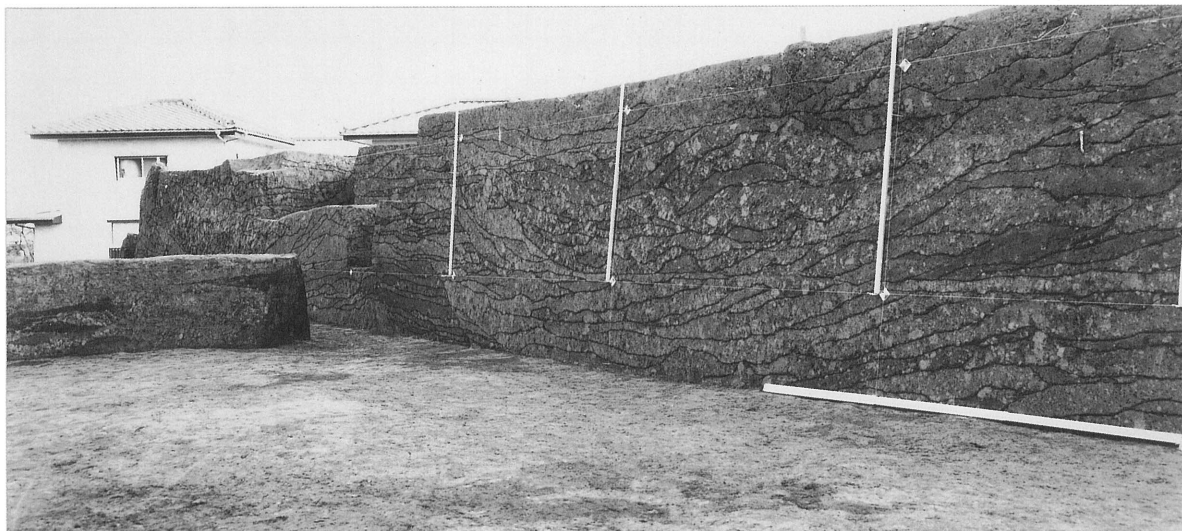
2号主体部副葬品出土状況



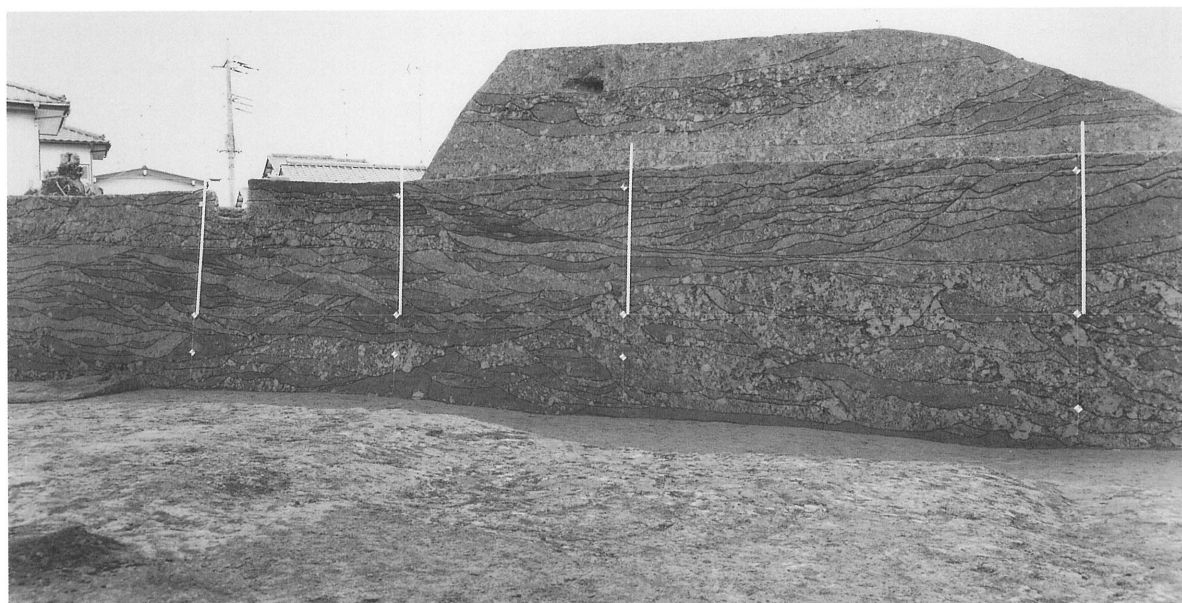
2・3号主体部全景（西から）



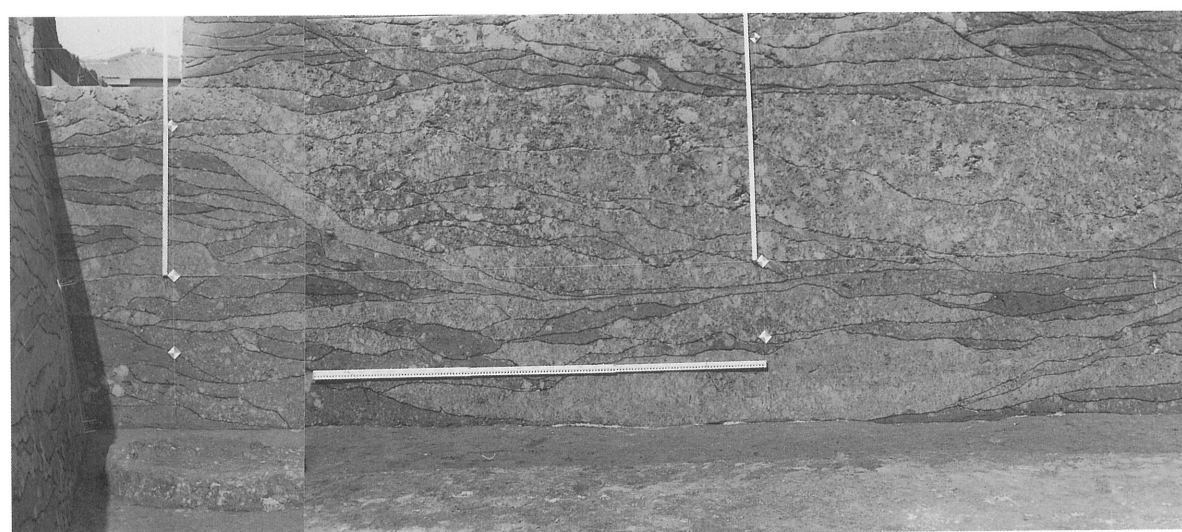
3号主体部副葬品出土状況



墳丘土層B-B' 上層部（北西から）



墳丘土層B-B' 上層部（北から）



墳丘土層A-A' 下層部中央付近の円錐台形盛土



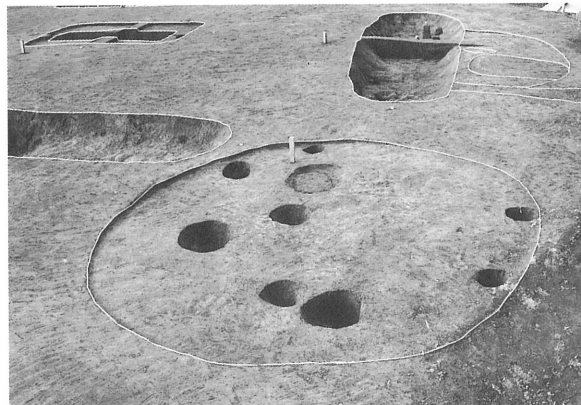
墳丘下の状況と1号住居跡



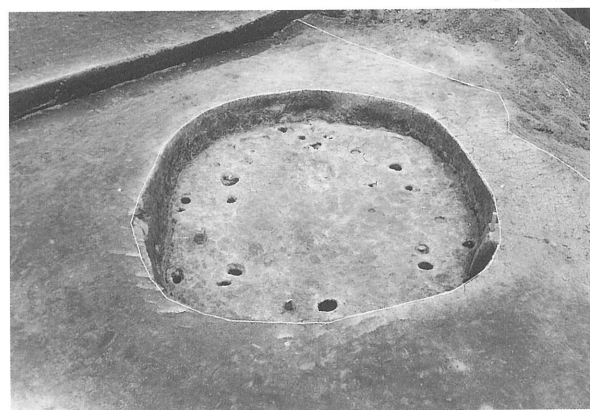
1号住居跡



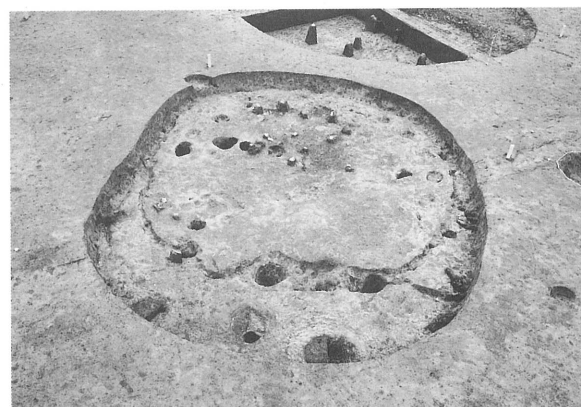
2号住居跡



3号住居跡



4号住居跡



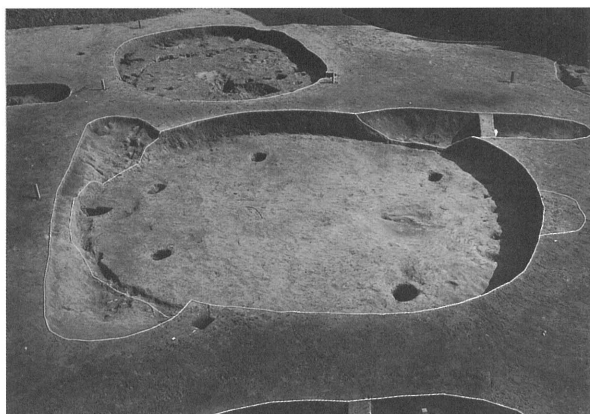
5号と6号住居跡



7号住居跡



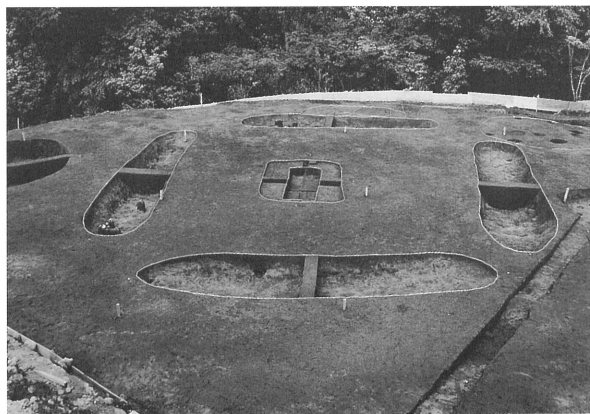
8号住居跡



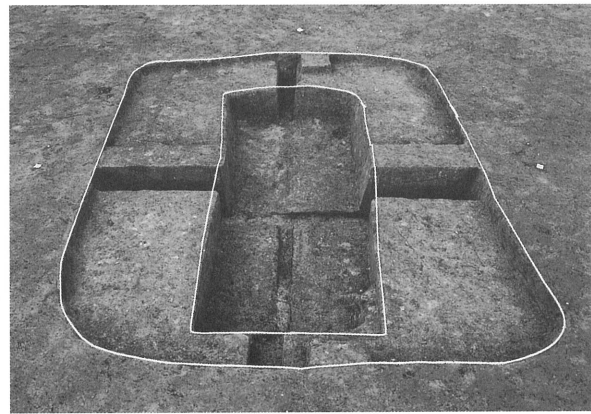
9号住居跡



11号住居跡



1号方形周溝墓



同主体部



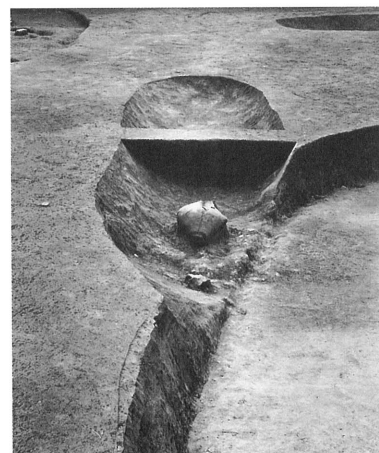
2号方形周溝墓



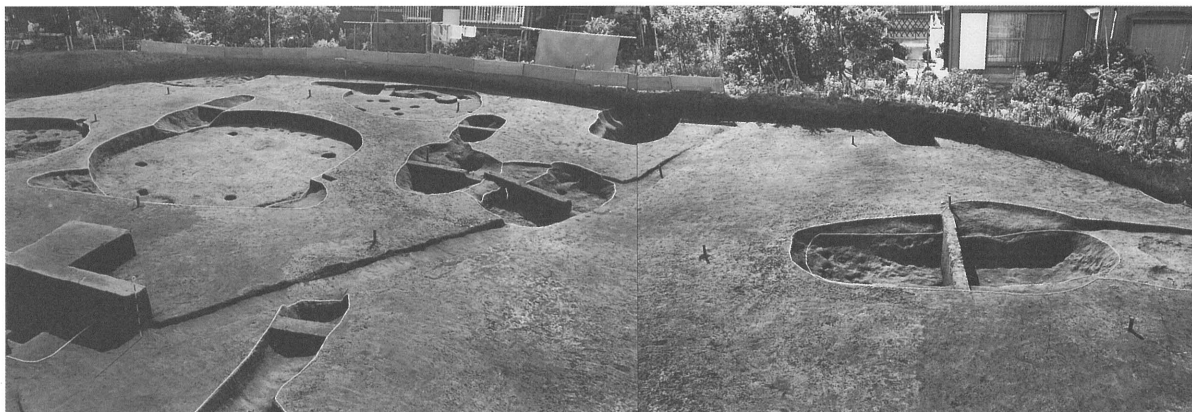
同遺物出土状況



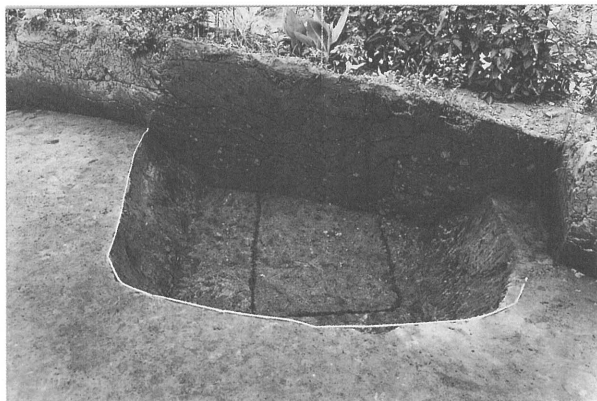
3号方形周溝墓



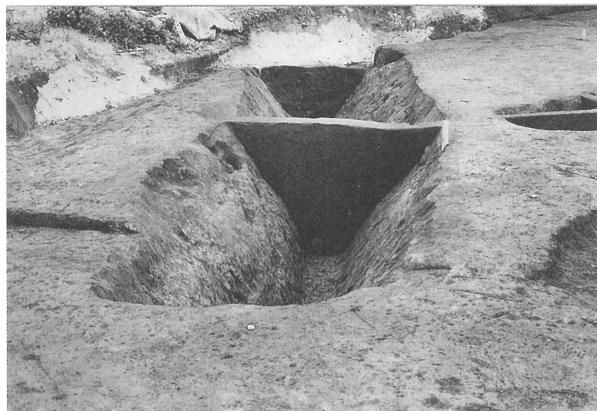
同遺物出土状況（南溝）



4号方形周溝墓と墳丘下西半分



4号方形周溝墓主体部



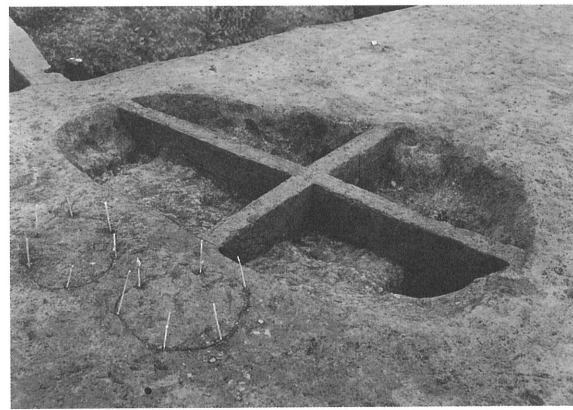
1号溝



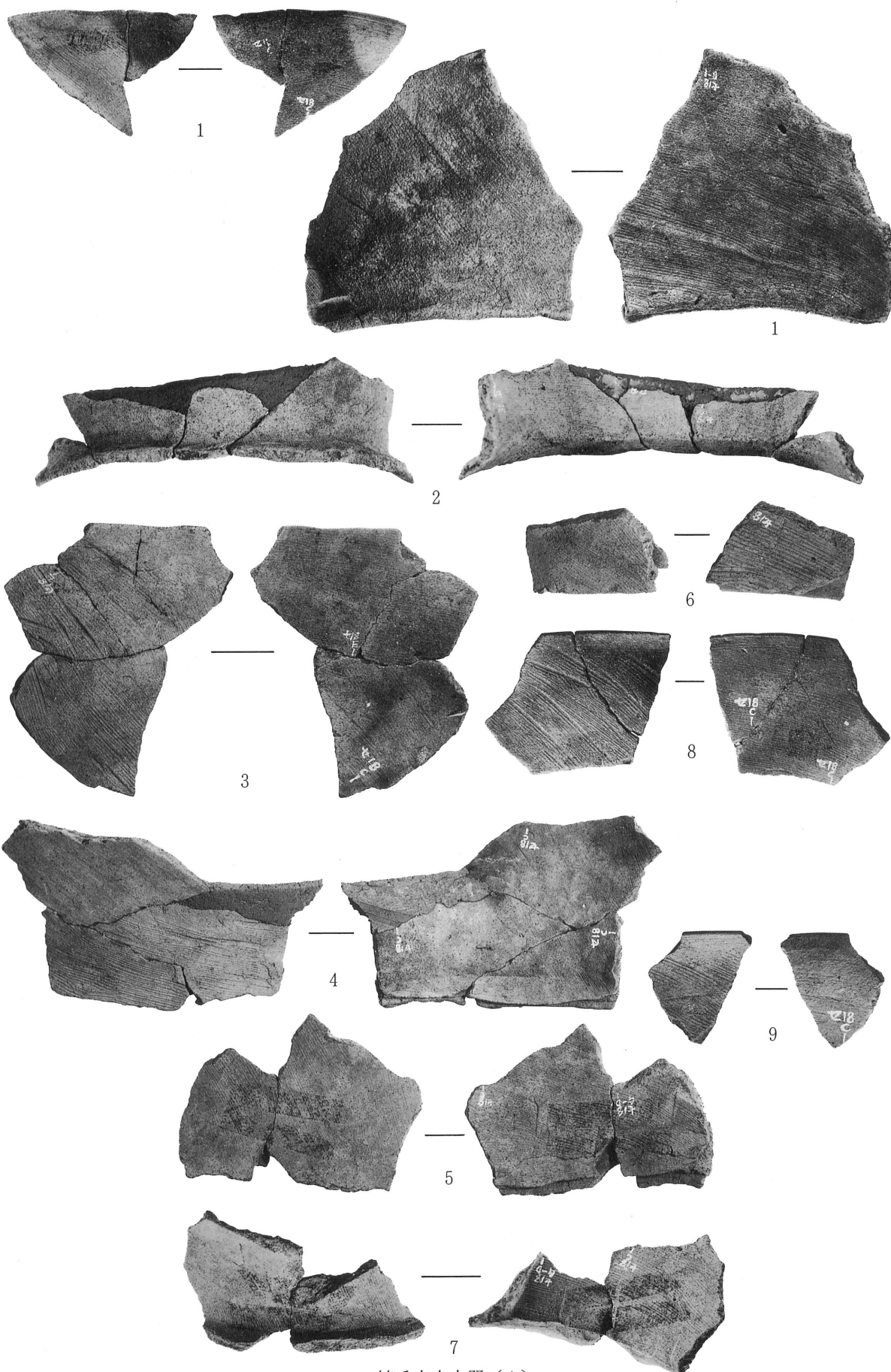
2号溝



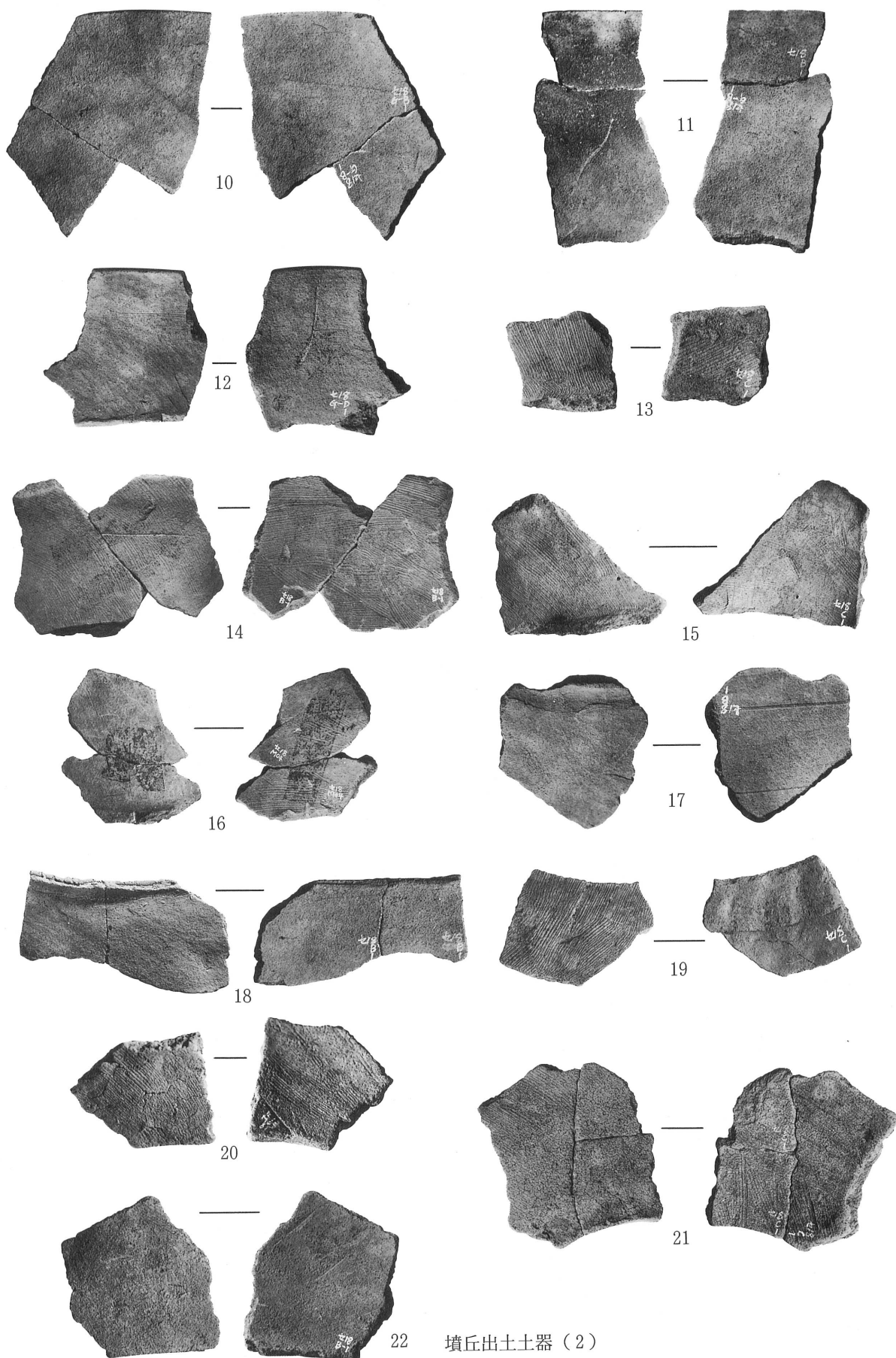
墳丘下西半分



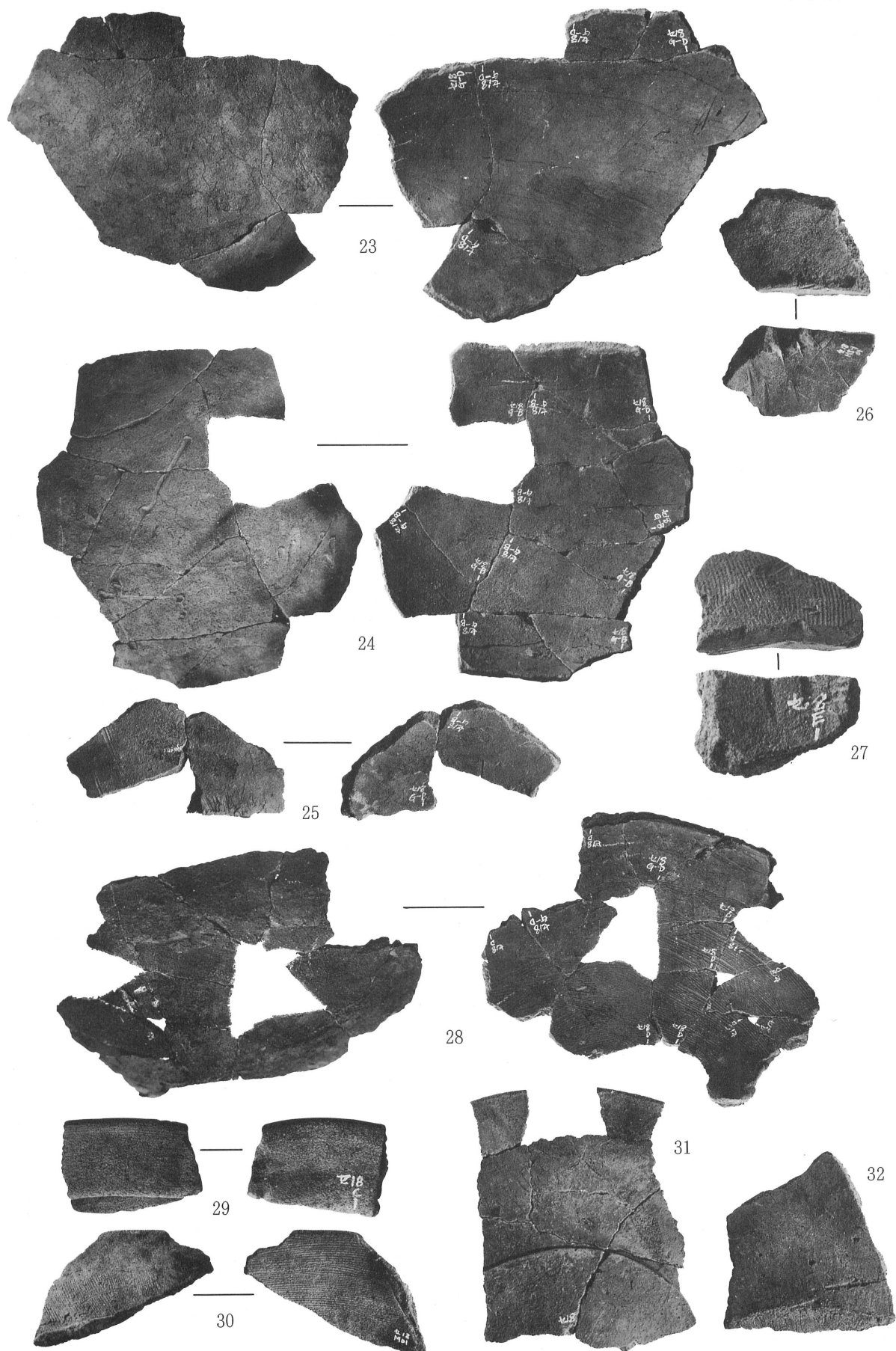
1号土壇



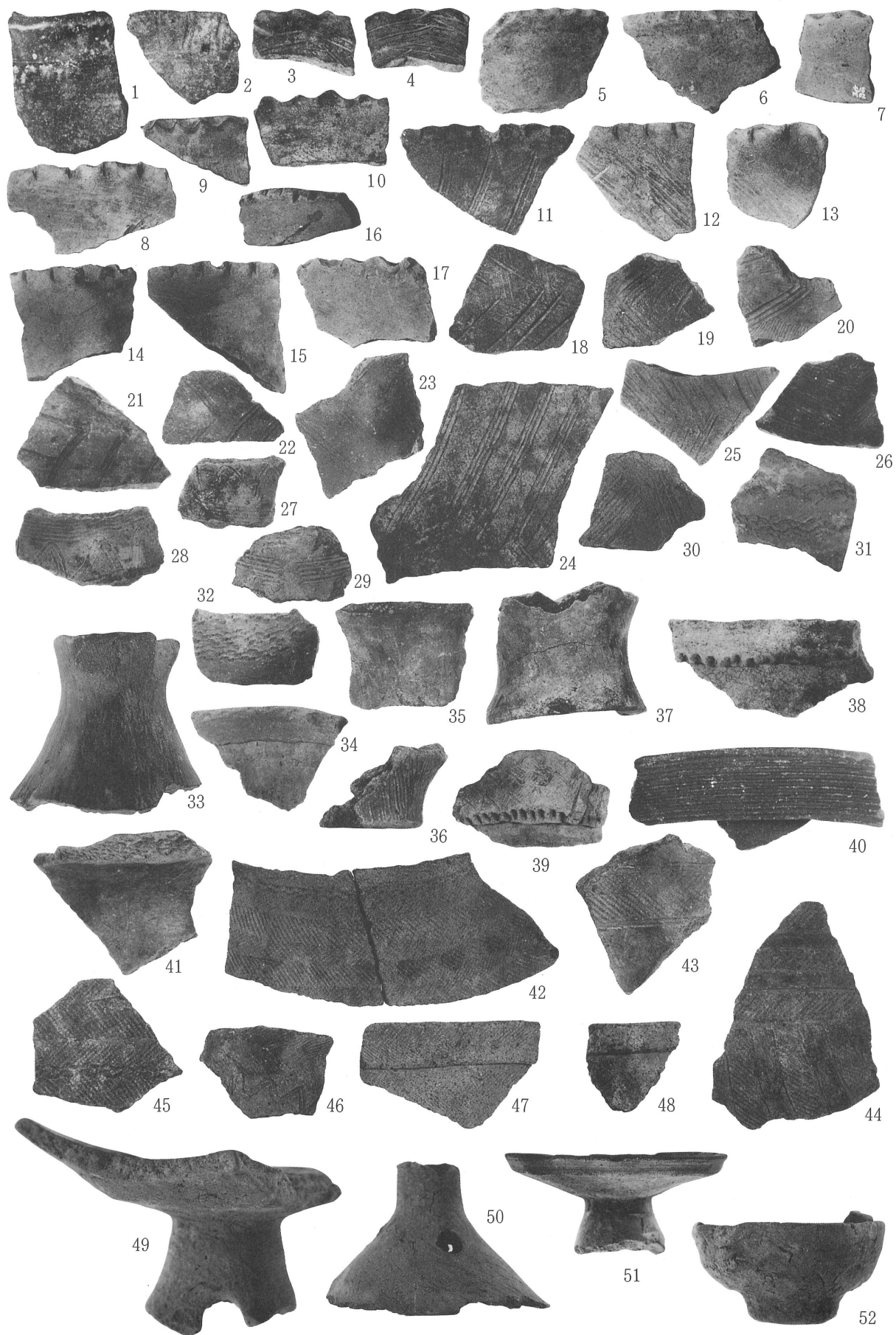
墳丘出土土器（1）



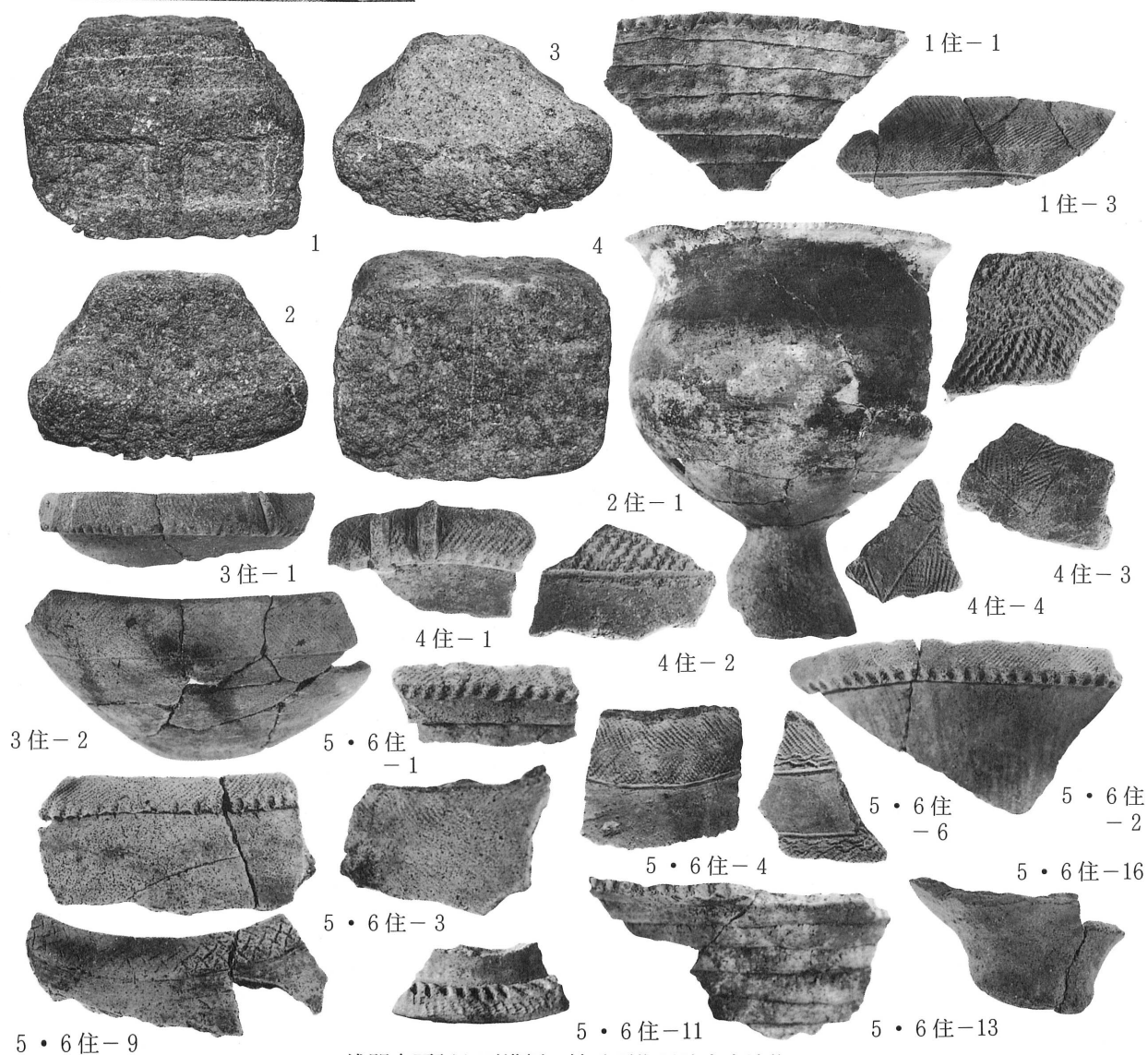
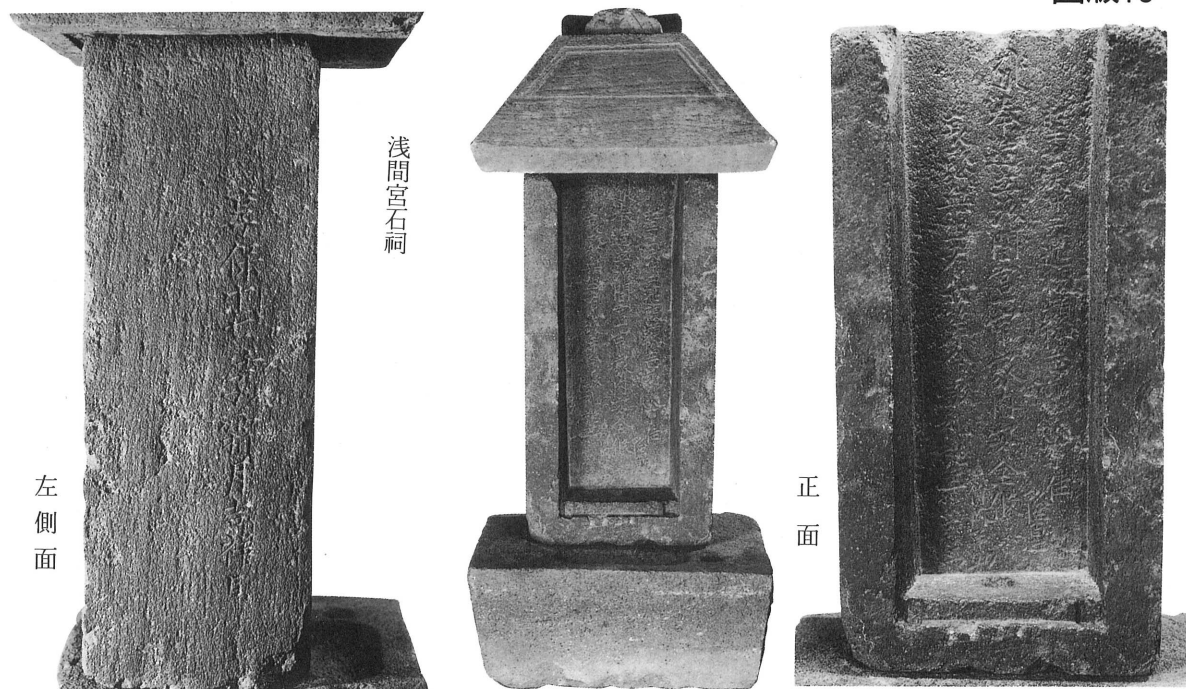
墳丘出土土器（2）



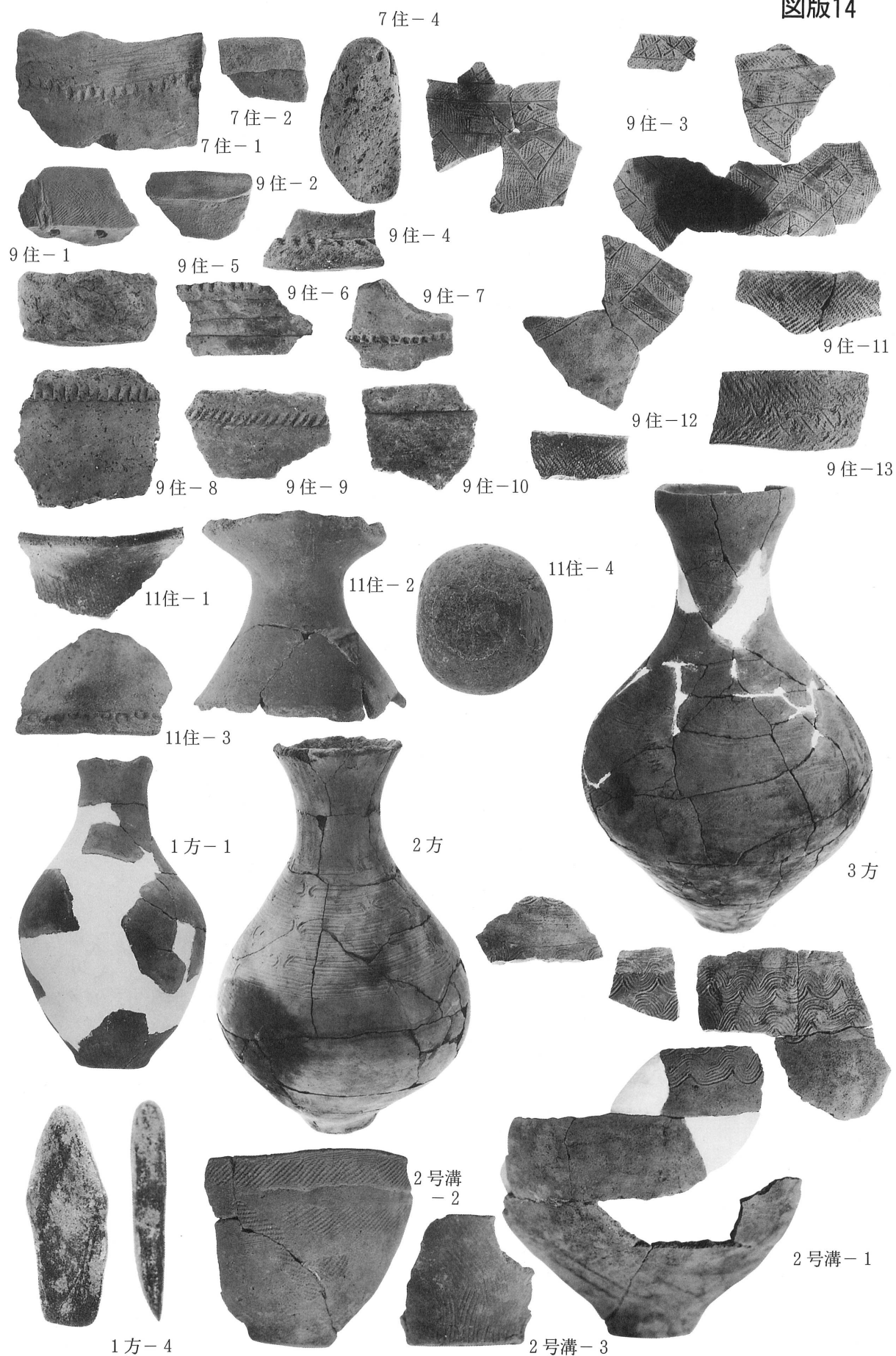
墳丘出土土器 (3)



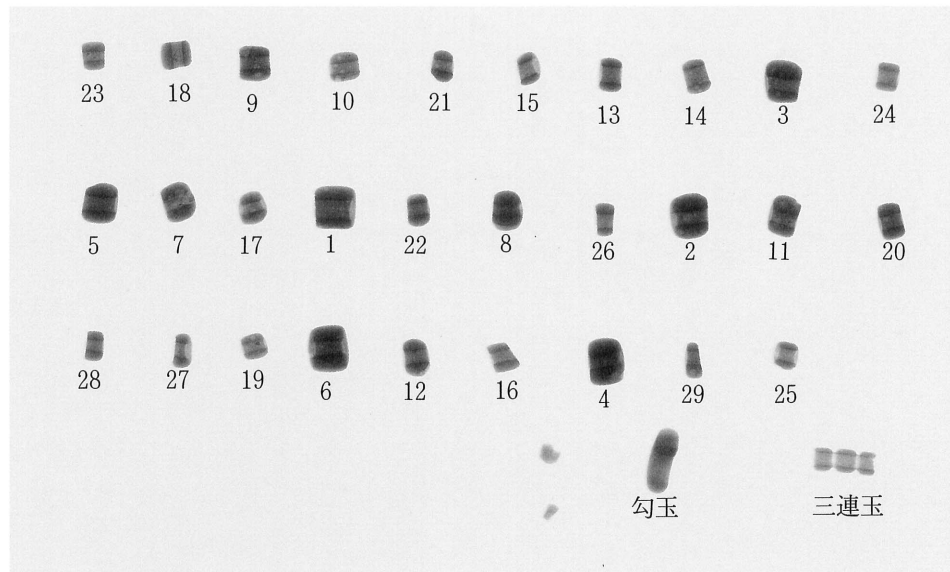
盛土出土土器



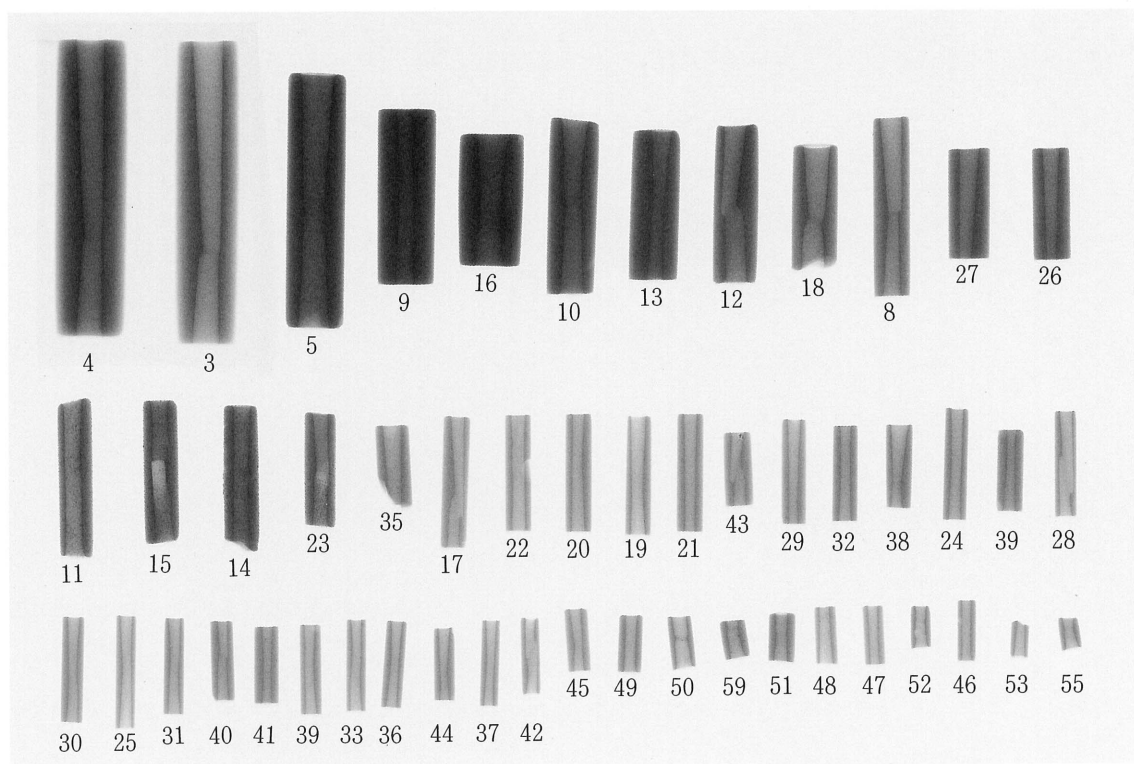
浅間宮石祠と石塔類・墳丘下住居跡出土遺物



墳丘下の住居跡・方形周溝墓・溝出土遺物



1号主体部ガラス玉類X線写真



1号主体部管玉X線写真

報 告 書 抄 録

ふ り が な	いちはらしおおやせんげんさまこふん							
書 名	市原市大厩浅間様古墳							
副 書 名								
巻 次								
シ リ ー ズ 名	財団法人市原市文化財センター調査報告書							
シ リ ー ズ 番 号	第42号							
編 著 者 名	浅利幸一・田所 真							
編 集 機 関	財団法人市原市文化財センター							
所 在 地	〒290-0011 千葉県市原市能満1489番地 TEL 0436-41-7300							
発 行 年 月 日	1997年9月30日							
ふ り が な 所 収 遺 跡 名	ふ り が な 所 在 地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおやせんげんさまこふん 大厩浅間様古墳	ちばけんいちはらし おおやあざかわかみだい 千葉県市原市大厩字川上台1395-1 他	12219	セー18	35度 31分 23秒	140度 9分 35秒	19840402 ～ 19840920 19900110 ～ 19900630	2,171	宅地造成
所収遺跡名	種 別	主 な 時 代		主 な 遺 構		主 な 遺 物	特 記 事 項	
おおやせんげんさまこふん 大厩浅間様古墳	古墳 集落跡 墳墓	弥生時代中期～後期 古墳時代前期		竪穴住居跡 11軒 方形周溝墓 4基 溝 2条		弥生中期壺 古墳時代 珠文鏡・石釧 瑪瑙勾玉 琥珀勾玉 ガラス勾玉 ガラス三連玉 管玉 ガラス小玉	前期古墳に位置づけられる径50m強の円形の円墳で墳丘からは3基の主体部が検出され、1号主体部から珠文鏡と石釧の他多種の玉類を出土している。	

財団法人 市原市文化財センター調査報告書 第42集

市原市大厩浅間様古墳調査報告書

平成11年3月1日 印刷

平成11年3月15日 発行

編集 財団法人 市原市文化財センター

発行 財団法人 市原市文化財センター

千葉県市原市能満1489番地

Tel 0436 (41) 7300

株式会社 一 研

印刷 三陽工業株式会社